長野市の埋蔵文化財第117集

篠ノ井遺跡群（6）

しのの　いいせきぐん

－主要地方道長野上田線　塩崎バイパス　国庫補助事業地点－

２００７年３月

長野市教育委員会

序

長野県の北部、南北に広がる善光寺平のほぼ中央に位置する長野市では、長野冬季オリンピックの開催、長野新幹線・長野自動車道・上信越自動車道などの交通大動脈の開通を背景に、市内道路網の整備も進み、田園風景の広がるかつての景観も大きく変化しました。

これによって現代に生きる我々の生活は利便性を増しましたが、その陰で地中に眠る先人たちの生きた証―埋蔵文化財―が破壊され、消滅していった事実を忘れてはならないでしょう。

ここに長野市の埋蔵文化財第117集として上梓いたしました本書は、平成11年から平成18年度にかけて、主要地方道長野上田線道路改良事業として新設される塩崎バイパス建設に先立って実施された、篠ノ井遺跡群の埋蔵文化財緊急発掘調査報告書です。

弥生時代から中世にいたる集落域、弥生時代から古墳時代の墓域と時代ごとに場所を変えながら、千曲川が形成した自然堤防上に刻まれた先人の足跡は、現代に繋がる歴史資料として地域史を考えるこの上もない材料となることでしょう。

また、水晶製三輪玉、銅地金張巡方をはじめに市内初出土の遺物も少なくなく、弥生時代以来保有されていた豊富な物品を目の当たりにして、先人の巧みな技に目を見張り、往時に夢を馳せる楽しみを与えてくれてもいます。

発掘調査で得られた成果は過去のそれぞれの時代に生きた人びとの生活の一端を垣間見たに過ぎませんが、地域史解明のための一助として、関係各方面に広くご活用いただければこの上もない喜びであります。

最後になりましたが、長期にわたる調査のなかで多大なご支援ご助力をいただいた長野県長野建設事務所をはじめ、関係者に対して本書の上梓をもって深く感謝の意を表するものです。

平成19年３月

長野市教育委員会
教育長　立　岩　睦　秀

例　言

1　本書は地方道路交付金事業（主要地方道長野上田線　長野市篠ノ井塩崎）にともない、平成11年度～平成18年度にかけて継続的に実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　発掘調査事業は、長野県長野建設事務所長と長野市長との契約に基づき、長野市教育委員会が担当し、長野市埋蔵文化財センターが実施した。

3　発掘調査は長野市篠ノ井塩崎字注連盡・高畑・高畑河原・五倫にわたる。周知の埋蔵文化財包蔵地「篠ノ井遺跡群」の範囲に該当し、調査位置を明示するための地点名として「主要地方道長野上田線塩崎バイパス地点」と呼称する。なお、遺跡略記号は「SNNU」である。

4　本書では、調査によって確認された遺構および出土遺物について、その概要を提示することを第一義とした。資料掲載に関わる要領は次のとおりである。

・検出した遺構は各地区ごとに全体図ならびに一覧表として提示し、各地区報告の最初に概要を記した。

・個別報告の遺構は、残存状況が良好で、出土遺物に実測個体が複数あるものを抽出し優先した。

・個別報告については概要後に時代を追って掲載するよう努めた。ただし、重複遺構が多いため、時代を前後して掲載した場合が少なからず存在することを断っておく。

・出土遺物は各遺構個別報告の中に種別に関わらず掲載した。

・鉄製品・青銅製品などについては、本書編集時点で保存処理が完了していない。このため、保存処理以前の実測図・写真を掲載している。保存処理完了後の詳細については、あらためて提示する機会をもちたい。

5　掲載図版については以下のとおりである。

・掲載した方位はすべて座標北を示す。

・図中に示した座標・標高は、平面直角座標系（国家座標）の第Ⅷ系の座標値と日本水準原点の標高を基準としている。なお、日本測地系2000適用以後であるが、一連の道路であるⅠ～Ⅸ区（篠ノ井遺跡群５）での調査結果との整合性を図るため、旧日本測地系に基づいている。

・遺構の略号は、住居；SB　掘立柱建物；SH　井戸；SE　土坑；SK　ピット；P　周溝墓・古墳；SZである。

・遺構図は1/80、遺物実測図は土器類；1/4、土器類拓影・金属器・石器；1/3、玉類・銅銭；1/2を基本縮尺としたが、例外も多いため適宜縮尺を提示している。

・遺構図中で使用したトーンは以下のとおりである。

焼土範囲　　炭範囲

・遺物図の断面は須恵器を黒塗りとした。また、赤色塗彩・黒色処理の表現は以下のとおりである。

赤色塗彩　　黒色処理

6　国家座標基準点の設置ならびに検出遺構等の単点測量は、（株）写真測図研究所に委託した。

7　本書作成における作業は、Ⅹ区～XIII区を風間栄一、Ａ区～Ｄ区を石丸敦史がそれぞれ担当し、遺構図整理は宮川明美、出土金属器等応急処置は山野井智子、遺物写真撮影は森田利枝が分担担当した。

8　本書はⅠ章～Ⅶ章を風間栄一、Ⅷ章～XIII章を石丸敦史が執筆し、XII章３　瓦・瓦塔を柴田洋孝が分担執筆した。

9　本書の編集は、矢口忠良・青木和明の指導・助言のもと、風間・石丸が担当した。なお、編集作業は執筆分担に基づき実施しており、表現や用字等で必ずしも統一を図っていない。

10　本書によって報告した資料は、長野市教育委員会（担当　長野市埋蔵文化財センター）で保管している。

本　文　目　次

序文
例言
Ⅰ　調査経過 ……1
　1　調査に至る経過 ……1
　2　発掘調査の経過 ……2
　3　調査体制 ……6
Ⅱ　篠ノ井遺跡群の位置と調査地点 ……8
　1　篠ノ井遺跡群の位置 ……8
　2　篠ノ井遺跡群と調査地点 ……10
Ⅲ　立会調査の結果 ……12
Ⅳ　X区の調査 ……14
　1　②地点の概要 ……14
　2　②地点で検出された遺構と出土遺物 ……19
　3　③地点の概要 ……42
　4　③地点で検出された遺構と出土遺物 ……48
　5　①地点の概要 ……73
　6　①地点で検出された遺構と出土遺物 ……76
　7　④地点の概要 ……88
　8　④地点で検出された遺構と出土遺物 ……90
Ⅴ　XI区の調査 ……93
　1　XI区の概要 ……93
　2　検出された遺構と出土遺物 ……100
Ⅵ　XII区の調査 ……112
　1　XII区の概要 ……112
　2　検出された遺構と出土遺物 ……121
Ⅶ　XIII区の調査 ……207
　1　XIII区の概要 ……207
　2　検出された遺構と出土遺物 ……208
Ⅷ　A区の調査 ……212
　1　A区の概要 ……212
　2　検出された遺構と出土遺物 ……216
Ⅸ　B区の調査 ……227
　1　B区の概要 ……227
　2　検出された遺構と出土遺物 ……229
Ⅹ　C区の調査 ……233
　1　C区の概要 ……233
　2　検出された遺構と出土遺物 ……235
XI　D1区の調査 ……251
　1　D1区の概要 ……251
　2　検出された遺構と出土遺物 ……254
XII　D2区の調査 ……259
　1　D2区の概要 ……259
　2　検出された遺構と出土遺物 ……262
XIII　D3区の調査 ……269
　1　D3区の概要 ……269
　2　検出された遺構と出土遺物 ……272

図　版　目　次

表1　年度別発掘調査実施概要 ……2
表2　平成11～13年度発掘調査実施経過一覧表 ……4
表3　平成15～17年度発掘調査実施経過一覧表 ……5
表4　篠ノ井遺跡群調査実施地点一覧表 ……10
表5　X区②地点検出遺構一覧表 ……16・17
表6　臼玉計測表 ……21
表7　X区③地点検出遺構一覧表 ……44～46
表8　カワラケ計測表 ……71
表9　X区①地点検出遺構一覧表 ……74
表10　X区④地点検出遺構一覧表 ……89
表11　XI区検出遺構一覧表 ……94・95
表12　XII区検出遺構一覧表 ……114～118
表13　XIII区検出遺構一覧表 ……208
表14　A区1次面検出遺構一覧表 ……213
表15　A区2次面検出遺構一覧表 ……215
表16　B区検出遺構一覧表 ……228

表17　C区検出遺構一覧表 ……233
表18　D1区検出遺構一覧表 ……253
表19　D2区検出遺構一覧表 ……260
表20　D3区検出遺構一覧表（1） ……269
表21　D3区検出遺構一覧表（2） ……270
図1　調査地と字名 ……1
図2　調査地区の名称 ……3
図3　篠ノ井遺跡群位置図 ……8
図4　篠ノ井遺跡群調査地点位置図 ……11
図5　立会実施地位置図 ……12
図6　②地点遺構分布図 ……15
図7　方形ピット群平面実測図 ……18
図8　SB091出土遺物実測図 ……19
図9　SB064・SB065実測図 ……20
図10　SB064・SK088出土鉄製品実測図 ……21
図11　SB064・SK088出土臼玉実測図 ……21
図12　SB064・SB087・SK088実測図 ……22
図13　SB064・SB087出土土器実測図 ……23
図14　SB080実測図 ……24
図15　SB080出土遺物実測図 ……24
図16　SB075実測図 ……25
図17　SB075出土遺物実測図 ……25
図18　SK082・SK083実測図 ……26
図19　SK082出土遺物実測図 ……26
図20　SB081・SB082実測図 ……27
図21　SB081・SB082出土遺物実測図 ……27
図22　SB071実測図 ……28
図23　SB071遺物出土位置図 ……29
図24　SB071出土土器実測図（1） ……30
図25　SB071出土鉄製品実測図 ……31
図26　SB071出土土器実測図（2） ……31
図27　SB072実測図 ……32
図28　SB072出土遺物実測図 ……32
図29　SB085出土遺物実測図 ……32
図30　SB085実測図 ……32
図31　SB069実測図 ……33
図32　SB069出土遺物実測図 ……33
図33　SB070実測図 ……33
図34　SB070出土鉄製品実測図 ……34
図35　SB070出土土器実測図 ……34
図36　SB077実測図 ……35
図37　SB077出土遺物実測図 ……35
図38　SB078・079・083・090実測図 ……36
図39　SB078出土遺物実測図 ……36
図40　SB078出土鉄製品実測図 ……37
図41　SB079出土遺物実測図 ……37
図42　SB083・SB084出土遺物実測図 ……38
図43　SB090出土遺物実測図 ……38
図44　SD010出土遺物実測図 ……39
図45　SD010実測図 ……39
図46　SK084出土遺物実測図 ……40
図47　SB068ならびに検出面出土遺物実測図 ……41
図48　③地点遺構分布図 ……43
図49　③地点方形ピット群平面実測図 ……47
図50　SB106実測図 ……48
図51　SB106出土遺物実測図 ……48
図52　SB106上層焼土検出状況実測図 ……49
図53　SB125実測図 ……49
図54　SB125出土遺物実測図 ……50
図55　SB109実測図 ……51
図56　SB109出土遺物実測図 ……52
図57　SB118出土遺物実測図 ……52
図58　SB118実測図 ……53
図59　SB116実測図 ……53
図60　SB116出土遺物実測図 ……54
図61　SB115実測図 ……54
図62　SB115出土遺物実測図 ……55
図63　SB112実測図 ……56
図64　SB112・SB119・SB121出土遺物実測図 ……57
図65　SB107実測図 ……58
図66　SB107出土遺物実測図 ……58
図67　SB117実測図 ……59
図68　SB117出土遺物実測図 ……59
図69　SB122・SB123実測図 ……60
図70　SB122出土遺物実測図 ……60
図71　SB123出土遺物実測図 ……61

図72　SB130実測図 ……62
図73　SB130出土遺物実測図 ……62
図74　SB108・SB103実測図 ……63
図75　SB108出土遺物実測図 ……64
図76　SB103出土遺物実測図 ……64
図77　SB110・SB105・SB133実測図 ……65
図78　SB110出土遺物実測図 ……66
図79　SB105・SB133出土遺物実測図 ……67
図80　SB132・SK151実測図 ……68
図81　SB132出土遺物実測図 ……68
図82　SB120実測図 ……69
図83　SB120出土遺物実測図 ……70
図84　検出面等出土石・土製品実測図 ……72
図85　SE029出土銅銭拓影 ……72
図86　①地点遺構分布図 ……75
図87　SZ006出土遺物実測図 ……76
図88　SZ006・SZ007実測図 ……77・78
図89　SZ006復元想定図 ……79
図90　SZ008出土遺物実測図 ……80
図91　SZ008・SZ014実測図 ……81
図92　SZ008・SZ014復元想定図 ……82
図93　SD009実測図 ……82
図94　SD009出土遺物実測図 ……82
図95　SB058実測図 ……83
図96　SB058出土遺物実測図 ……83
図97　SB062実測図 ……84
図98　SB062出土遺物実測図 ……84
図99　SB061実測図 ……85
図100　SB061出土遺物実測図 ……85
図101　SB059実測図 ……86
図102　SB059出土遺物実測図 ……86
図103　SH002・SK076・SE015～017実測図 ……87
図104　SK076・SE015出土遺物実測図 ……87
図105　④地点遺構分布図 ……88
図106　SZ015実測図 ……90
図107　SZ016実測図 ……90
図108　SZ017実測図 ……91
図109　SZ017出土臼玉実測図 ……91
図110　SZ018実測図 ……92
図111　XI区遺構分布図 ……96
図112　検出面等出土遺物実測図 ……96
図113　方形ピット群平面図 ……97
図114　窪地状落ち込み周辺実測図 ……99
図115　窪地状落ち込み出土遺物実測図 ……99
図116　SZ010実測図 ……100
図117　SZ010・SB096出土遺物実測図 ……101
図118　SZ011実測図 ……102
図119　周溝堆積土層実測図 ……103
図120　SZ011・SK095・SK098出土遺物実測図 …103
図121　SZ012実測図 ……104
図122　SB095・098実測図 ……105
図123　SB095・098出土遺物実測図 ……106
図124　SB097・SH003・SH005・SE021実測図 …106
図125　SB097出土遺物実測図 ……107
図126　SB101・SB100・SK107実測図 ……108
図127　SB101・SB100・SK107・SD015
出土遺物実測図 …109
図128　SB092・SD012・SD013実測図 ……110
図129　SB092・SD012・SD013出土遺物実測図 …111
図130　XII区遺構分布図 ……113
図131　方形ピット群・畝状遺構実測図 ……120
図132　弥生時代前期土器実測図 ……121
図133　SB051・045・044実測図 ……121
図134　SB051出土遺物実測図 ……122
図135　SB051出土土器断面実測図 ……123
図136　SB045出土遺物実測図（1） ……124
図137　SB045出土遺物実測図（2）（3） …125・126
図138　SB041・046実測図 ……127
図139　SB041・046出土遺物実測図 ……127
図140　SB003実測図 ……128
図141　SB003出土遺物実測図（1） ……129
図142　SB003出土遺物実測図（2） ……130
図143　SB003出土土器片断面実測図 ……131
図144　SB030実測図 ……132
図145　SB030出土遺物実測図（1） ……133
図146　SB030出土遺物実測図（2） ……134

図147　SB030出土土器片断面実測図 ……135
図148　SB018・SB025・SB026実測図 ……136
図149　SB018土坑内遺物出土状況 ……137
図150　SB018出土遺物実測図（1） ……138
図151　SB018出土遺物実測図（2） ……139
図152　SB018出土遺物実測図（3） ……140
図153　SB025出土鉄製品実測図 ……140
図154　SB023実測図 ……141
図155　SB023出土遺物実測図（1） ……141
図156　SB023出土遺物実測図（2） ……142
図157　SB023出土遺物実測図（3） ……143
図158　SB023出土遺物実測図（4） ……144
図159　SB032実測図 ……145
図160　SB032出土土器片断面実測図 ……145
図161　SB032出土遺物実測図（1） ……146
図162　SB032出土遺物実測図（2） ……147
図163　SB032出土遺物実測図（3） ……148
図164　SB0047実測図 ……149
図165　SB047出土遺物実測図 ……150
図166　SB022遺構・出土遺物実測図 ……151
図167　SB006実測図 ……152
図168　SK011実測図 ……152
図169　SB006出土土器実測図 ……152
図170　SB006出土銅釧実測図 ……153
図171　SB024実測図 ……153
図172　SB024出土遺物実測図 ……154
図173　SB021実測図 ……154
図174　SB021出土遺物実測図 ……155
図175　SB015・017・020・038実測図 ……156
図176　SB015・017・020・038出土遺物実測図 …157
図177　SZ005実測図 ……158
図178　SZ005出土遺物実測図 ……159
図179　SZ002実測図 ……161・162
図180　SZ002周溝出土土器実測図 ……163
図181　SZ002周溝出土金属製品実測図 ……164
図182　SZ001実測図 ……165・166
図183　SZ001周溝内土器集中①出土状況 ……167
図184　SZ001周溝内土器集中①出土遺物実測図 …168
図185　SZ001周溝内土器集中②出土状況 ……169
図186　SZ001周溝内土器集中②出土遺物実測図 …170
図187　SZ001周溝内出土土器実測図（1） ……171
図188　SZ001周溝内出土土器実測図（2） ……172
図189　SZ003実測図 ……173・174
図190　SZ003周溝内土器出土状況 ……175
図191　SZ003周溝内出土土器実測図（1） ……176
図192　SZ003周溝内出土土器実測図（2） ……181
図193　SZ003周溝内出土金属・石製品実測図 ……181
図194　SZ004実測図 ……183・184
図195　周溝内出土土器群名 ……185
図196　SZ004周溝内土器出土状況 ……186
図197　SZ004周溝内出土土器実測図（1） ……188
図198　SZ004周溝内出土土器実測図（2） ……189
図199　SZ004周溝内出土銅鏃実測図 ……191
図200　SB013実測図 ……192
図201　SB013出土遺物実測図 ……192
図202　SB033実測図 ……193
図203　SB033出土遺物実測図 ……193
図204　SB034・SB036実測図 ……194
図205　SB034・SB036出土遺物実測図 ……195
図206　SB042実測図 ……195
図207　SB042出土遺物実測図 ……195
図208　SB031実測図 ……196
図209　SB031出土遺物実測図 ……196
図210　SB001実測図 ……196
図211　SB001出土遺物実測図 ……196
図212　SB002実測図 ……197
図213　SB002出土遺物実測図 ……197
図214　SB007・SB008実測図 ……198
図215　SB007・SB008出土遺物実測図 ……198
図216　SB009実測図 ……199
図217　銅地金張巡方実測図 ……200
図218　SB009出土土器実測図 ……200
図219　SB010実測図 ……201
図220　SB010出土遺物実測図 ……201
図221　SB037実測図 ……202
図222　SB037出土遺物実測図 ……203

図223　SB040実測図 ……204
図224　SB040出土遺物実測図 ……204
図225　報告外遺構・検出面出土遺物実測図（1）205
図226　報告外遺構・検出面出土遺物実測図（2）206
図227　報告外遺構・検出面出土遺物実測図（3）206
図228　XIII区遺構分布図 ……207
図229　SZ013実測図 ……209・210
図230　SZ013出土遺物実測図 ……211
図231　SE023出土銅銭拓影 ……211
図232　A区1次面遺構分布図 ……212
図233　A区2次面遺構分布図 ……214
図234　SK177実測図 ……216
図235　SK177出土遺物実測図 ……217
図236　SB140実測図 ……218
図237　SB140出土遺物実測図 ……219
図238　SB136出土遺物実測図 ……219
図239　SB135・136・137実測図 ……220
図240　SB135出土遺物実測図 ……221
図241　SB139・141・143実測図 ……221
図242　SB139出土遺物実測図 ……222
図243　SB142・SZ025実測図 ……223
図244　SB138出土遺物実測図 ……224
図245　SB138実測図 ……225
図246　SB134実測図 ……225
図247　SB134出土遺物実測図 ……226
図248　SK162実測図 ……226
図249　B区遺構分布図 ……227
図250　B区方形ピット分布図 ……227
図251　B区出土石製品実測図 ……228
図252　B区出土弥生土器実測図 ……228
図253　SB144実測図 ……229
図254　SB144出土遺物実測図 ……230
図255　SZ026実測図 ……231
図256　SZ026出土遺物実測図 ……231
図257　SZ026調査区南壁セクション実測図 ……231
図258　SH006・007実測図 ……232
図259　C区出土吉田式土器実測図 ……234
図260　C区遺構分布図 ……234
図261　SB147実測図 ……235
図262　SB147出土遺物実測図 ……236
図263　SZ027実測図・遺物出土状況 ……237
図264　SZ027・SZ027下層溝出土遺物実測図 ……238
図265　SZ028出土遺物実測図 ……238
図266　SZ027下層溝実測図 ……239・240
図267　SZ028実測図 ……241
図268　SB146実測図 ……243
図269　SB146出土遺物実測図 ……243
図270　SB148実測図 ……243
図271　SB148出土遺物実測図 ……244
図272　SB149・SB152出土遺物実測図 ……245
図273　SB149・SB152実測図 ……246
図274　SB150・SB151実測図 ……247
図275　SB150・SB151出土遺物実測図 ……248
図276　SZ028上層出土遺物実測図 ……249
図277　SZ028周辺状況図 ……249
図278　C区南側所在石造物 ……250
図279　D1区遺構分布図 ……251
図280　SK213出土遺物実測図 ……252
図281　SK208出土遺物実測図 ……252
図282　D1区出土弥生土器実測図 ……252
図283　SB159出土遺物実測図 ……254
図284　SB159実測図 ……254
図285　SB154実測図 ……255
図286　SB154出土遺物実測図 ……256
図287　SB158実測図 ……256
図288　SB158出土遺物実測図 ……256
図289　SB155・SB156実測図 ……257
図290　SB155・SB156出土遺物実測図 ……258
図291　SB157実測図 ……258
図292　SB157出土遺物実測図 ……258
図293　D2区遺構分布図 ……261
図294　SZ029実測図 ……263
図295　SZ029出土遺物実測図 ……264
図296　SZ029土器出土状況図 ……265
図297　SB167・SB168実測図 ……266
図298　SB167出土遺物実測図 ……267

図299　SB168出土遺物実測図 ……267
図300　SX025実測図 ……268
図301　D2区出土瓦・瓦塔実測図 ……268
図302　D3区遺構分布図 ……271
図303　SB164出土遺物実測図 ……272
図304　SB164実測図 ……272
図305　D3区検出面出土遺物実測図 ……272
図306　SB160・SB163実測図 ……273
図307　SB160出土遺物実測図 ……273
図308　SB163出土遺物実測図 ……274
図309　SB165実測図 ……275
図310　SB165出土遺物実測図 ……275
図311　SB166実測図 ……276
図312　SB166出土遺物実測図 ……276

写　真　目　次

写真１　調査地空撮写真 ……9
写真２　調査地空撮写真 ……9
写真３　A区延長部工事実施状況 ……13
写真４　B区延長部工事実施状況 ……13
写真５　A区延長部土層堆積状況 ……13
写真６　B区延長部土層堆積状況 ……13
写真７　②地点全景写真 ……18
写真８　SB080土師器出土状況 ……25
写真９　SB071土器出土状況 ……31
写真10　SK084 ……40
写真11　SK081半裁状況 ……40
写真12　方形ピット群検出状況 ……47
写真13　SB107出土鉄滓 ……58
写真14　SB133カマド ……67
写真15　2a・b層検出状況 ……69
写真16　３層堆積状況 ……69
写真17　SK149出土籠状品細部 ……71
写真18　SK149籠状品出土状況 ……71
写真19　SK149籠状品出土状況 ……71
写真20　SK118出土銅銭 ……72
写真21　SE029出土咸平元宝 ……72
写真22　SB077出土神功開寶 ……72
写真23　SZ006遺物出土状況 ……76
写真24　SZ008底部穿孔壷出土状況 ……80
写真25　SB062カマド支脚石 ……84
写真26　SB062カマド支脚石断割状況 ……84
写真27　方形ピット群検出状況 ……88
写真28　④地点全景 ……92
写真29　SZ017・SK161臼玉出土位置 ……92
写真30　方形ピット群 ……97
写真31　方形ピット群 ……97
写真32　落ち込み全景 ……98
写真33　土層堆積状況 ……98
写真34　下層包含層堆積状況 ……98
写真35　XI区全景 ……111
写真36　XI区全景 ……111
写真37　SZ003周溝内土器出土状況 ……177
写真38　第1群検出状況 ……185
写真39　第1群朱検出状況 ……185
写真40　第２群検出状況 ……185
写真41　第３群検出状況 ……185
写真42　第４群・第５群検出状況 ……187
写真43　壷検出状況 ……187
写真44　C区全景 ……234
写真45　D2区全景 ……259
遺構写真図版　X区　PL－1～PL－11
XI区 ……PL－11～PL－13
XII区 ……PL－14～PL－35
XIII区 ……PL－36
A～D区 ……PL－37～PL－43
遺物写真図版 ……PL－X－1～PL－A～D

Ⅰ　調　査　経　過

1　調査に至る経過

主要地方道長野上田線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査は、平成７年４月に着手して以来、継続事業として毎年発掘調査を実施してきた。当初より周知の埋蔵文化財包蔵地に該当する事業地全域を調査対象として順次発掘調査を進めてきたが、平成10年に調査依頼者である長野建設事務所より事業が「長野県単独事業」と「国庫補助事業」に分かれる予定であることが伝えられた。委託事業の区分により、それぞれの事業成果としての発掘調査報告書を分けることや平成10年度までに実施した調査区での遺構検出数や出土遺物量が膨大であることから早期に整理作業に着手し、発掘調査と併行して実施すべき点などを考慮して、同一路線の道路改良ではあるが事業区分に従って埋蔵文化財発掘調査も別事業として実施することになった。そして、平成11年11月に長野県単独事業区間の発掘調査が完了した後、引き続き新規事業として国庫補助事業区間の発掘調査に着手した。調査は当初、Ｘ区～XII区を予定していたが、調査予定地外での工事着手に伴い埋蔵文化財の包蔵が確認され、急遽発掘調査を実施することとなったXIII区が追加された。また、当初計画された道路予定地の発掘調査の終了時点で、付帯工事として周辺市道等の付け替え工事が計画され、Ａ区～Ｄ区に区分して平成15年度より現地調査に着手している。これにより、本書で報告する調査区はＸ区～XIII区ならびにＡ区～Ｄ区である。

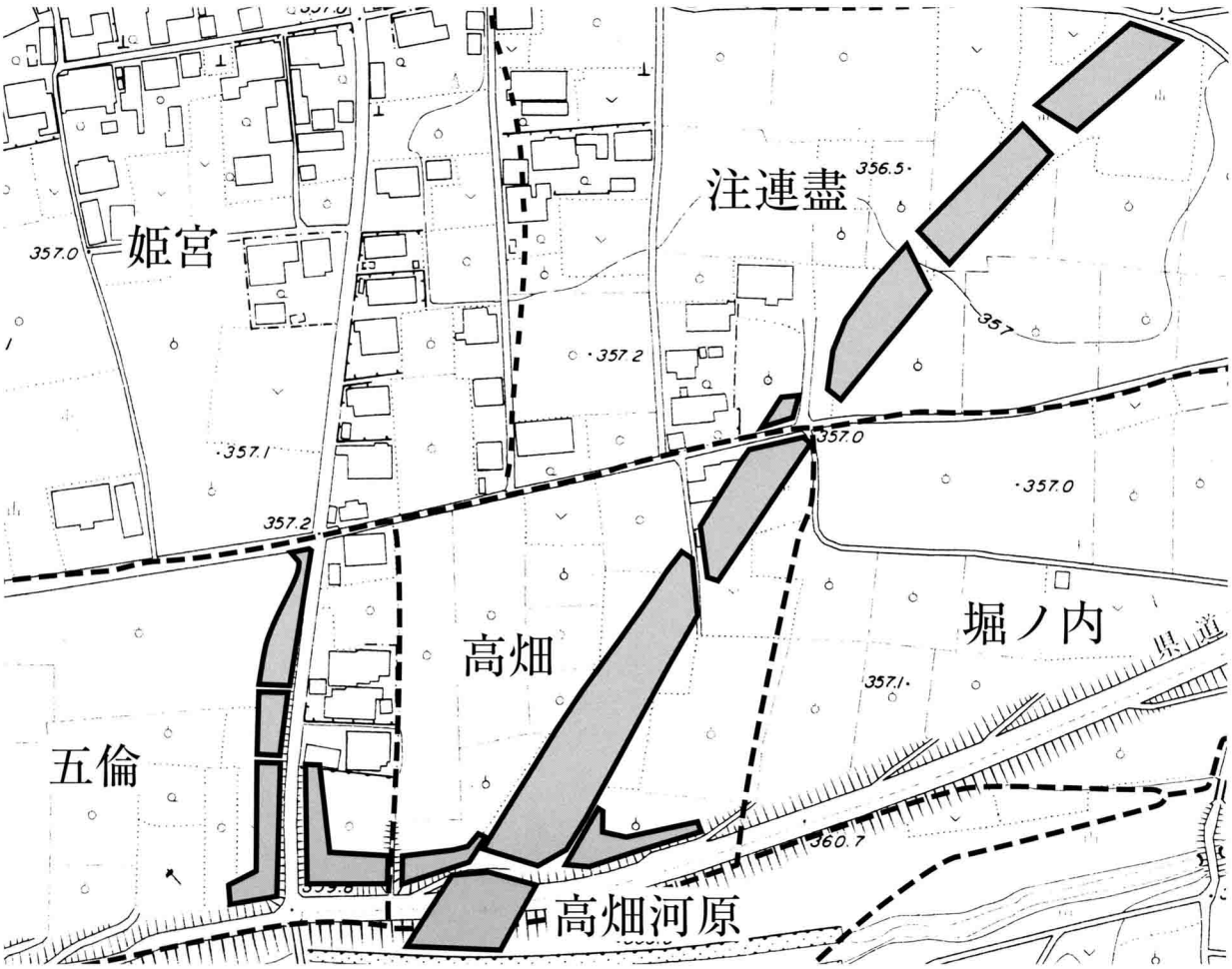

図１　調査地と字名（Ｓ＝1/2,500）

2　発掘調査の経過

現地における発掘調査は、平成11年11月８日に着手し、平成18年３月25日に完了した。

調査対象地は（主）長野上田線の新設道路工事（本線工事）区域ならびに周辺市道等の付け替え工事（付帯工事）区域に二分される。本線工事部分に該当するＸ区～XIII区は、平成11年度～平成13年度に発掘調査を実施している。調査対象地南西側の聖川沿いに設定したXII区より着手し、漸次東に対象地を移していった。XIII区は当初調査対象地とはなっていなかったが、平成12年11月に本体工事に着手したところ、掘削中に埋蔵文化財の包蔵が確認され、発掘調査を実施した地区である。工事着手後の調査実施にあたっては、事業発注者である長野建設事務所ならびに工事請負業者である川中島建設株式会社の協力があったことを明記しておきたい。

平成14年度は付帯工事の計画策定ならびに用地買収のため、現地調査は実施せずＸ区～XIII区の発掘調査で出土した遺物ならびに調査記録の整理作業を実施している。

周辺道路付け替え等の付帯工事部分に該当するＡ区～Ｄ区は、用地買収の進捗状況にあわせ、平成15年度にＡ・Ｂ区より着手し、平成16年度にＣ区・Ｄ－①区・Ｄ－③区、平成17年度にＤ－②区の調査を実施した。

各年度の発掘調査概要は表１のとおりである。

年　度	11年度 (1999)	12年度 (2000)	13年度 (2001)	15年度 (2003)	16年度 (2004)	17年度 (2005)
調　査 地　区	XII区	Ｘ—①区 Ｘ—③区 XI区 XII区 XIII区	Ｘ—②区 Ｘ—④区	Ａ区 Ｂ区	Ｃ区 Ｄ—①区 Ｄ—③区	Ｄ—②区
字　名	高　畑	注連盡 高　畑 高畑河原	注連盡	高　畑	五　倫	五　倫
調査対象面積	2,500㎡	2,500㎡	1,000㎡	1,000㎡	1,000㎡	400㎡
発　掘 期　間	11月８日 ～ ３月20日	４月10日 ５月８日 ～ 12月７日	５月22日 ～ ９月28日	10月２日 ～ 12月26日	７月26日 ～ 12月24日	３月１日 ～ ３月25日
日　数	82日	131日	68日	51日	90日	21日
備　考				発掘400㎡ 立会600㎡		

表１　年度別発掘調査実施概要

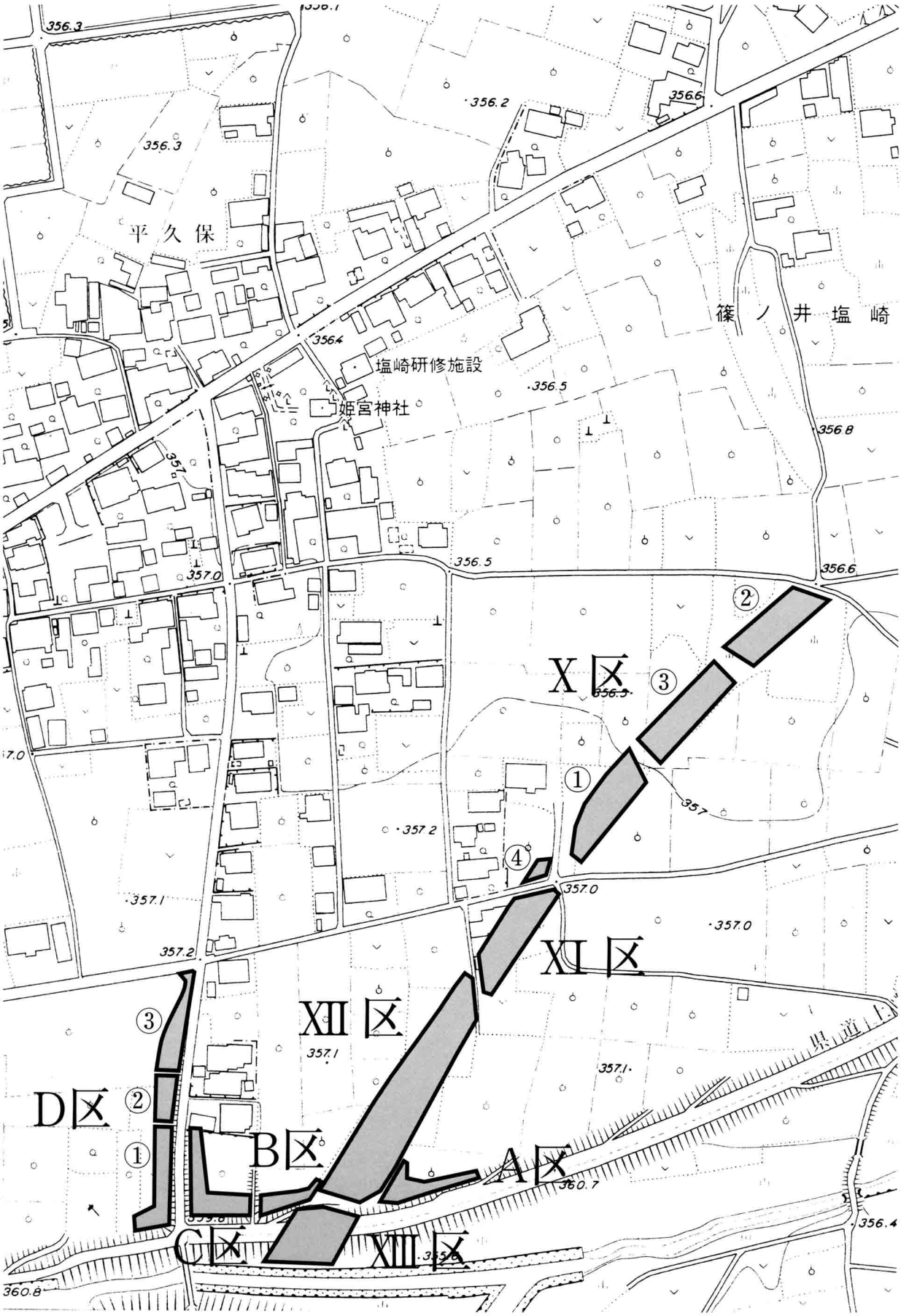

図２　調査地区の名称（Ｓ＝1/2,500）

①調査区の設定方法と名称　主要地方道長野上田線道路改良事業による塩崎バイパス新設工事に関わる篠ノ井遺跡群発掘調査は、平成７年度より事業着手し、Ⅰ～Ⅸ区について既に事業が完了している。本書にて報告する地点は、事業主体者からの依頼によりⅠ～Ⅸ区とは別事業としたが、Ⅰ～Ⅸ区の延長線上にある同一道路であるうえ発掘調査が継続して実施されたという観点から、連続する地区名を冠して調査を実施している。調査区の分割方法は、Ⅰ～Ⅸ区と同様に調査区を縦断する既存道路によって区分けし、Ⅹ～XIII区と呼称している。各地区はⅩ区ならびにXIII区が全面調査、XII区は東西に二分割したものの、結果的に全面調査を実施しており、細分割は行っていない。Ⅹ区については、隣接住宅への出入口や調査以前より使用されていた農作業道により、①～④地区に分割して調査を実施している。

また、新設される塩崎バイパスに伴うⅩ～XIII区以外に、周辺市道の整備が付帯事業として計画され、これについても合わせて事業地の発掘調査を実施した。地区名は本線地点と側道地点を明確に区分するために連続する番号ではなく、Ａ～Ｄ区とした。Ａ～Ｃ区は全面調査が実施できたが、Ｄ区については用地買収の進捗状況に合わせて①～③地点に細分して調査を実施している。さらに、XII区沿いのＡ・Ｂ区延長部は一定の調査面積が確保できなかったことから、工事立会を実施している（「Ⅲ　立会調査の結果」参照）。

以上により区分された調査区は図２のとおりである。

②各年度の発掘調査実施経過

ａ　本線部分の発掘調査経過（平成11年度～平成13年度）

平成11年度は長野県単独事業地区であるⅨ区調査完了後にXII区を対象に引き続き着手した。XII区は掘削土仮置地の確保より南北に二分割して実施することとなり、南半部より着手した。

平成12年度はXII区北半部の調査完了後、Ⅹ区およびXI区を対象とした。Ⅹ区は掘削土仮置地の確保より①・②の調査を実施している。XIII区は前記したように、本体工事着手後に包蔵が確認され、事業主体者ならびに請負業者のご協力により、調査を実施した区である。このため、XI区の調査途上で急遽調査を実施した。

平成13年度は掘削土仮置地として調査が未着手であったⅩ区③・④を対象とし、９月末日をもって現地における調査を完了した。

＜平成 11 年度＞

調査区名		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
XII区	南半												
	北半												

＜平成 12 年度＞

調査区名		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
XIII区													
XII区	北半												
XI区													
Ⅹ区	①												
	②												

＜平成 13 年度＞

調査区名		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
Ⅹ区	③												
	④												

表 2　平成 11～13 年度発掘調査実施経過一覧表

b　付帯工事部分の発掘調査経過（平成15年度～平成17年度）

本事業新設バイパス部分の発掘調査は平成13年度までに完了したが、合わせて実施が計画された付帯工事（周辺市道整備工事）については、実施計画ならびに用地取得の関係により１年間の事業準備期間をおき、平成15年度～17年度に発掘調査を実施している。

平成15年度はＡ・Ｂ区を対象に10月～12月にかけての約２ヶ月間発掘調査を実施している。特にＡ区は古代～中世が残存する１次面とその直下の弥生時代後期～古墳時代前期の２次面に分けて調査を実施したうえ、２次面が調査区全面にわたって住居跡の重複がみられたため、対象面積に比して調査日数を要した。

平成16年度は当初、Ｃ・Ｄ区を対象に調査に着手したが、用地取得の進捗状況によりＤ-②区の調査が実施できず、Ｃ区・Ｄ-①・③区が対象となった。当年度は上陸した台風の数が極めて多く、中でも10月20日の台風23号による大雨および河川増水により調査途上の調査区が完全水没した。大型排水ポンプを複数台導入し、連日排水作業を実施したものの、地下水位上昇による湧水が激しく、11月５日まで調査が中断した。

平成17年度はＤ－②を対象に調査を実施した。１・２月の大雪による残雪のため、調査着手が２週間ほど遅れたが、本年度出土遺物の洗浄作業を含めて、３月末日をもって現地調査を完了した。

＜平成 15 年度＞

調査区名		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
Ａ区								1次	2次				立会
Ｂ区													立会

＜平成 16 年度＞

調査区名		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
Ｃ区													
Ｄ区	①							排水					
	③												

＜平成 17 年度＞

調査区名		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
Ｄ区	②												

表 3　平成 15～17 年度発掘調査実施経過一覧表

③整理作業の実施経過　整理作業は各年度に図面や写真の基礎整理作業を実施していたが、平成12年度１月～３月・平成13年度下半期・平成14年度に図面類の整理ならびに出土遺物の洗浄作業・接合作業を行い、一部実測作業にも着手した。多量の遺物が出土したＸ～XIII区についてはこれ以後、調査区を単位として整理作業を継続する。

付帯事業地区であるＡ～Ｄ区は各年度の調査最終週に出土遺物洗浄作業を合わせて実施し、逐次、接合作業へと移行した。幸い、付帯事業区間は各年度半年以上の整理期間が確保できたことから、Ｘ～XIII区と併行して整理作業を実施している。

平成18年度は平成17年度に調査を実施したＤ－②区の整理作業を中心に、継続実施してきた図面類の浄書作業・遺物の写真撮影を行った。また、継続して作成した各図版類の編集ならびに原稿執筆をすすめ、平成19年３月23日付で本書刊行に至っている。

3　調　査　体　制

本調査は調査依頼者である長野県長野建設事務所長と長野市長が締結した埋蔵文化財発掘調査委託受託契約に基づき、長野市教育委員会の直轄事業として文化財課埋蔵文化財センターが担当した。

組織・体制は以下のとおりである。

【平成11～15年度】（職名は平成15年度時）

調査主体者	長野市教育委員会	教育長	久保　健（～13年度）
			立岩睦秀（14年度～）
調査機関	埋蔵文化財センター	所長	中島昌之（11年度）
			礒野久夫（12年度～）
		局主幹兼所長補佐	矢口忠良

庶務担当	係長	北村実寛（～13年度）	事務職員	青木厚子（～14年度）
	係長	山岸恒雄（14年度～）	事務職員	吉村久江（15年度）
			事務員	塚田容子
調査担当	係長	青木和明（15年度）	専門員	藤田隆之（～15年度）
	係長	千野　浩（～14年度）	専門員	小林まゆ佳（11年度）
	主査	飯島哲也	専門員	宮川明美
	主事	風間栄一	専門員	清水竜太
	主事	小林和子	専門員	内山　梢（13～14年度）
	専門主事	荒木　宏	専門員	山下大輔（14年度～）
	専門員	中殿章子（～13年度）	専門員	遠藤恵実子（14年度～）
	専門員	山田美弥子（～13年度）	専門員	長瀬　出（15年度）
	専門員	西沢真弓（～14年度）	専門員	山野井智子（15年度）
	専門員	小野由美子	専門員	藤原崇志（15年度）
	専門員	堀内健次		

調査補助員　藤井　恵（昭和女子大学大学院生）　杉山　歩（山口大学生）　三宅秀幸（明治大学生）
岸田　真（電気通信大学生）

発掘参加者　石坂好子　内山直子　大矢ひろ子　兼山忠晴　岸田武子　北沢やすい　倉石みつ江
小林義光　桜井志げ子　塩原恵美子　清水節子　島田茂子　島田卓也　鈴木竹子　袖山弘
曾根川好武　塚田雄作　中澤ヒデ子　福島幸子　藤本百合　松崎とみ子　丸山美知子
宮崎和子　矢島喜和子　矢島秀子　山田令子　山本芳子　湯田夕起子　若林ひろ子

整理調査員　青木善子　池田寛子　多羅沢美恵子　鳥羽徳子　中殿章子　武藤信子　矢口栄子

整理参加者　倉島敬子　小泉ひろ美　清水さゆり　関崎文子　田中はま江　田中むつ子　冨田景子
西尾千枝　松沢ナオエ　三好朋子　村松正子

遺構測量業務　株式会社写真測図研究所　代表取締役　杉本幸治

表土掘削業務　川中島建設株式会社　取締役社長　加藤正男

現地調査は風間・中殿・宮川・堀内・内山が担当した。

【平成16～18年度】

調査主体者	長野市教育委員会		教育長	立岩睦秀	
調査機関	文化財課		課長	塩澤一郎（16年度）	
				北村真一郎（17年度～）	
文化財課埋蔵文化財センター			局主幹兼所長	矢口忠良	
	庶務担当	係長	山岸恒雄（～16年度）	事務職員	吉村久江
			宮沢和雄（17年度～）	事務員	塚田容子
	調査担当	係長	青木和明	専門員	山野井智子
		主査	飯島哲也（16年度）	専門員	石丸敦史
		主査	風間栄一	専門員	小出泰弘
		主査	小林和子	専門員	森田利枝
		主事	宿野隆史（17年度～）	専門員	宮沢浩司（～17年度）
		専門員	堀内健次（～17年度）	専門員	山岸千晃
		専門員	清水竜太（～17年度）	専門員	加藤卓也（17年度）
		専門員	遠藤恵実子	専門員	小池勝典（18年度）
		専門員	長瀬出	専門員	柴田洋孝（18年度）

調査補助員　西沢奈津子（金沢大学生）

発掘参加者　大矢ひろ子　岸田武子　北沢やすい　倉石みつ江　塩原恵美子　清水節子　島田卓也　曾根川好武　中澤ヒデ子　福島幸子　藤本百合　松崎とみ子　丸山美知子　矢島秀子　山田令子　山本芳子

整理調査員　青木善子　池田寛子　多羅沢美恵子　鳥羽徳子　中殿章子　武藤信子　矢口栄子

整理参加者　倉島敬子　小泉ひろ美　清水さゆり　関崎文子　冨田景子　西尾千枝　三好明子　村松正子

遺構測量業務　株式会社写真測図研究所　代表取締役　杉本咲子

表土掘削業務　川中島建設株式会社　取締役社長　加藤正男（～17年度11月）加藤智久（17年度11月～）

現地調査は、風間・堀内・石丸が担当し、検出遺構の実測・出土遺物の取り上げ作業等において埋蔵文化財センター職員の協力を得た。

事業主体者である長野県長野建設事務所には８年間にわたる継続調査の実施において、多大なご協力を賜った。特に当初調査対象地外であったXIII区において埋蔵文化財の包蔵が確認された際には、工事請負業者である川中島建設株式会社とともに発掘調査実施へのご協力をいただくなど、調査の円滑な遂行に多大なご支援を賜った。調査区近隣の住民の皆さんには調査中、何かとご不便等をおかけしたが、区長をはじめ皆さんのご理解・ご協力により円滑に調査を完了することができた。長期間にわたる調査中、苦楽をともにした関係各位ともにこれら多くの方々のご協力に心より感謝申し上げる。出土遺物のうち、石製品の石材については畠山幸司氏（長野市立博物館）より、骨については田辺智隆氏（長野市立博物館）よりご教示を得た。

また、調査の実施経過の中で多くの方々・諸機関よりご協力を賜った。ご芳名を記して感謝の意を表します。

青木一男　臼居直之　小林秀夫　土屋　積　寺田良喜　西山克己

長野県立歴史館　長野県埋蔵文化財センター　長野県考古学会　篠ノ井塩崎平久保区　（敬称略）

Ⅱ　篠ノ井遺跡群の位置と調査地点

1　篠ノ井遺跡群の位置

長野市南部の篠ノ井地区には、千曲川が形成した大規模な自然堤防が発達している。この自然堤防上には水稲耕作が導入されて以来、好適な居住地として選択され、利用されてきたらしく、間断ない遺物の散布が認められる一大遺跡密集地となっている。この自然堤防上に広がる包蔵地はいくつかの遺跡群として把握されており、左岸域では上流から八幡遺跡群（千曲市）、塩崎遺跡群・篠ノ井遺跡群・横田遺跡群（以上、長野市）、右岸では粟佐遺跡群・屋代遺跡群・土口遺跡（以上、千曲市）とほぼ連続した集落域が想定されている。また、それぞれの後背湿地には石川条里遺跡（左岸）、更埴条里遺跡（右岸）と、現在も条里景観を残す生産遺跡の存在が明らかとなっており、集落域・生産域が一体化した歴史的空間が把握できる希有な地となっている。

篠ノ井遺跡群は先に記した千曲川左岸の自然堤防上に展開する遺跡群のうち、自然堤防を開削して千曲川に流れ込む聖川と岡田川によって区分された遺跡名である。聖川を挟んで塩崎遺跡群と、岡田川を挟んで横田遺跡群とそれぞれ接している。篠ノ井遺跡群の範囲は東西およそ２kmに及び、所在地の地籍名は実に25を数える。間断のない遺構の連続からは、小区域ごとに分割することが難しく、群として把握する所以である。

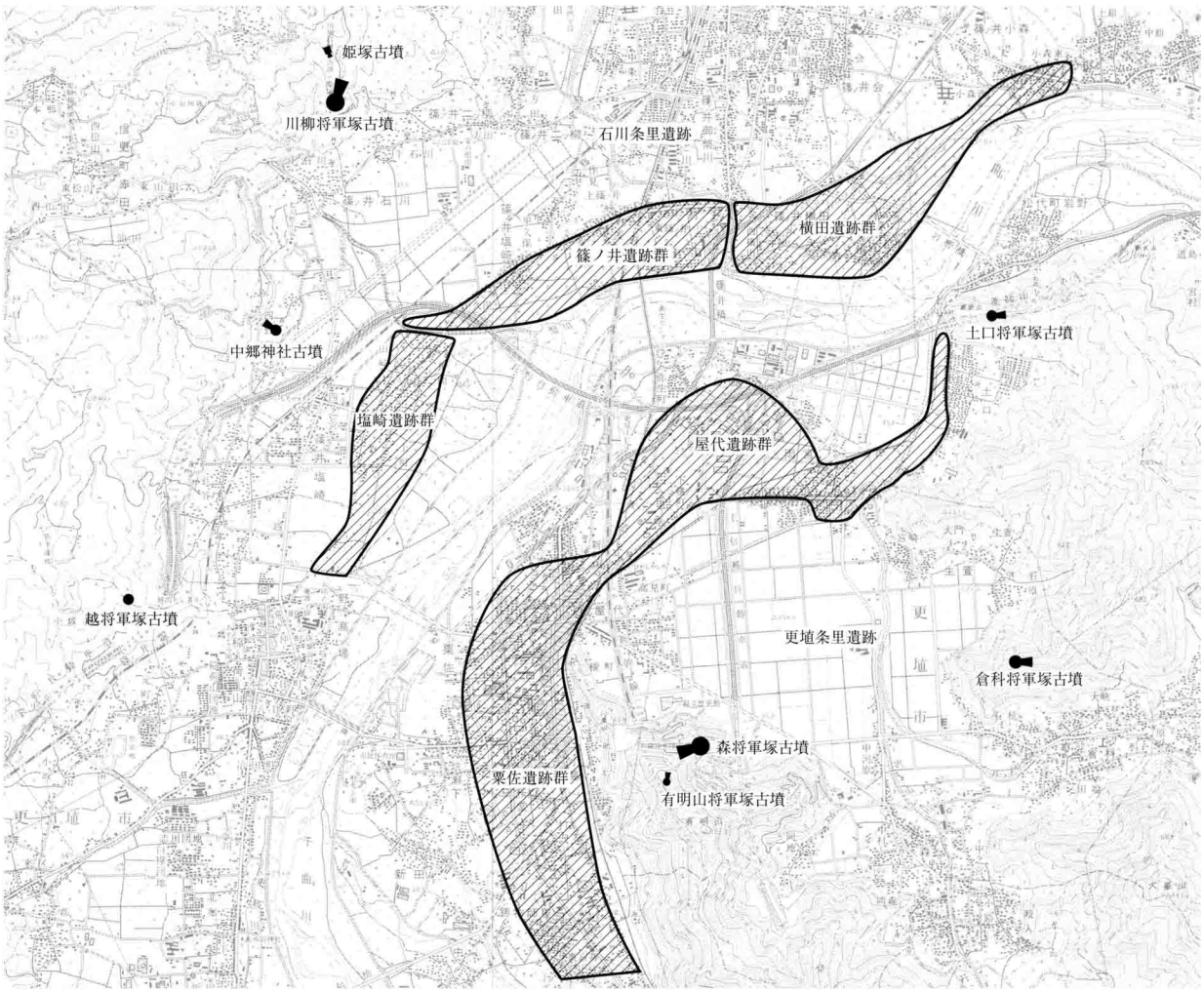

図３　篠ノ井遺跡群位置図（Ｓ＝1/50,000）

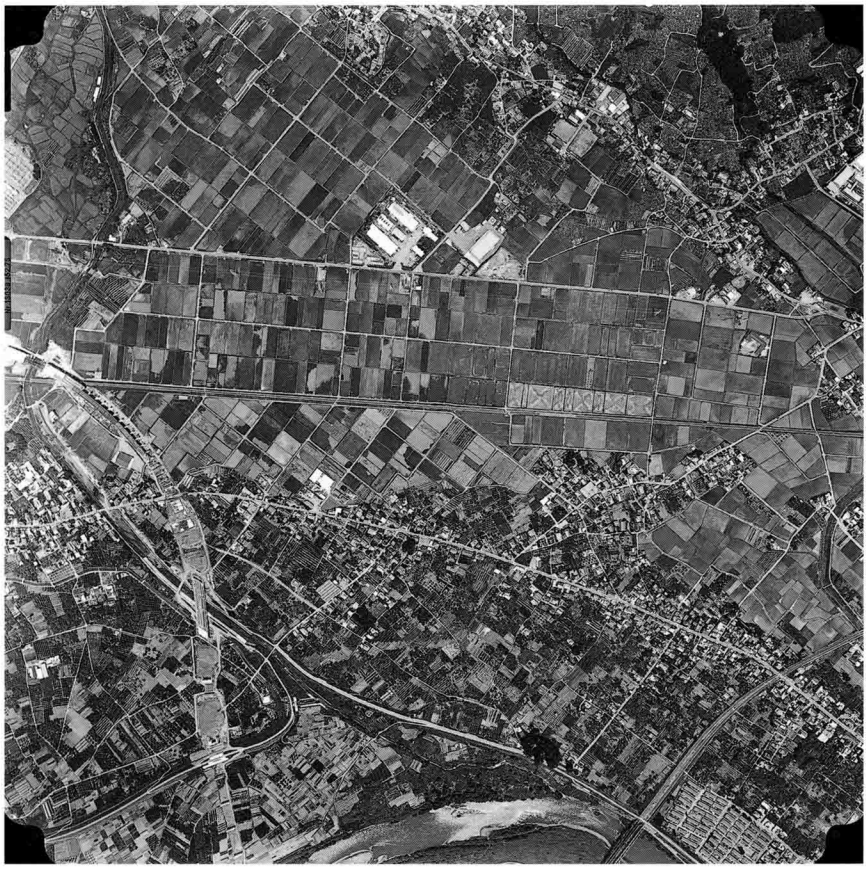

写真１　調査地空撮写真（平成2年　（株）ジャスティック撮影）

写真２　調査地空撮写真（平成16年度撮影）

2　篠ノ井遺跡群と調査地点

篠ノ井遺跡群における発掘調査は、長野市教育委員会、（財）長野県埋蔵文化財センターによってこれまで複数回の発掘調査が実施されている。本書にて報告する主要地方道長野上田線塩崎バイパス地点は、長野県単独事業区間（Ⅰ区～Ⅸ区）と合わせて、ちょうど篠ノ井遺跡群の範囲に新設道路幅24mのトレンチを入れた形となり、既往調査実施地点と直接あるいは間接的な位置関係を有している。これまで実施された篠ノ井遺跡群の発掘調査地点は以下のとおりである。

番号	地点名	調査年度	報告書名
1	大規模自転車道地点	昭和54年度	『篠ノ井遺跡群』長野市教育委員会
2	市道山崎唐猫線地点	昭和63年度	『篠ノ井遺跡群Ⅱ』長野市教育委員会
3	中部電力鉄塔地点	平成元年度	『篠ノ井遺跡群Ⅲ』長野市教育委員会
4	市営塩崎体育館地点	平成元年度	『篠ノ井遺跡群Ⅲ』長野市教育委員会
5	聖川堤防地点	昭和55年度～平成3年度	『篠ノ井遺跡群（4）』長野市教育委員会
6	高速道地点	昭和63年度～平成3年度	『中央自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書16』（財）長野県埋蔵文化財センターほか
7	新幹線地点	平成5～7年度	『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書4』（財）長野県埋蔵文化財センターほか
8	市道塩崎中央線地点	平成4年度～	整理中
9	（主）長野上田線塩崎バイパス地点	平成7～平成13年度 Ⅰ～Ⅸ区	『篠ノ井遺跡群（5）』長野市教育委員会
10		平成11～17年度 Ⅹ～ⅩⅢ区　A～D区	本書
11	市道篠ノ井大当線地点	平成8～9年度	『篠ノ井遺跡群（5）』長野市教育委員会

表4　篠ノ井遺跡群調査実施地点一覧表

本書にて報告するⅩ区～ⅩⅢ区ならびにA区～D区は、Ⅹ区で長野県単独事業区からの一連の調査区としてⅨ区と連続し、また市道塩崎中央線地点と直交し、ⅩⅡ区・ⅩⅢ区で大規模自転車道地点と直交、D－③区で市道山崎唐猫線地点と直交して接する。また、D区は聖川堤防地点隣接地に該当する。

これらの隣接する調査区とは同一遺構の検出こそないが、同時代の遺構が数多く検出され、一連の遺構群をなしていることは確実である。ⅩⅡ区・A区・B区・C区・D－①区・大規模自転車道地点・市道山崎唐猫線地点の古墳時代遺構群（前期住居群・中～後期古墳群）、Ⅹ区・D－③区・市道山崎唐猫線地点の平安時代住居群は千曲川に沿って細長い分布状況をみせ、千曲川旧河道と遺跡展開の把握に極めて示唆的である。また、Ⅹ区～ⅩⅡ区・聖川堤防地点の弥生時代後期～古墳時代前期墓域と集落、ⅩⅡ区・B区・C区・D－②区の古墳時代墓域とⅦ区・Ⅷ区の集落域との対応関係は、遺跡群の時期別構造を探るうえで良好な情報を提供している。

このように本書にて報告するⅩ区～ⅩⅢ区ならびにA区～D区は、これまで調査が実施されてきた調査地点の間を埋めて相互関係を浮かび上がらせることが可能な位置に該当すると評価することができる。

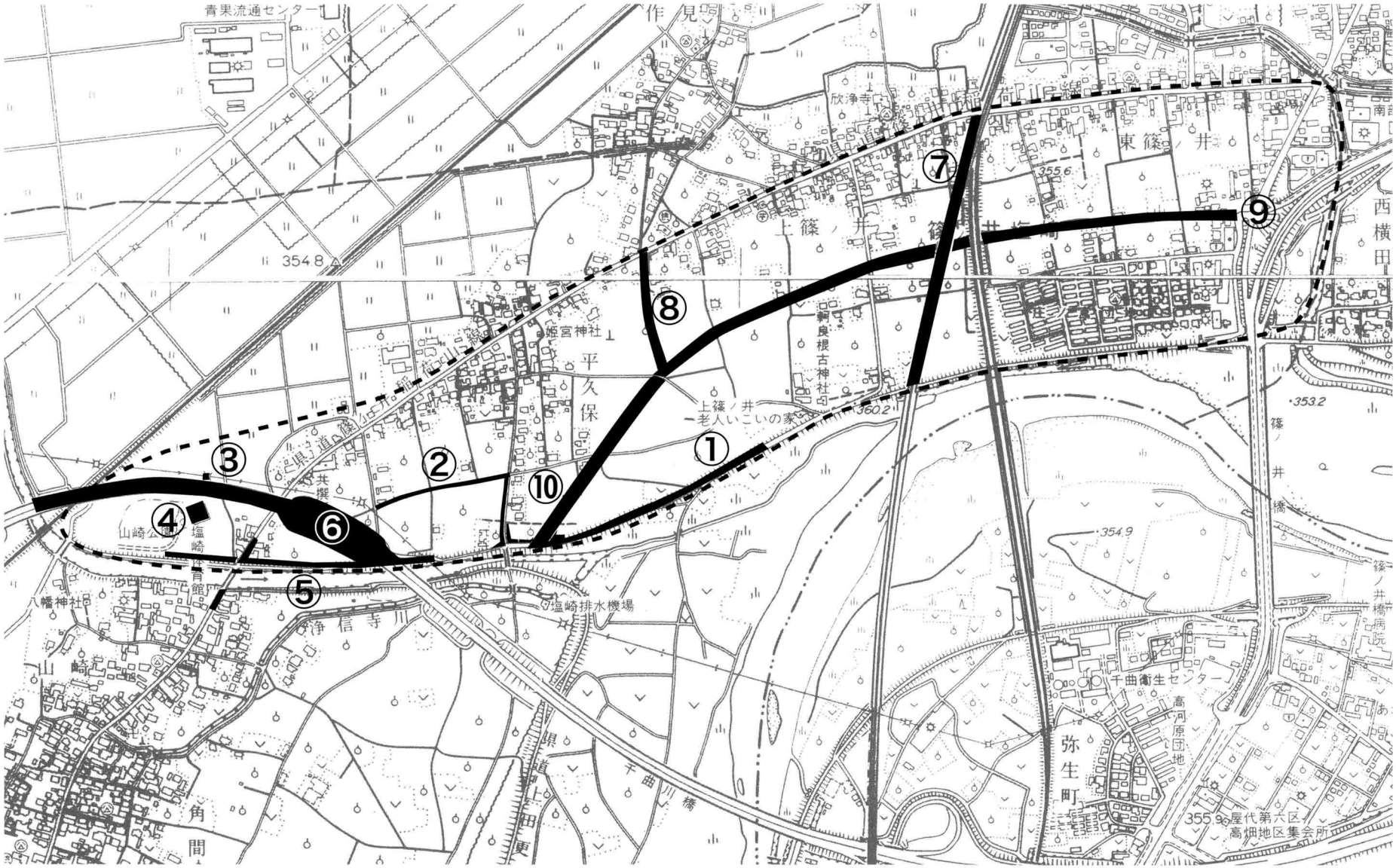

図４　篠ノ井遺跡群調査地点位置図（S＝50,000）
調査地点番号は表４に対応　破線は篠ノ井遺跡群想定範囲

Ⅲ　立会調査の結果

平成16年３月にはⅫ区に併行するＡ・Ｂ区延長部分（図５黒塗り部分）で立会調査を実施した。新設道路幅員３ｍを測るが、本線部分の盛土造成ならびに斜面の石積工事がすでに完了し、構造物の保護を図りながらでは遺構確認面がほとんど確保できないことや、すでに調査実施済のⅫ区おける遺構確認深度（現地表下1.5m前後）を勘案すると、工事完了部分より高低差が３ｍ以上に及び調査実施時の安全確保が難しいこと、さらに工事は農道という性格から地下埋設物がない路盤ならびに舗装工事であることなどから発掘調査の実施は断念し、工事立会の実施とした。

立会は現地表下0.7m程度の側溝ならびに1.0mと掘削深度が最も深くなる集水枡設置にかかる掘削時を主として実施した。掘削時に確認した堆積土層はＡ・Ｂ両区延長部ともにⅫ区の状況と同じで、表土ならびに耕作土下に洪水に要因が求められる砂層が堆積し、砂層下で遺物包含層を確認した。側溝設置に伴う掘削では掘削底部が遺物包含層に達するか否かという状況で、大半は砂層中に収まる。集水枡設置部分では包含層上層部に達するが、Ⅻ区の調査状況からは遺構確認面はさらに下層であることが確実で、包蔵される遺構ならびに遺物への影響は最小限にとどまっていることが確認できた。なお、掘削壁面において遺構や遺物の確認はない。

その後実施された路盤工に関わる掘削はさらに浅く、掘削は耕作土内に止まり、遺物包含層まで達していないことを確認した。

以上のように、工事実施地点はⅫ区から連続する遺構群の広がりが確実視されるが、今回の工事掘削は遺構破壊に及んでいないことが確認された。将来、道路拡幅や構造物の地下埋設が実施される際にはあらためて保護措置が必要となる点を明記し、注意を促しておきたい。

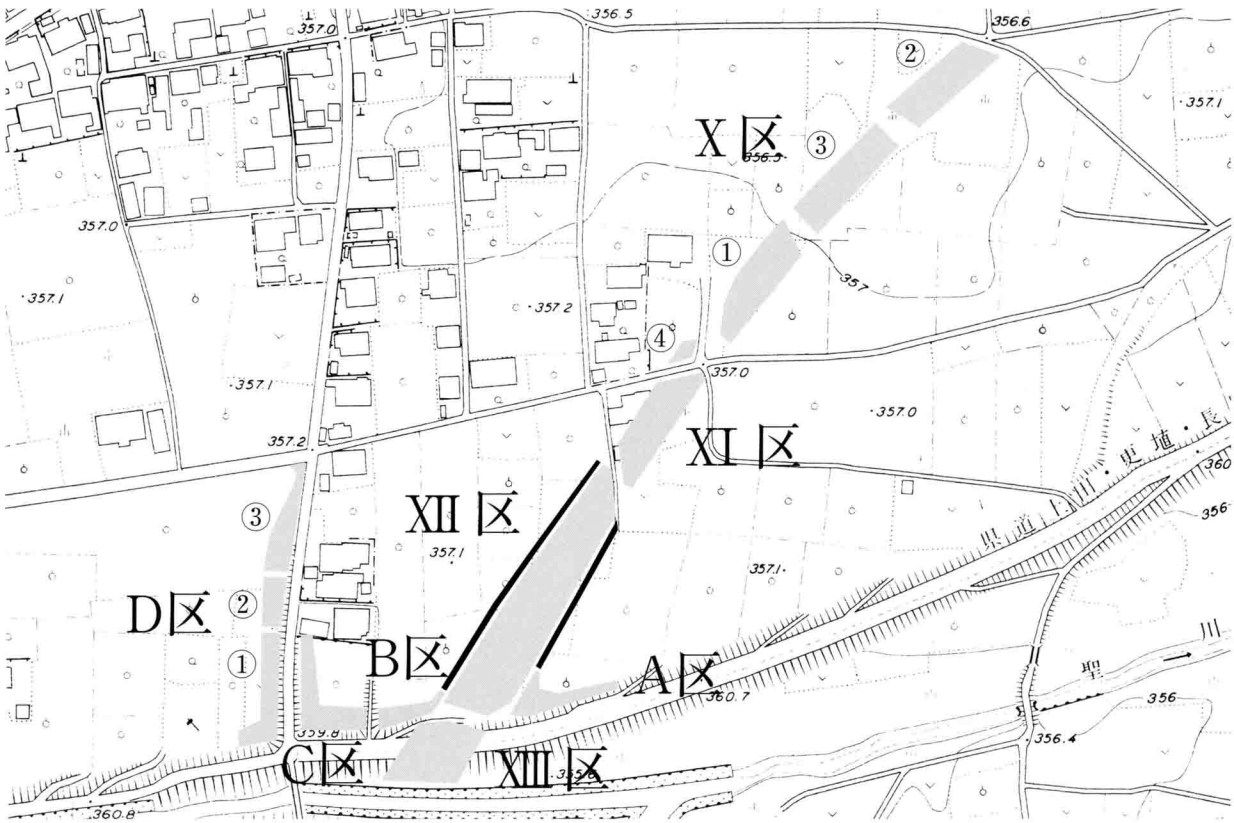

図５　立会実施地位置図（Ｓ＝1/50,000）

写真３　Ａ区延長部工事実施状況（北東より）

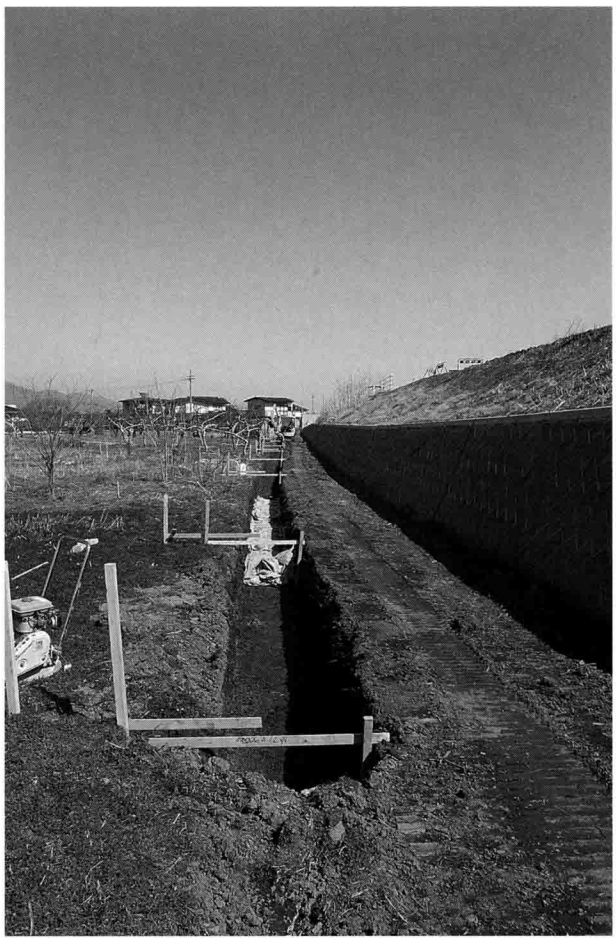

写真４　Ｂ区延長部工事実施状況（南西より）

写真５　Ａ区延長部土層堆積状況（中央部付近）

写真６　Ｂ区延長部土層堆積状況（南西端部付近）

Ⅳ　X区の調査

X区は4地点に分割して発掘調査を実施した。各地点の名称は調査実施順に割り振っており、北から②・③・①・④の順となる。調査は平成12年度に①・②地点、平成13年度に③・④地点を対象に実施している。本書では各地区をそれぞれ完結した調査区とみなし、北側より地区ごとに報告を行う。

1　②地点の概要

②地点からは古墳時代後期から平安時代の集落を主として、古墳時代前期の竪穴住居、中世の井戸および溝が検出された。遺跡の主体となる古墳時代後期から平安時代の集落は隣接する③・①地点でも確認され、一連の集落を形成するものとみられる。

遺構の分布状況は調査区のほぼ中央に中世の溝（SD010）が南北方向にみられ、これを境にして東側と西側に竪穴住居群が密集して検出されている。いずれの住居跡も重複関係を有しており、継続的に居住地として選択されていたことが伺われる。

中世　中世は調査区中央部で検出された溝1条（SD010）と土坑1基（SK081）、井戸1基（SK084）が検出された。住居等集落に直接関わる遺構の検出はない。溝はほぼ南北方向に調査区を横断する。同方向の溝はXI区でも検出されており、自然堤防上に展開する未確認の集落域、あるいは後背湿地の生産域と千曲川を結ぶ導排水路の役割を果たしていた可能性が想定される。SK081は井戸跡かと考えられるSK084を掘り込む、楕円形の土坑である。覆土下層には炭が多量に含まれ、土坑底より骨片の出土がみられた。明確な時期は定かでないが、SK084を掘り込んでいることから中世以降と把握される。

古墳時代後期～平安時代　検出された遺構の大半が該期に属し、本地点が古墳時代後期から平安時代前半期（888年以前）にかけて継続的に居住域として利用されたことが知られる。竪穴住居群は中央部にて検出された中世の溝SD010を境に東西両地域に重複して密集した状況で検出された。SD010付近の空白域はあたかも居住域が二分されていたかのような印象を与える。この空白域で検出されたSB067・068は竪穴住居跡として調査したが住居としての痕跡が認められなく、土坑は分布するが住居は存在しないことから意図的に住居建設地として選択されなかった部分に該当すると判断される。

出土遺物では古墳時代後期のSB064より臼玉が10点まとまって出土している。鉄製品は刀子を中心に平安時代住居での保有率が目立つ。また、SB079からは流動滓の出土がみられ、鍛冶関連遺構の可能性も考慮される。

古墳時代前期　竪穴住居跡と考えられる遺構が4軒（SB065・074・082・091）確認されている。ただし、いずれも壁際での検出でさらに後出遺構の重複があるため全体像がわかるものはない。4軒の住居はそれぞれ一定の距離をもって分布しており、分布状況は極めて粗である。隣接調査区の様相を加味しても集落外縁部に該当する可能性が高い。

弥生時代後期（箱清水式期）　調査区南西隅部で検出されたSB088が弥生時代後期箱清水式期遺構の可能性が考えられるが、ごく一部を検出したにすぎず、ほぼ該期遺構の分布は認められない。ただし、土器破片が各遺構に少量ではあるが含まれており、あるいは後出遺構によって破壊された遺構が存在した可能性も考えられるが、極めて希薄な分布状態であったことは確実であろう。

弥生時代中期から後期（栗林式から吉田式期）　弥生時代中期栗林式土器および弥生時代後期吉田式土器の微細破片が遺構覆土内より出土している。栗林式はSB071・SB081・SB083、吉田式はSB069・SB071・SB084・

SB090覆土より出土が確認され、この両者は同一遺構あるいは重複遺構から出土する傾向が認められる。遺構の確認はなかったが、調査区南西隅部および北東隅部に本来遺構が存在した可能性が考えられる。

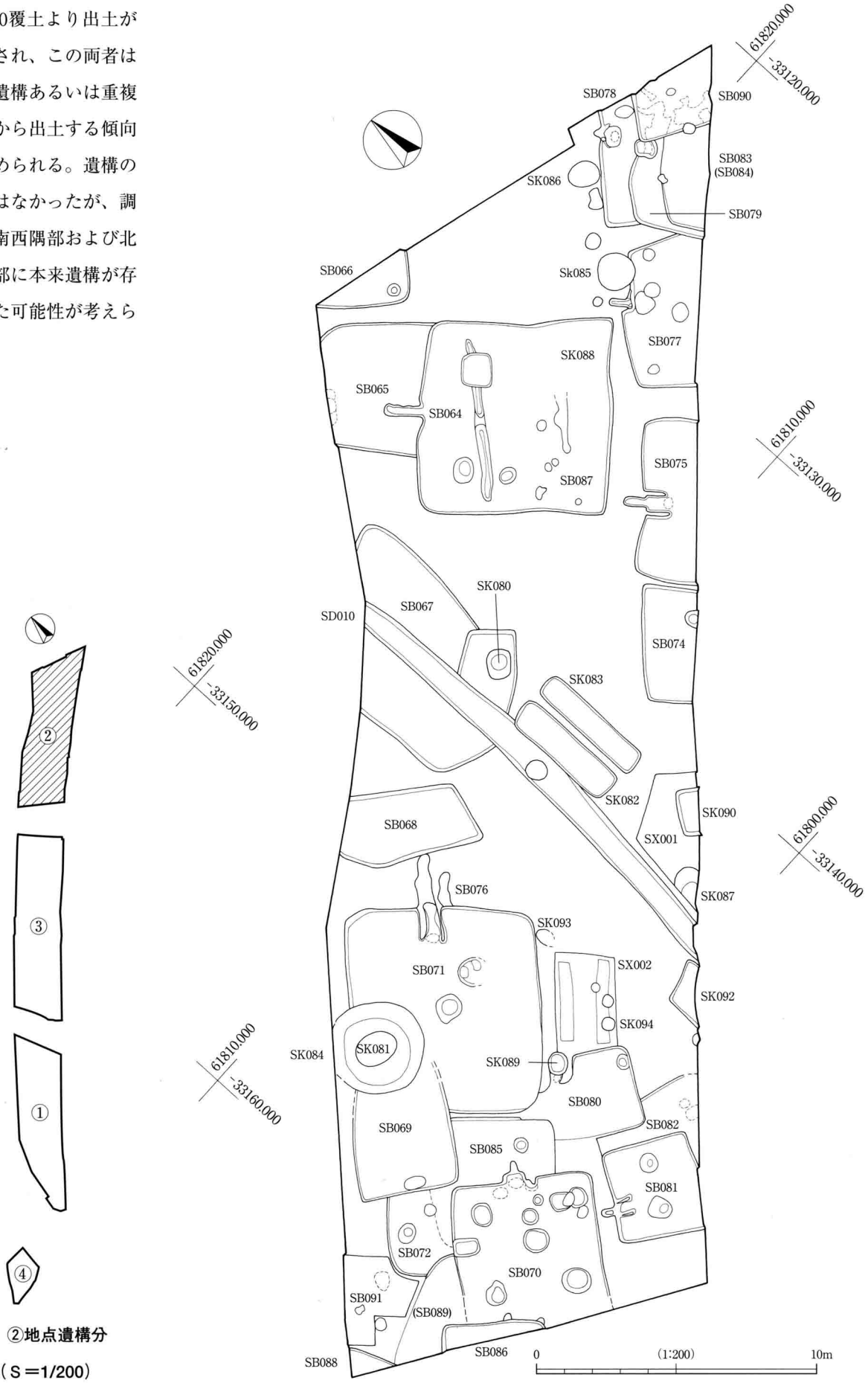

図6　②地点遺構分布図（S＝1/200）

遺構番号	形態 規模m	付属施設			重複関係		備考	土器類		石製品 土製品 玉類	鉄製品 青銅製品	報告頁	時期	
		床面	炉 カマド	柱穴	先	後		実測数	破片重量kg				時代	細別
SB064	方形 6.68×6.85	貼床	カマド	2	SB065		SB087・SK088と同一住居。	10	1.44	臼玉(大)8 臼玉(小)1 土製臼玉1	棒状鉄製品	20	古墳	後期
SB065	方形 4.7×(3.0)	脆弱	炉？火床状	なし		SB064	SB064出土古墳時代前期土器は本住居に帰属する可能性が高い。		1.50			19	古墳	前期
SB066	方形 (3.4×1.6)	脆弱	検出なし	検出なし									時期不明	
SB067	長方形 5.65×5.05	脆弱	検出なし	検出なし		SD010 SK080	青磁・白磁はSD010西側部分からの出土で、SD010に帰属。住居の可能性低い。		19.15				奈良	
SB068	不定形 4.90×2.40	脆弱					住居跡の可能性低い。					41	奈良	
SB069	方形 (3.5)×3.52	貼床	検出なし	検出なし	SK081 SK084 SB085			2	2.51			33	奈良か	
SB070	方形 5.24×(5.3)	貼床	カマド	4	SB075 SB085 SB086			12	16.75		鉄製刀子	33	平安	
SB071	方形	貼床	カマド	2	SB080	SB069 SK081 SK084		22	38.24		鉄製刀子	28	奈良	
SB072	方形 (2.7×2.4)	貼床	検出なし	1	SB069 SB070		床下より弥生土器出土。	3	4.31			32	奈良～平安	
SB074	方形 3.85×(1.8)	脆弱	なし	なし		SB075 SK091			2.47			25	古墳	前期
SB075	方形 5.52×(2.1)	貼床	カマド	検出なし	SB074		古墳前土器はSB74に帰属。	5	7.08			25	(古墳後～)奈良	
SB076	方形か？		煙道			SB071	煙道内より古墳中(高杯)出土。		0.46				奈良以前	
SB077	方形 6.00×(3.0)	脆弱で不明瞭	カマド	なし		SB079 SK085	古墳前中土器片含む。	9	13.27		針状鉄製品	34	平安	
SB078	方形 (4.2×(3.6)		カマド			SB079 SB090 SB083	古墳前期土器含む。	7	11.87	臼玉1 凹石1	鉄製鎌 鉄製刀子 刀子？片2	36	平安	
SB079	方形 (2.9×2.5)		カマド		SB078	SB083 SB090	古墳中期土器含む。	3	9.48		鉄製鎌？片 流動滓	36	平安	
SB080	長方形 (3.4)×2.95	貼床	カマド	なし	S0B82	SB071 SB076 SB085 SK089	SK089によりカマドが破壊される。	6	5.49			23	古墳後～奈良	
SB081	方形 3.05×3.20	貼床	カマド	2	SB082		2本柱穴構造の小型住居。	4	5.58	臼玉1		27	奈良	
SB082	方形 4.00×(1.6)	硬化面	炉	なし	SB080 SB081			2	1.00			27	古墳	前期
SB083	方形 (3.0×1.3)	脆弱	検出なし	検出なし	SB079	SB090		2	2.48	管玉1		36	平安	
SB084	不明				SB083		SB083上層を別住居として認識。	1	1.35			36	平安～中世	
SB085	方形 4.15×(2.2)	貼床	検出なし	1		SB069 SB070		1	1.51	紡錘車1		32	古墳後～奈良	
SB086	方形 3.8×(0.9)	脆弱	検出なし	検出なし	SB089				0.68				奈良～平安	
SB087	方形	貼床	なし	検出なし			SB064と同一住居。	3	4.45			20	古墳	後期
SB088	不明 (2.0×1.1)	脆弱	検出なし	検出なし					0.14		鉄鏃？		弥生(後)か	
SB089	方形 4.45×(1.7)	貼床	検出なし	検出なし		SB070 SB086		なし					古墳後～奈良か	
SB090	方形 (1.8×2.5)	貼床	検出なし	検出なし	SB078 SB079 SB083		床面上に焼土分布。	3	3.20			36	平安か	
SB091	方形 (3.4×2.5)	脆弱	炉	検出なし				2	3.15	管玉1		19	古墳	前期

遺構番号	形態 規模 m	付属施設			重複関係		備考	土器類		石製品 土製品 玉類	鉄製品 青銅製品	報告頁	時期	
		底面	柱穴等	備考	先	後		実測数	破片重量 kg				時代	細別
SD010	幅 1.03	平坦			SB067 SK082 SK087			3	3.670	凹石 1		39	中世	
SK080	方形 1.02×0.84				SB067				0.37				奈良～平安	
SK081	楕円形 径 2.3				SK084 SB071		底面には焼土粒・炭が広がり、獣骨片の出土が認められた。					40	中世以降か	
SK082	長方形 4.18×1.10	平坦				SD010	SD010 出土品と接合あり。	4	1935	砥石 1		26	古墳後～奈良	
SK083	長方形 4.25×0.95	平坦							0.27			26	古墳後か	
SK084	円形 径 3.25	平坦		湧水	SB071	SK081	出土土器は奈良時代を主体とするが、中世とみられる		2890			40	中世か	
SK085	円形 径 1.36	平坦			SB077		井戸跡を想定したが、湧水等なし。		0.6				平安	
SK086	楕円形 1.20×0.95	平坦							0.22				不明	
SK087	円形 径 0.8	平坦				SD010							弥生(後)～古墳(前)	
SK088	方形	不明瞭	なし	なし			SB064・SB087 と同一住居跡。		1440	臼玉 1	鉄製刀子	20	古墳	後期
SK089	楕円形 0.79×0.65	平坦			SB080				0.05				奈良～平安	
SK090	方形 1.55×(0.8)								0.04				不明	
SK091	円形 0.57×(0.5)				SB074		SB074 柱穴の可能性あり。		0.02				古墳	前期
SK092	方形か 1.55×(0.8)	平坦 脆弱					SB067 に類似する。		0.5				奈良～平安	
SK093	円形 0.4×0.2	平坦	なし						0.003				古墳後以降	
SK094	円形 径 0.5	平坦	なし				SX002 内で検出。		0.16				不明	
SX001	不定形		なし			SD010 SK090	遺構としての明確な根拠なし。 包含層溜まりの可能性あり。		1.0				古墳か	
SX002	方形		なし			SB071 SB080	SB067 等の状況に近く、包含層溜まりの可能性が高い。		0.6				奈良～平安	
Pit48	円形 径 0.5						SX002 内で検出。		0.06				古墳後以降	
検出面										臼玉 1 丸玉 1 土製丸玉 1 土錘 1	鉄製刀子 2			

表 5　X 区②地点検出遺構一覧表

方形ピット群

調査区全面より一辺20cm程度の方形のピット群が検出された。東西および南北方向に軸を持つ列として検出された。この軸方向は③地点でより明瞭に検出されたピット群と共通し、一連の遺構群と捉えることができる。遺構覆土は黄褐色砂質土の単一層である。杭などの打ち込み痕の可能性も考慮したが、遺構の性格を示す残存物や痕跡は観察されなかった。遺物は下層に遺構がある場合、その下層遺構に帰属すると考えられる遺物の出土がみられるのみで、当遺構に直接伴うと考えられる遺物は認められない。直接伴う遺物はないと判断される。遺構の重複関係からは平安時代以前の検出遺構すべてを掘り込んでいて、中世以降であることは確実である。ただし、中世遺構との直接的重複関係は明瞭でなく、明確な前後関係を把握することはできなかった。

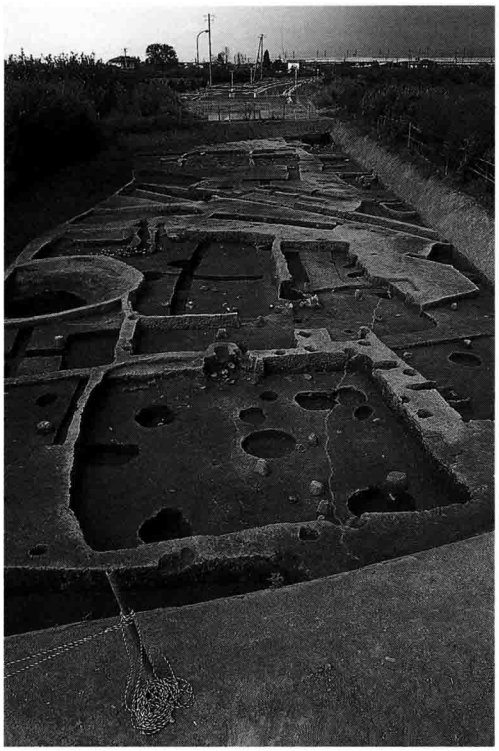

写真７　②地点全景写真（南西から）

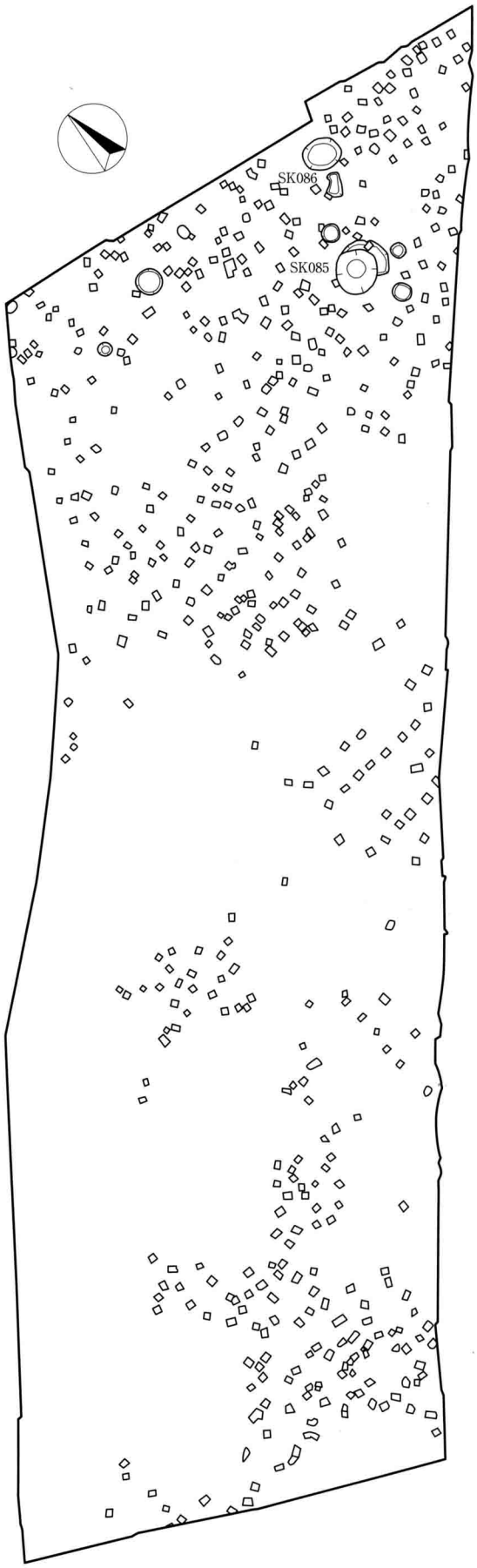

図７　方形ピット群平図実測図（Ｓ＝1/200）

2　②地点で検出された遺構と出土遺物

SB091（PL－１・PL－Ｘ－４）

調査区南西端部で検出された竪穴住居である。北東側でSB072に掘り込まれ、南側でSB089として調査した部分と重複し、部分的な検出であった北壁の一部が確認されたにすぎず、残存長3.4×2.5mを測る。

床面は脆弱で、貼床・硬化面などは検出されなかった。また、柱穴も検出されていない。検出された遺構としては炉がある。よく焼けた火床の上部に微量な炭がみられたのみで、上部構造は残存していなかった。

遺物は炉東側の焼土分布域付近より、土師器片がまとまって出土している。また、土器片に混じって管玉が１点出土した。図化・掲載した遺物は土師器壷２点と管玉である。２は全体像がわかる平底の壷である。外面調整は縦方向のミガキで、口縁のみナデを施す。内面調整は、口縁が横方向のミガキ、頸部は縦方向のミガキで体部は板状工具によるナデを施す。器高29.3cm、口径13.6cm、底径4.0cmを測る。３は底部を欠損する壷である。外面調整はハケ調整後に横方向のミガキを施す。内面調整は頸部から口縁部にかけてハケ後、横方向のミガキ、体部はハケ後、ナデを施す。残存高27.8cm、口径15.2cmを測る。管玉は蛇紋岩製で、長さ1.4cm、直径約0.6cmを測る。穿孔は実測図上面が中央にあるが、実測図下面では偏っており、片側穿孔の可能性が考えられる。

以上の様相より、古墳時代前期と考えられる。

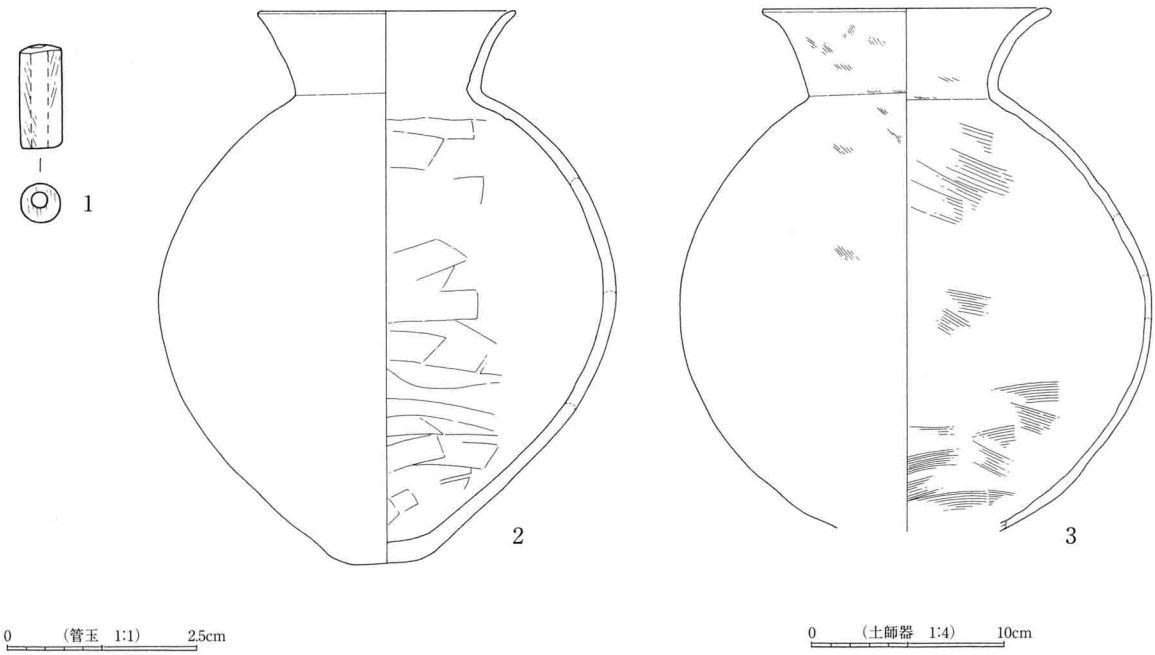

図８　SB091出土遺物実測図（土器；Ｓ＝1/4　管玉；Ｓ＝1/1）

SB065（PL－１）

南東側でSB064が重複し、西側は調査区外へと延びる。両壁が確認された南北方向で4.7m、東西方向は残存長で3.9mを測る。住居の形態は不明であるが、北側で緩やかな円弧を描いており、隅丸長方形を呈すると考えられる。床面は脆弱で貼床・硬化面等は検出されていない。また、柱穴の検出もなかった。調査区西壁際部で焼土ならびに炭の散布を確認した。焼土は幾分凹んだ皿状を呈し、炉の可能性が考えられる。

出土遺物には、土師器小片が少量認められるが、図化・掲載できるものはない。

重複ならびに検出状況・出土遺物の様相から古墳時代前期と考えられる。

SB064・SB087・SK088（PL－１；PL－Ｘ－１、PL－Ｘ－４・５）

SB064　SB065を掘り込む竪穴住居である。床面は住居中央部を中心に貼床が検出された。柱穴は２カ所検出されているが、東側の柱穴は西側に比べて規模が小さい。

カマドは北壁中央部で検出された。袖などは残存していない。カマド前面にはカマド範囲を示すかのように半円形に炭の分布が認められた。この炭分布域の内側には焼土粒が比較的多くみられたが、よく焼けた火床は検出されなかった。また、炭分布域の内側から東西壁沿いならびに柱穴内より数点の板状石が検出されている。被熱痕などは観察されないが、不自然な板状石の分布は袖などが残存していないことと合わせて考えると、カマド破壊の痕跡と捉えることができ、石芯構造であった可能性が考えられる。煙道は壁面より真っすぐに約1.4m延びる。延長方向に緩やかな傾斜を有し、両側壁面ならびに先端部は極めてよく焼けている。柱穴間には東西方向に浅い溝が掘り込まれる。住居中央で浅くなり、東側では柱穴と重なる。壁面まで達しないことからは間仕切り溝である可能性が考えられる。

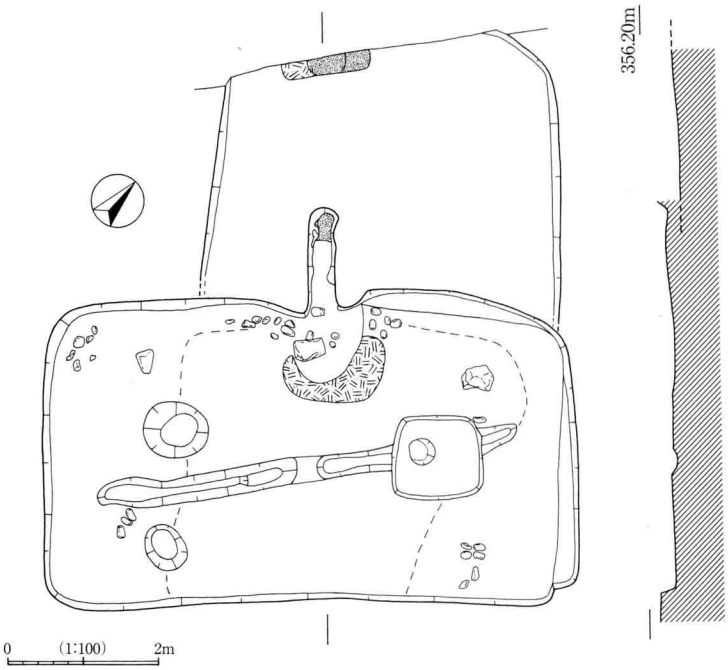

図９　SB064・SB065実測図（Ｓ＝1/100）

遺物はカマド前面の炭直上ならびに柱穴内とその周辺より土器が出土している。カマド内ならびに柱穴内から出土する点より、カマドの破壊ならびに上屋構造の撤去後に土器群が投棄されたと考えられる。また、貼床上からは滑石製の臼玉が合計10点出土している。カマドより南壁付近まで間仕切り溝の周辺を中心に分布している。複数の臼玉が連をなした状況は認められず、それぞれ単独での出土である。また、カマド前面部、隅部、柱穴ならびに間仕切り溝の周辺からはこもで石と考えられる石材が多量に出土している。特にまとまりはみられず、壁に沿って投棄された可能性が想起される。

出土遺物は土師器・須恵器・臼玉・鉄製品がある。土師器には杯・高杯・甑・壷・甕がある。杯は内面黒色処理が施されるものが口径13.0cm、器高4.2cm、黒色処理がないものが口径11.1cm、復元器高4.0cmを測る。高杯は２点あるが、基本的な形態・調整ともに同一である。外面はミガキ、杯内面はミガキ後黒色処理が施される。脚内面はケズリである。甑は単孔甑である。内外面ミガキ調整で口縁内外のみナデ調整が施される。壷は該期特有の無頸壷で、内外面ともにミガキが施される。甕は内外面ハケ調整が施される長胴甕である。須恵器には杯蓋・横瓶がある。杯蓋は復元口径9.8cmと小型化が著しい。鉄製品は２点出土し、直接の接合はないものの同一個体と考えられる。残存長約11cm、幅0.6cm、厚さ0.4cmを測る断面方形形態で、鉄鏃茎部の可能性が考えられる。石製臼玉は９点出土し、大型品と小型品の二種が認められる。大型品は８点出土し、いわゆる滑石製である。直径は1.1～1.35cm、厚さは0.6～1cmを測り、ほぼ平均値にあたる直径1.2cm、厚さ0.8cmの製品が最も多い。いずれも上下面の成形は不完全で、平滑な面をなすものはない。全面に整形擦痕がよく残る。小型品は１点で、直径0.55cm、厚さ約0.4cmを測る。石材は他の臼玉と異なり、蛇紋岩とみられる。上下面は調整が加えられるが、平坦面とはなっていない。また、側面中央に不明瞭ながら稜が認められるが、全周せず波打つような形態である。

土製臼玉は１点認められる。直径0.6cm、厚さ0.5cmを測り、石製の小型品とほぼ同じ大きさである。上下面ともよく整えられ、側面は稜をもたない樽形を呈する。以上の様相より古墳時代後期と考えられる。

SB087　SB064の南東側に隣接して検出された。当初、同一遺構の可能性も考えられたが、SB064に比べて黄褐色粘質土ブロックが覆土中に多くみられたため、別遺構として調査を実施した。調査範囲の東半部では貼床が確認された。この貼床は北壁ならびに東壁外へと続き、検出範囲内では収束しないことが明らかであった。貼床の境にあるピットは径が小さいが深くしっかりと掘り込まれており、柱穴に該当すると考えられる。床面上からは、SB064間仕切り溝に平行する溝が検出された。東壁外へと延びるが、延長部に該当するSK088の範囲内では検出されなかった。溝内からはこもで石と考えられる石や板状石の出土がみられた。

遺物は南東壁際より土器片が、西壁付近を中心に４・５点のこもで石がまとまって出土している。出土遺物には土師器甕・須恵器蓋杯・壷がある。須恵器杯蓋は口径11.3cm、器高3.4cmを測る。天井と口縁の境は沈線によって区画される。回転ヘラケズリは1/3以下の範囲である。杯身は口径10.2cm、器高3.5cmを測る。貼付けによる立ち上がりは短く、内傾する。この蓋と身は胎土・焼成ともに類似し、セット関係をなすと考えられる。須恵器壷は復元口径8.8cmで肩部に一条の沈線を巡らし、短頸壷と考えられる。土師器甕は内外面ともにナデ調整を主体とする。内面上半部はハケ状の工具痕が観察されるが、一般的なハケ目とは異なり、ナデ工具の痕跡と考えられる。以上の様相より、古墳時代後期と考えられる。

SK088　SB064ならびにSB087の北東側で検出された土坑である。当初2.7×2.1mの長方形土坑として検出されたが、掘り下げに伴い南東側で壁が確認され、1.5×2.1mの方形土坑と把握された。当初土坑範囲内として掘り下げた南東壁の外側はSB064ならびにSB087とほぼ同一レベ

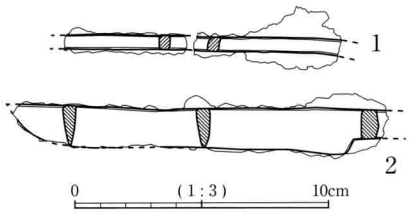

図10　SB064・SK088
出土鉄製品実測図（Ｓ＝1/3）
1：SB064　2：SK088

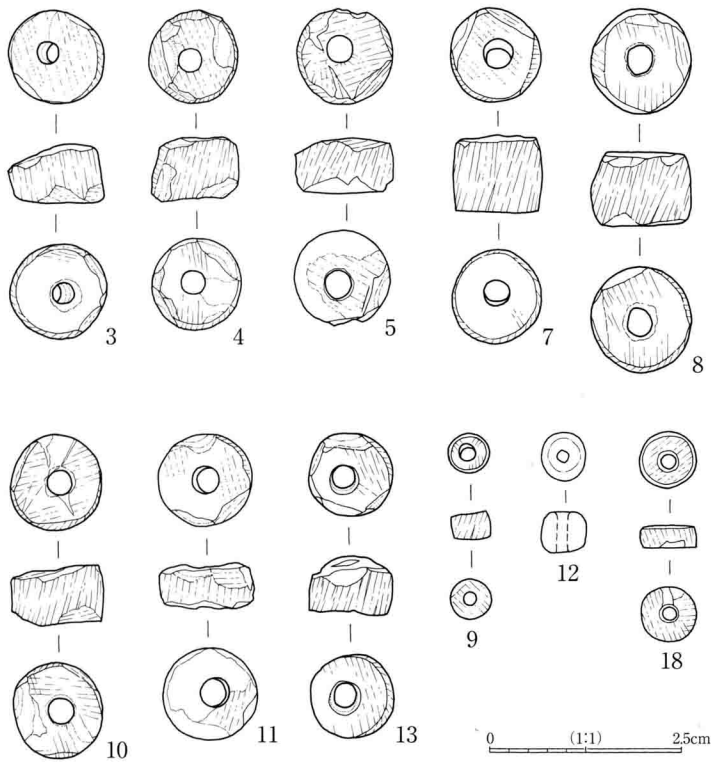

図11　SB064・SK088出土臼玉実測図（Ｓ＝1/1）

No	直径cm	厚さcm	出土遺構名	材質
3	1.35	0.8	SB064	滑石
4	1.2	0.8	SB064	滑石
5	1.3	0.7	SB064	滑石
6	1.2	0.8	SB064	滑石
7	1.2	1	SB064	滑石
8	1.35	1	SB064	滑石
9	0.55	0.4	SB064	蛇紋岩
10	1.2	0.8	SB064	滑石
11	1.25	0.6	SB064	滑石
12	0.6	1	SB064	土
13	1.1	0.8	SB064	滑石
18	0.75	0.3	SK088	滑石

表６　臼玉計測表

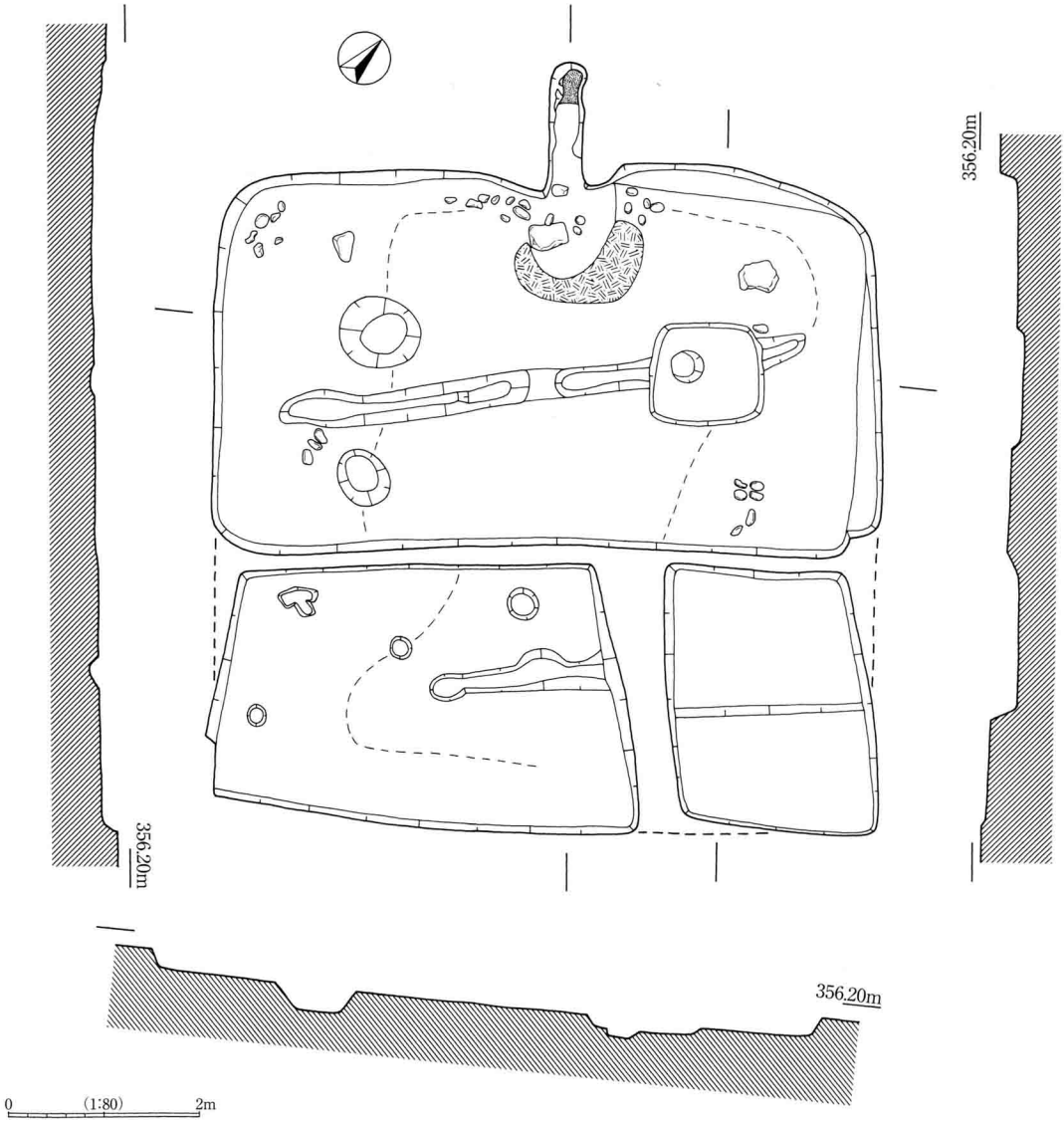

図12　SB064・SB087・SK088実測図（S＝1/80）

ルであることから、これらの住居の東隅部に該当すると考えられる。

出土遺物には土師器・須恵器・滑石製臼玉・鉄製品がある。臼玉は直径0.75cm、厚さ0.3cmを測る中型品で、調整擦痕を明瞭に残している。石材はSB064出土の大型品と同様である。鉄製品は鉄製刀子が出土している。残存長約15cmを測り、切っ先ならびに茎部を欠損する。関は錆により不明瞭であるが、全体的に残りはよい。

出土した土器片の様相ならびにSB064・SB087を掘り込むという重複状況より奈良時代に該当する可能性が考えられる。

さて、これまで別々に記したSB064とSB087は貼床がそれぞれ接する側の壁外へと続き、当該壁の確認状況は明瞭でないうえ、同一高の床面上から検出された溝跡は方向・形態・深さ、さらには板状石やこもで石の入り込み方も極めて良く類似している。さらに、覆土の違いも確認面でこそ違いが見られたが、覆土下層では大きな違いは認められないことより同一住居であることはほぼ間違いがないと考えられる。また、SK088東南側で確認された壁は前述のようにSK088に直接関わるものではなく、位置的にSB064・SB087の東南隅部にあたることから同一遺構と捉えられ、ここに後出するSK088が重複していると考えられる。

以上より、本住居は6.7×6.9mを測る方形プランの竪穴住居と考えられる。

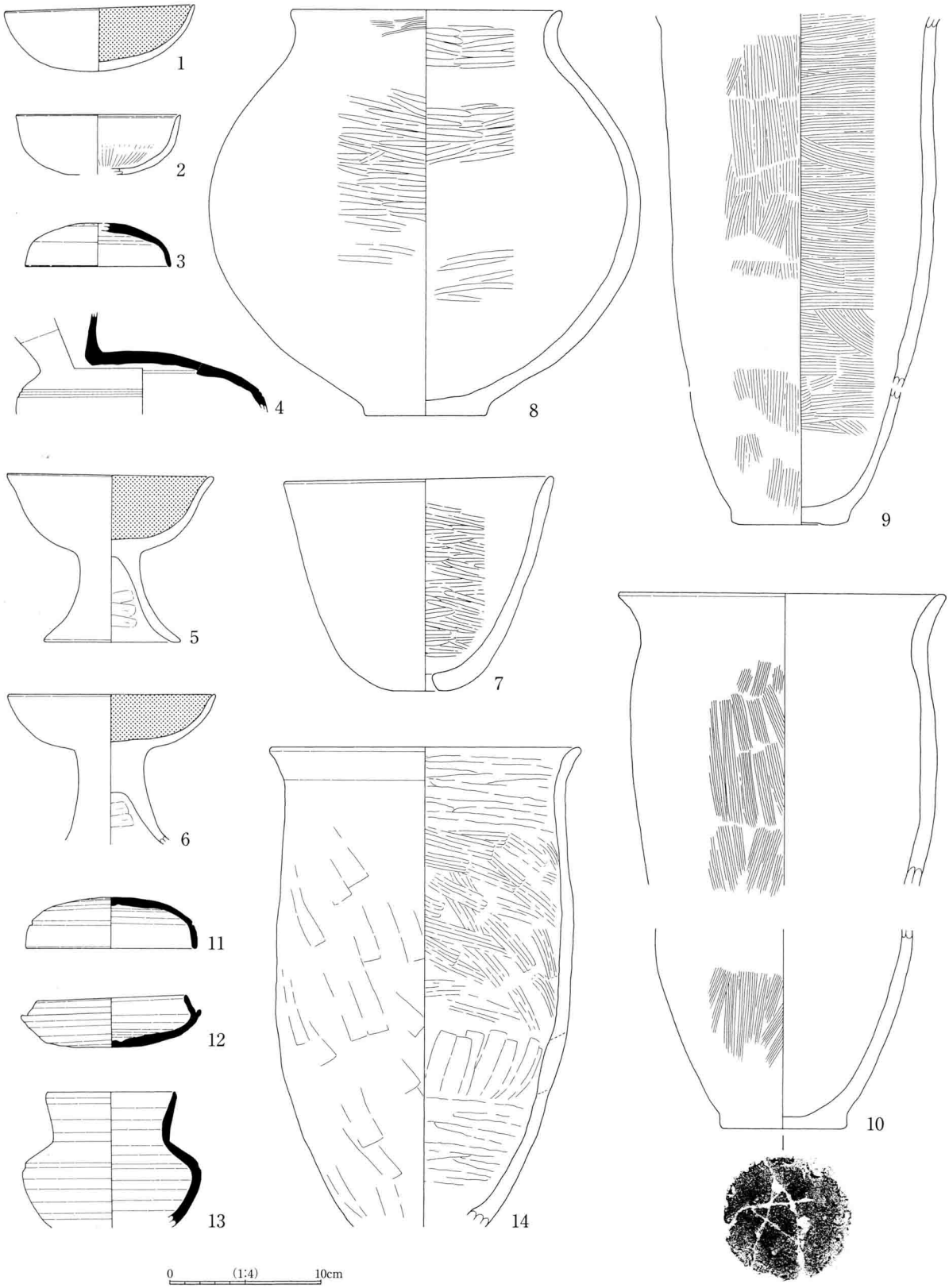

図13　SB064・SB087出土土器実測図（S＝1/4）SB064；1～10　SB087；11～14

SB080（PL－1）

2.95m×4.3m以上を測る長方形プランの竪穴住居である。東側でSB082を掘り込むが、西側でSB071・SB085に掘り込まれ、西側はほとんど残存していない。

床面は全面貼床であった。柱穴は検出されていない。カマドは長辺に当たる北壁のほぼ中央部から検出された。ただし、焼土の一部と炭の広がり、右袖部の痕跡が確認できたに過ぎず、大半はSK089の重複によって破壊されている。右袖は壁面より炭分布範囲まで半円形に延びる。炭ならびに焼土は残存部下に入り込まず、下部のみ残存していることが確実である。

遺物はカマド前面の右袖部上から炭分布範囲にかけて土師器片がまとまって出土している。また、右袖の壁際残存部上からは図15－３の甑が４の甕上に組合わさった状況で出土した。３の甑は口径13.6cm、器高13.1cmを測り、体部外面をハケ調整するほかはナデによる。４は口径12.5cm、器高14.2cm、底径6.7cmを測る平底の小型甕である。内外面ともにナデ調整を施し、口縁部はヨコナデによって直立させる。破壊されたカマド袖部上への設置で、使用時の状況を示すとは捉えられないが、組合せの実体を示す可能性が高く、注目される。

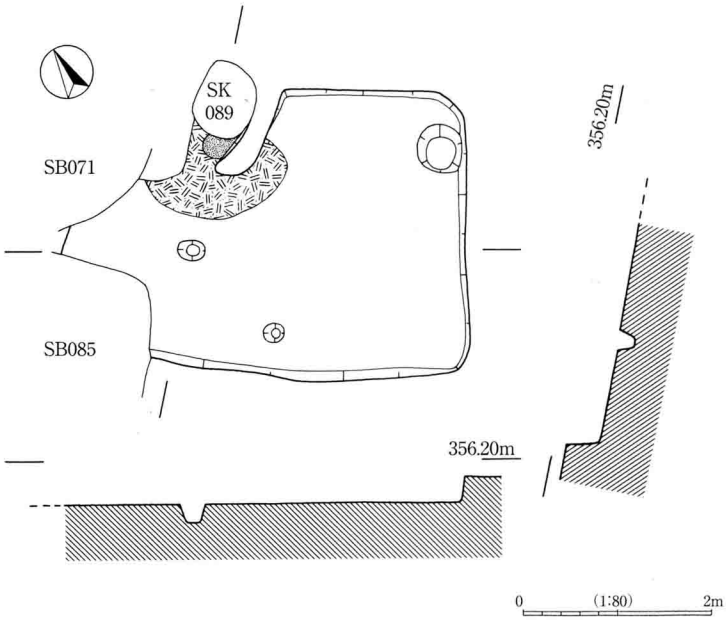

図14　SB080実測図（Ｓ＝1/80）

以上の様相より、古墳時代後期と考えられる。

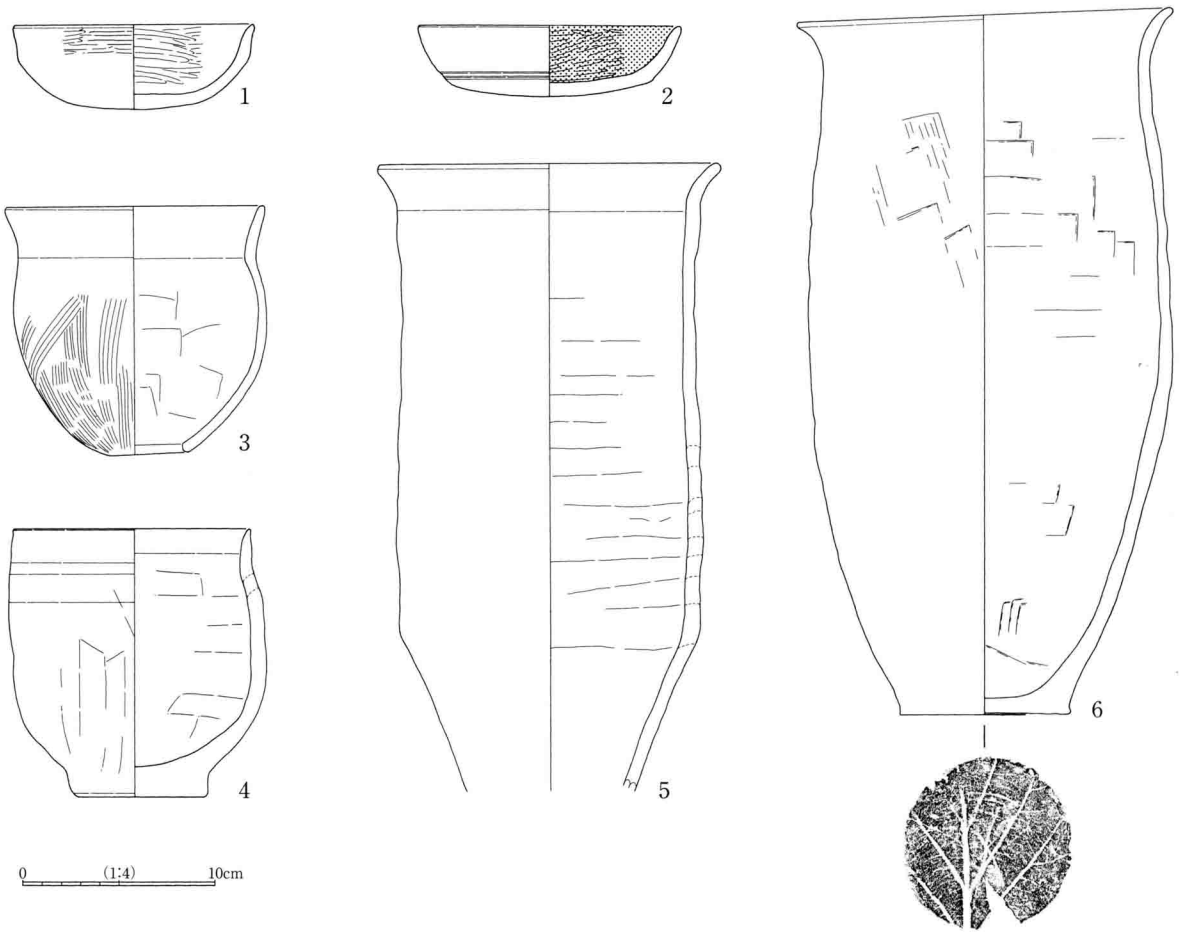

図15　SB080出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）

SB075・SB074（PL－４）

SB075は調査区壁際で検出された竪穴住居である。一辺5.52mを測り、南側は調査区外となる。

床面は貼床が確認されたが、柱穴は検出されなかった。北壁中央部からはカマドが検出されている。火床ならびによく焼けた側壁が確認されて、方形を呈するカマドと捉えられる。右袖部には袖部の残存かと考えられる粘質土の存在が確認された（図16の一点破線の範囲）が、左袖は痕跡を残していなかった。煙道は壁外に真っすぐに0.9mほど延びる。また、煙道内まで炎の流れがあったようで、煙道取り付き部の壁面はよく焼けていた。

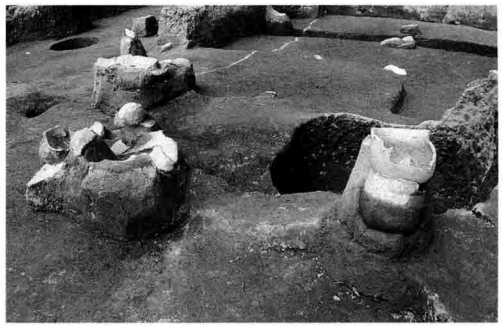

写真８　SB080土師器出土状況

遺物はカマド前面ならびに床面上から土師器・須恵器の出土がある。土師器無頸壷は口径9.8cm、器高9.6cmを測り、鉢に近い大きさである。内外面ミガキ調整で内面は黒色処理される。甕は口径21.3cm、器高35.2cmを測る長胴甕で、外面ハケ調整、内面ナデ調整である。なお、３～５の壷ならびに甕は想定される本住居の時期と合致せず、隣接して検出されたSB074に帰属すると考えられる。

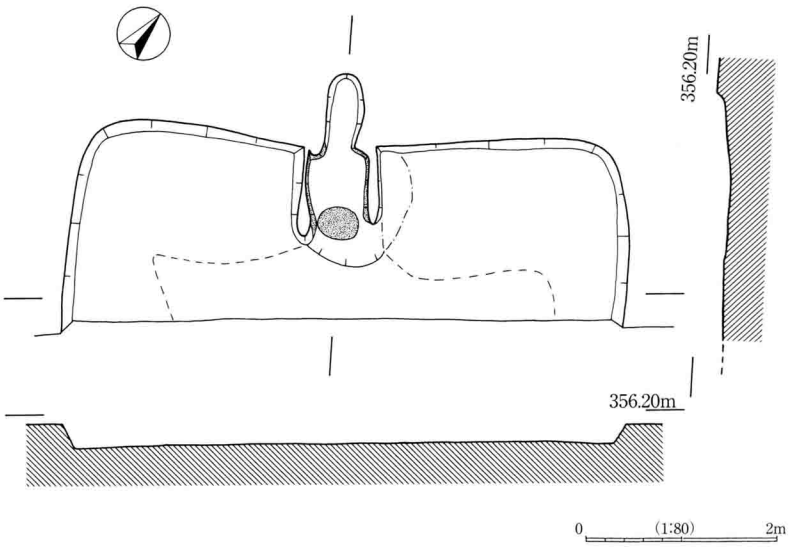

図16　SB075実測図（Ｓ＝1/80）

以上の様相より、古墳時代後期と考えられる。

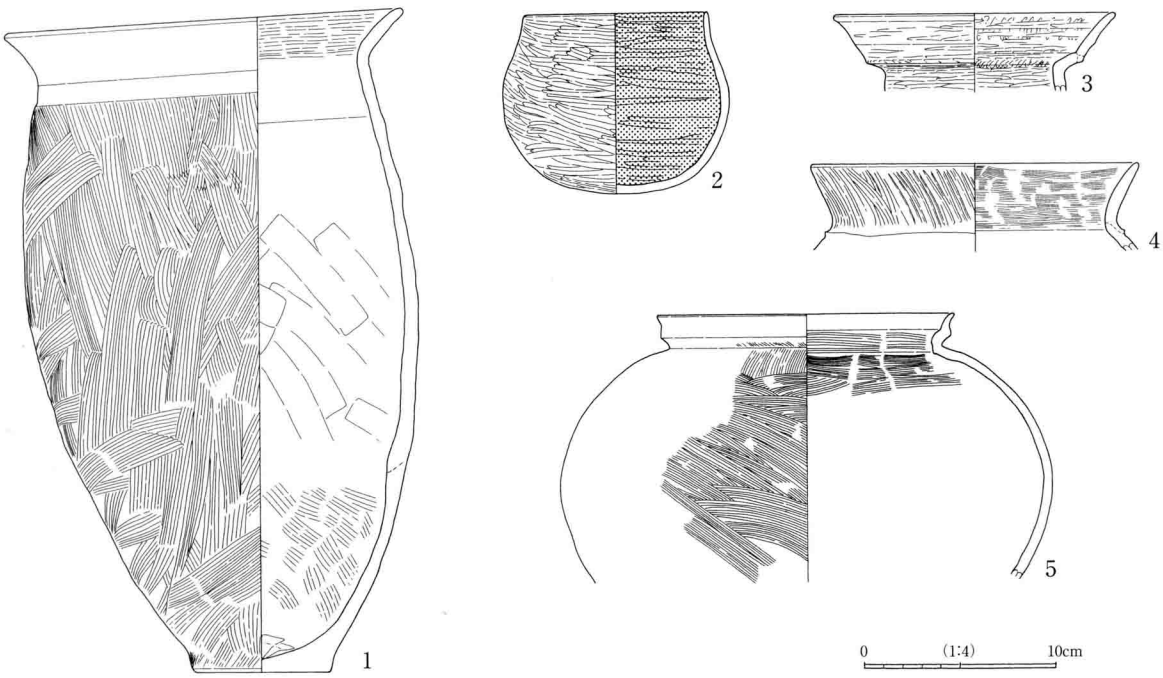

図17　SB075出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）

SB074はSB075の南西側に隣接して検出された。一辺3.85mを測り、南側は調査区外となる。床面は脆弱で、柱穴ならびに炉・カマド等の施設は検出されていない。

出土遺物には円孔のある高杯脚部片や赤彩が施された壷の破片などがみられるが、図化・掲載できるものはない。なお、SB075覆土出土の土師器のうち、図17－３～５は前述のように本遺構に属すると考えられる。３は有段口縁壷の口縁部片である。内外面ともにミガキ調整が施される。小型品で口径は14.9cmに復元される。４はく字状口縁甕の口縁部片で、復元口径は17.3cmを測る。５はS字状口縁台付甕で台部は欠損している。内外面ともにハケ調整が施されるが、S字甕特有の外面肩部の羽状ハケ目はみられない。

SB074は要件を備えず竪穴住居跡とは考えづらいが、SB075に先行して古墳時代前期の遺構が存在したことは確実視される。

SK082・SK083（PL－１）

SD010の東側並列して検出された土坑である。

SK082は4.18×1.10mを測る長方形プランを呈する。壁面は四壁ともほぼ垂直で、明瞭に把握された。覆土は暗褐色粘質土の単一層で、覆土中位より土器片ならびに自然石が出土している。プランより墓跡を考慮したが、棺などの痕跡は認められなかった。出土遺物には杯部内面が黒色処理された土師器高杯、甕がある。底部に密着した状態でないため確実ではないが、混入と考えられる土器片が認められないことから、古墳時代後期と考えられる。

SK083は4.25×0.95mを測る長方形プランを呈する。SK082に並列し、幅が一回り小さい。覆土は暗褐色粘質土の単一層で、SK082同様に棺などの痕跡は認められなかった。図化・掲載できる遺物の出土はない。SK082と並列して位置することや規模が同じであること、微細片ながら出土した土器片より古墳時代後期に該当する可能性が高いと考えられる。

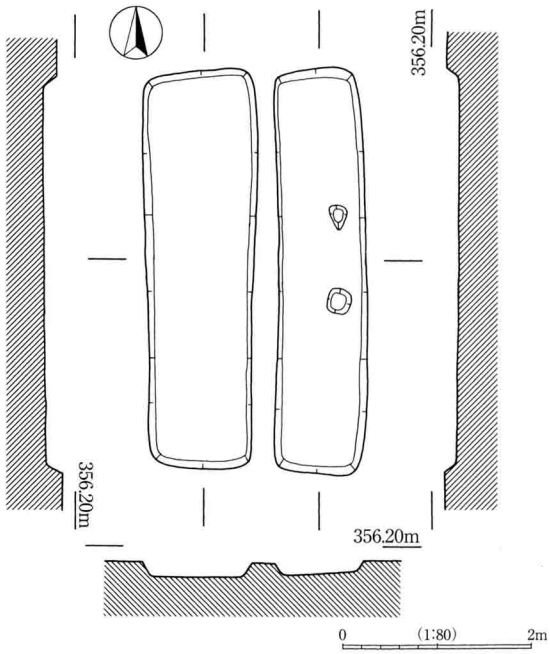

図18　SK082・SK083実測図（S＝1/80）

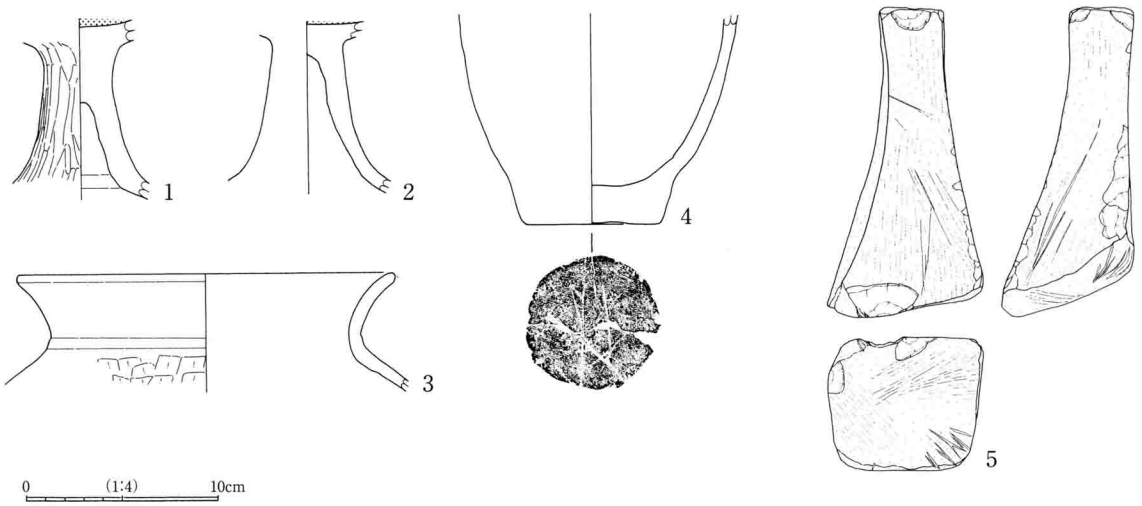

図19　SK082出土遺物実測図（S＝1/4）

SB081・SB082（PL－1、PL－X－4）

SB081は3.05×3.20mを測る方形プランの竪穴住居である。南側隅部は調査区外となる。

床面は貼床が確認された。柱穴は二カ所検出され、二本主柱の構造と考えられる。カマドは西壁中央部より検出され、火床ならびに左右袖部が確認された。火床は袖先端部間で検出され、非常によく焼けていた。火床よりカマド内部には炭の分布が確認された。袖は左右ともに内面のよく焼けた壁面が検出されたが、外側の痕跡は認められなかった。煙道は壁外に真っすぐ1mほど緩傾斜を有して延びる。なお、支柱石かとみられる石材が確認されており、カマド構築にあたって石材が使用された可能性が考えられる。

遺物は須恵器（杯蓋・杯身・広口甕）・滑石製臼玉が出土している。須恵器杯身は口径14cm、器高4.5cmを測り、底部はヘラ状工具によるケズリ調整が施されている。滑石製臼玉は覆土上層より出土し、直径約1.5cm、厚さ0.6cmを測る。上

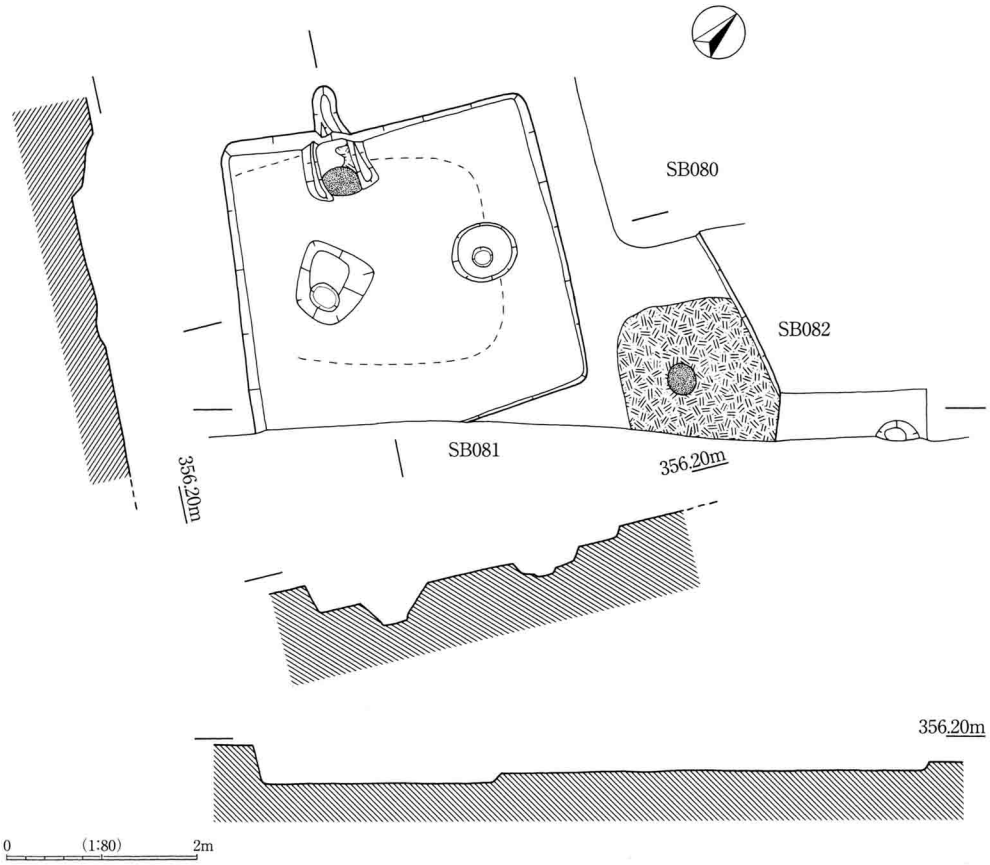

図20　SB081・SB082実測図（S＝1/80）

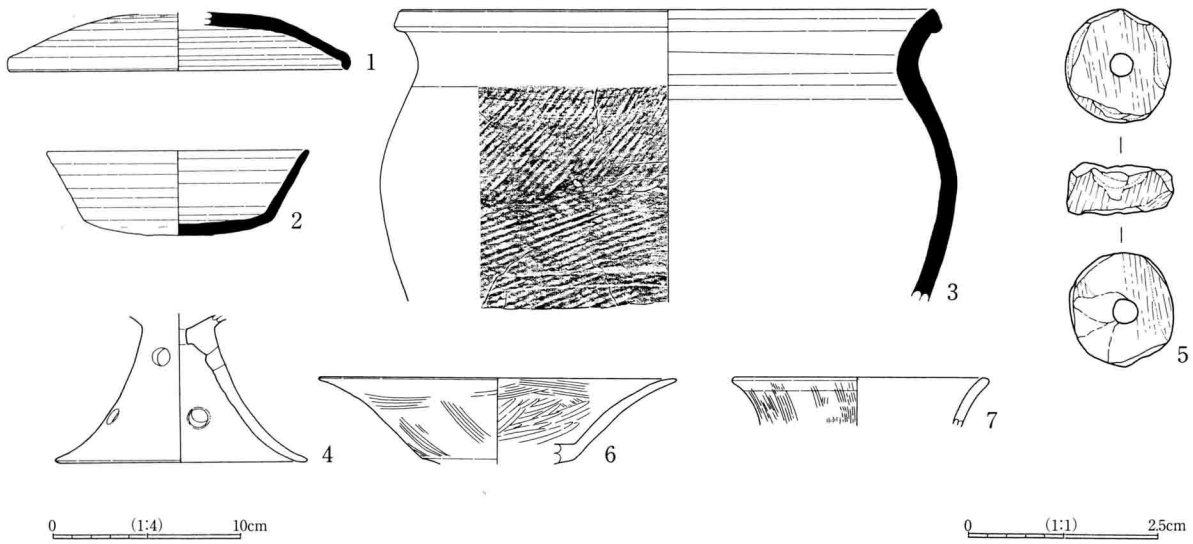

図21　SB081・SB082出土遺物実測図（S＝1/4　5のみS＝1/1）1～5：SB081　6・7：SB082

下面の凹凸は著しく、平坦面をなさない。以上の様相より、奈良時代に該当すると考えられる。

SB082はSB080とSB081の調査中に検出された竪穴住居である。北側をSB080に、南側をSB081に掘り込まれ、東側が調査区外となるため、プランは把握できなかった。調査区壁際より炉が検出されている。中央部が凹んだ形態でよく焼けた火床が確認されたが、その他の構造については残存していなかった。

遺物は炉周辺より出土し、土師器高杯・甕がある。また、４の土師器器台脚部はSB081出土であるが、本住居に帰属すると考えられる。以上の様相より、古墳時代前期後半代に該当すると考えられる。

SB071（PL－２、PL－Ｘ－１・２・５）

7.35m×6.65m以上を測る、方形プランの大型竪穴住居である。北西隅部が調査区外となるほか、西南西側はSK084とSB069の重複によって失われている。

床面は中央部を中心に貼床が検出された。貼床外側も硬化面として把握できたが、明瞭な貼床は中央部に限定される。柱穴は北西側（カマド左側）で１カ所検出されている。対称地点を中心に精査を行ったが、他には検出されなかった。

カマドは北東壁のほぼ中央で検出された。火床は0.5×0.35mの楕円形を呈し、両袖先端部で検出された。袖は両側ともに先端部に土師器甕を口縁部側を埋め込んで逆位に設置していた（左袖部20、右袖部19）。甕に被熱痕は顕著でないことから、芯材として使用されたと考えられる。また、左袖では火床内側にも小型の

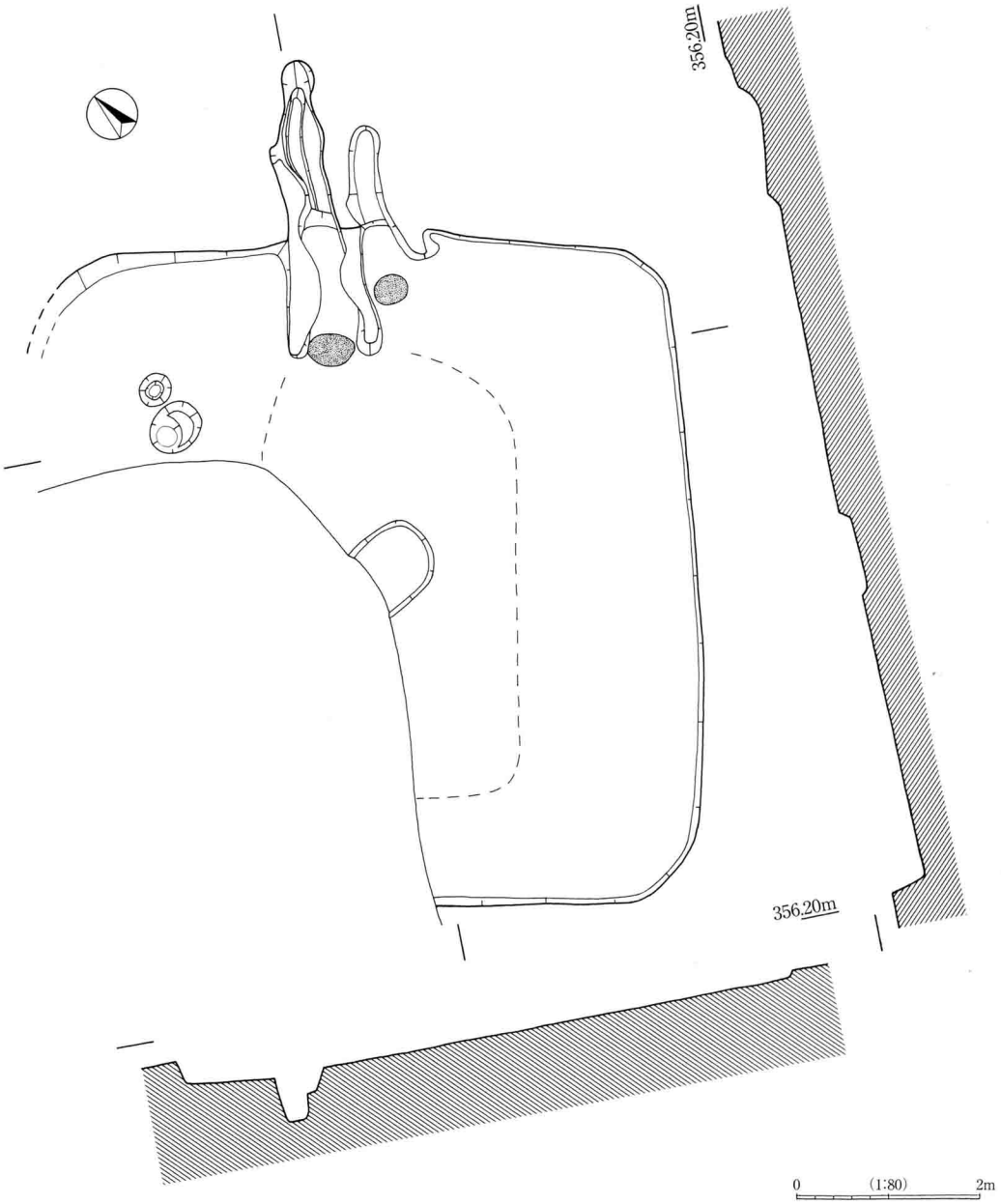

図22　SB071実測図（Ｓ＝1/80）

甕（18）が逆位に設置されていた。この小型の甕は側壁と天井の境から出土しており、先端部同様にカマド構築材として転用された可能性が考えられる。側壁は両側壁ともによく焼けていて把握が容易で、部分的に天井の一部まで連続して確認された。また、壁と煙道の連結部の左側には被熱を受けた赤色変化土層が非常に明瞭に観察された。右側では対照的にほとんどみられず、煙道底面の溝状掘り込みが左側に偏っていることと関係すると考えられる。煙道は壁外に約1.6m延び、住居外側にむかって溝状に深く掘り込まれている。この溝状掘り込みの先端部はほぼ垂直に立ち上がり、ここより上方を向いた煙突になるとみられる。

前述のカマド（１号カマド）の右側に接してもうひとつカマドが検出された（２号カマド）。火床は0.3m×0.35mの楕円形で１号カマドに比べて北東壁に近い部分にある。残存状況はよくなく、火床部より壁にかけて多量の焼土が散っている状況であった。袖は右袖の一部とみられる覆土と異なる土が北東壁際にみられた程度で、火床両側にはまったく残っていなかった。さらには、１号カマド右袖の一部が火床を覆う状況が観察され、１号カマドと２号カマドには確実に重複関係が存在する。煙道は壁外に約1.1m延びる。１号カマドとは異なり、底面はほぼ平坦で溝状の掘り込み等は検出されなかった。

２号カマドは１号カマドとの重複関係に加え、煙道から出土した遺物中に古墳時代中期の高杯片が存在したことから、SB076として調査を進めたが、重複関係を有する住居の痕跡は確認できなかった。検出された火床高およびならび２号カマドの右袖部がSB071と北東壁を共有することから、カマドの作り替えが行われたと判断される。

遺物は１号カマド内部ならびに左袖周辺より集中的に出土している。カマド内部からは土師器甕と土師器杯が、また、左袖付近には土師器甕類が押しつぶされた状況で検出された。須恵器杯類は住居隅部付近を中心に出土している。図23に出土位置が示されない須恵器も北東ならびに北西隅部床面上より出土しており、この傾向は明らかである。また、北東隅部ならびに南東隅部付近からはこもで石と考えられる棒状の河原石

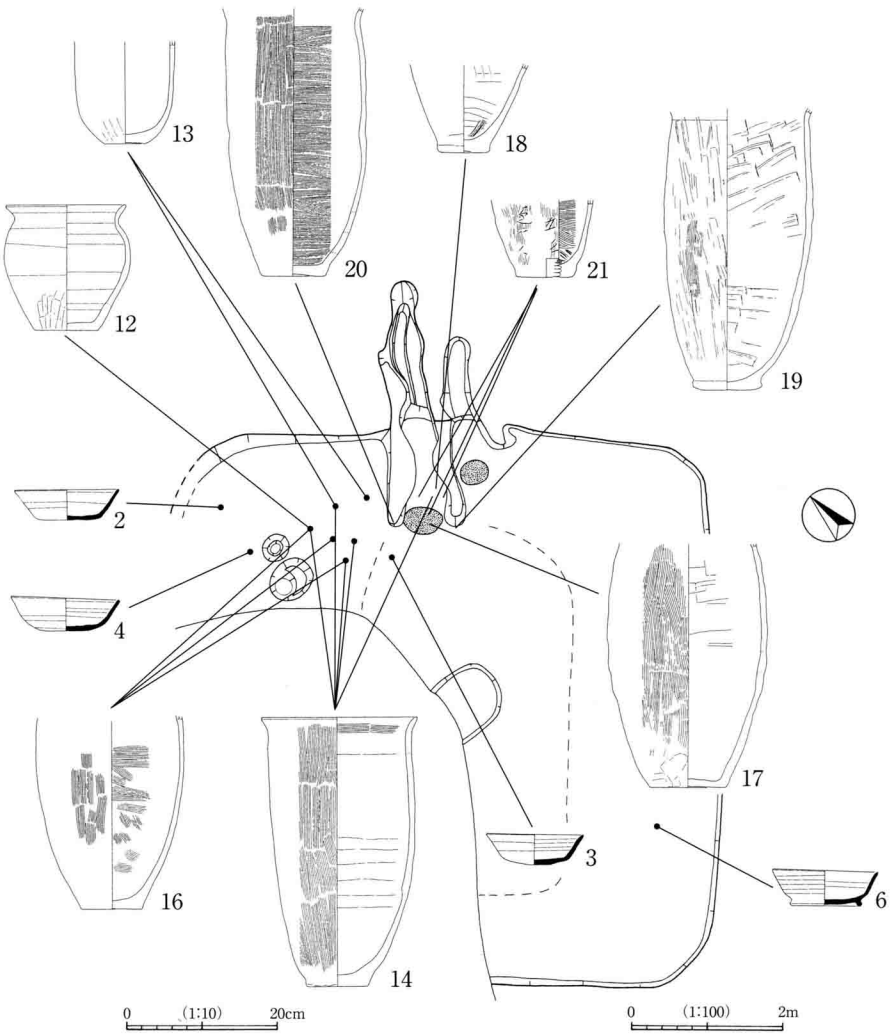

図23　SB071遺物出土位置図（構造図；S＝1/100　遺物図；S＝1/10）

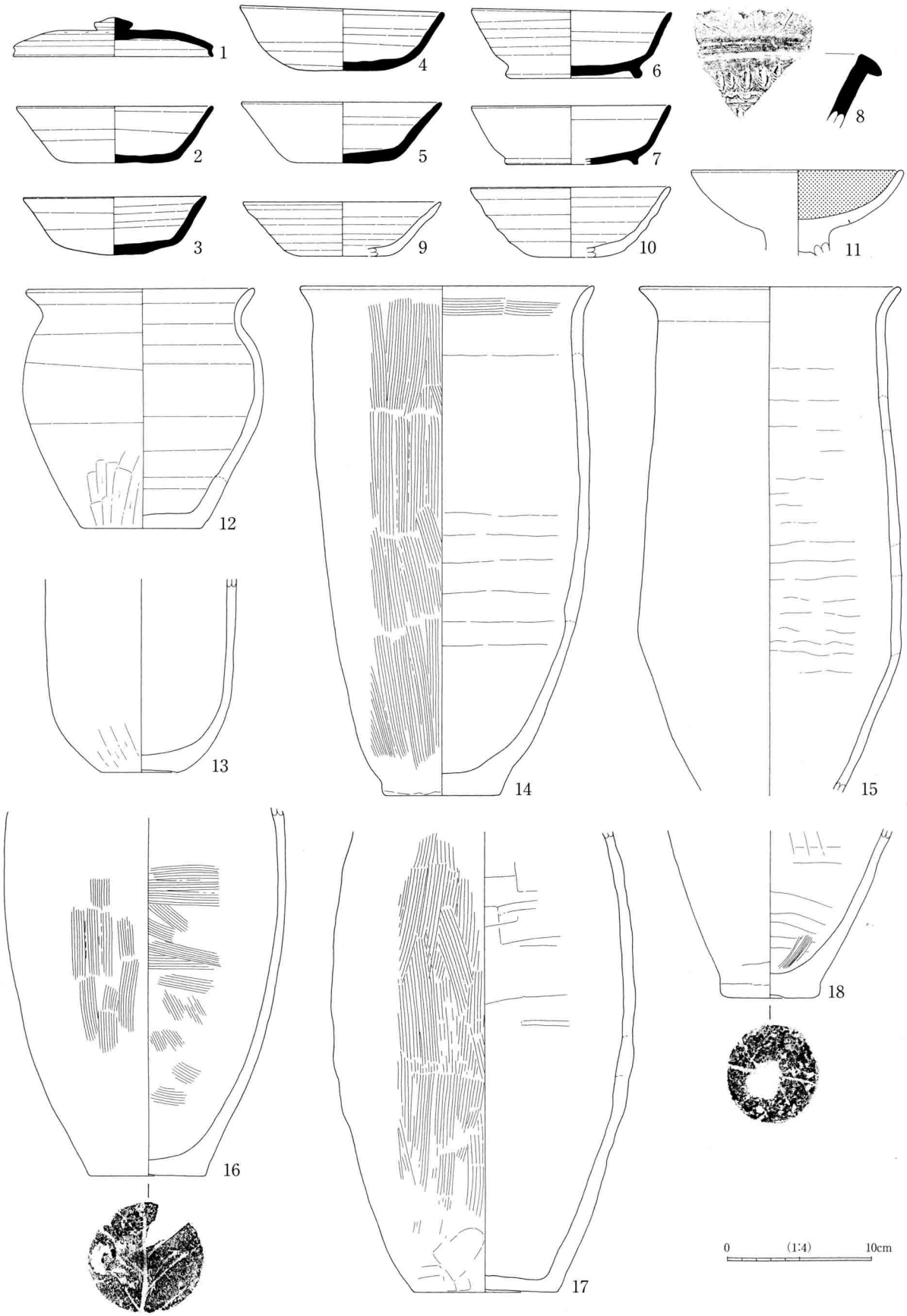

図24　SB071出土土器実測図（1）（S＝1/4）

がまとまって出土した。カマドの残存状況ならびに土器の出土状況を考慮すると、これらの土器群は原位置を保っている可能性が高いと考えられる。

出土遺物には土師器（杯・甕）・須恵器（杯蓋・杯身・高台付杯・甕）・鉄製品がある。このほか、弥生時代栗林式土器片・吉田式土器片・古墳時代前期および後期土器片が認められる。主体を占めるのは土師器甕で、図化・掲載個体のみでも11個体を数える。12は復元口径16cm、器高16.7cmを測る。体部最大径：器高が１：１になる小型の甕である。他の甕は長胴甕で、基本的に外面ハケ調整で、内面はハケ調整とナデ調整がみられる。底部にはほとんどの個体に木葉痕が観察される。なお、21の外面には刻書様の線刻がみられるが、ちょうど線刻部分中央に欠損があり、全体像はわからない。小型器種には須恵器杯類・土師器杯類がある。底面はいずれもナデ調整が施され、高台付杯にみる底部の突出も健在である。鉄製品は鹿角装の刀子が床面直上より１点出土している。残存長7.5cmを測り、切っ先および柄部先端を欠損する。鹿角表面は風化が著しく、文様等は確認されない。

以上の様相より、奈良時代に該当すると考えられる。

写真９　SB071土器出土状況

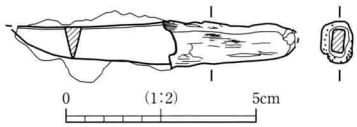

図25　SB071出土鉄製品
実測図（Ｓ＝1/2）

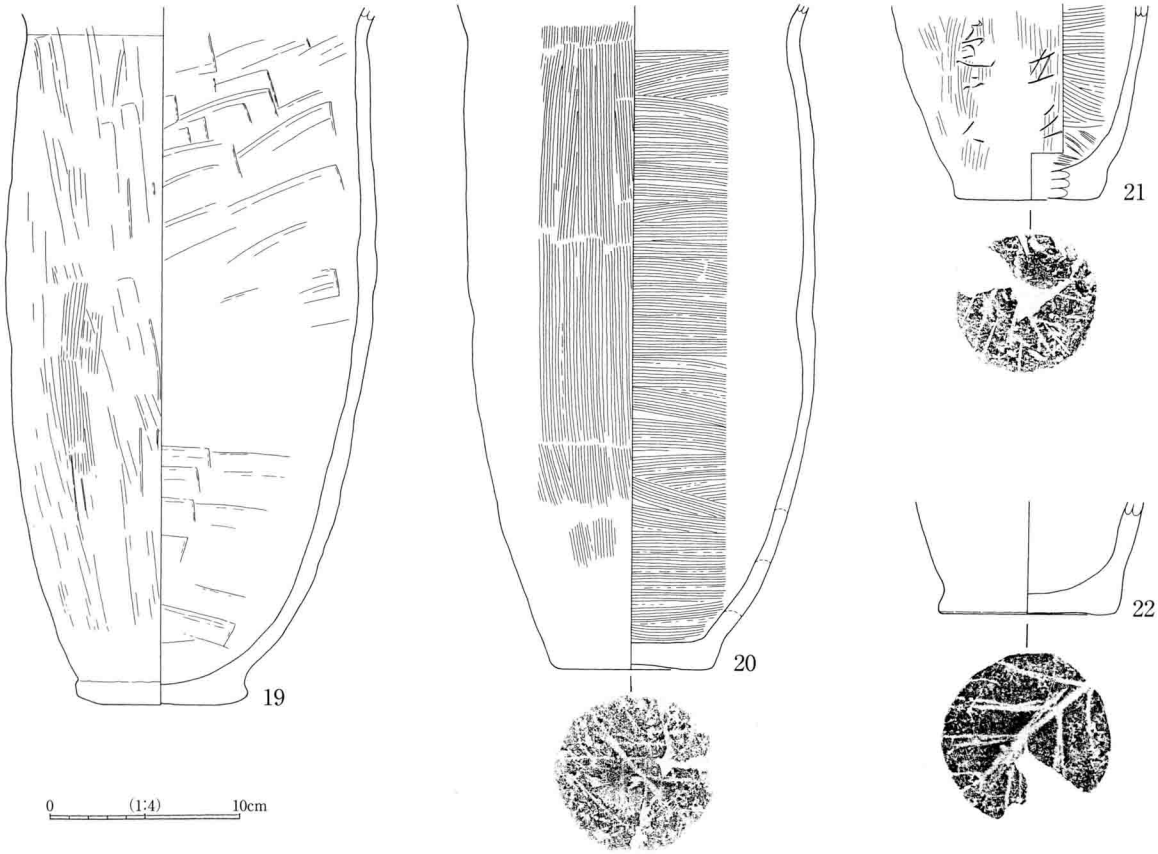

図26　SB071出土土器実測図（2）（Ｓ＝1/4）

SB072・SB085（PL－２、PL－Ｘ－４）

SB072　SB069ならびにSB070に掘り込まれ、南西隅部が検出された竪穴住居である。残存長は2.4m×2.7mを測る。床面は貼床が確認され、柱穴は１カ所検出された。隅部にほど近い場所からの検出で、４本主柱の構造になると想定される。

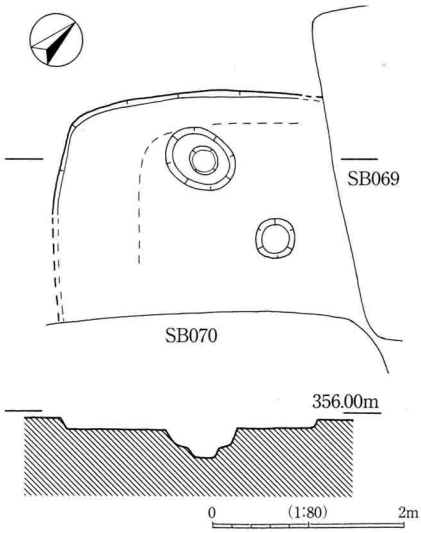

図27　SB072実測図（Ｓ＝1/80）

出土遺物に土師器ならびに弥生時代中期栗林式土器が認められる。甕は口径19.4cm、器高36.3cmを測る長胴甕で、内外面ともにナデ調整による。２のミニチュア土器は弥生時代中期栗林式である。なお、重複した栗林期の遺構の存在を確認するため、床面の断ち割り調査を実施したが、遺構は確認されなかった。

以上の様相より、奈良時代と考えられる。

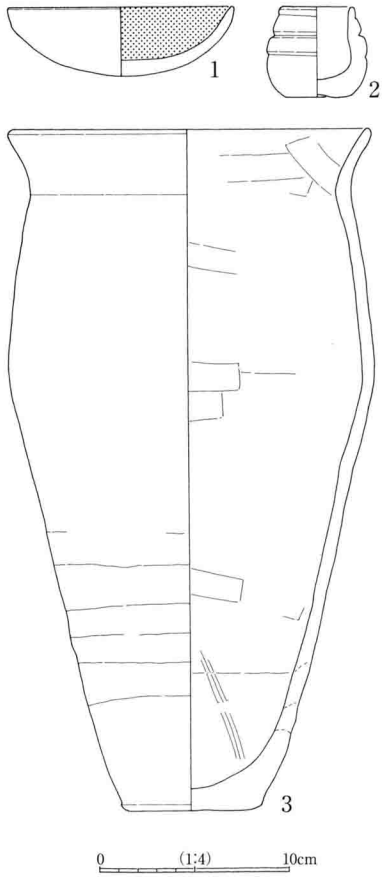

図28　SB072出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）

SB085　南側でSB070に、西側でSB069ならびにSB072に掘り込まれ、部分的に検出された竪穴住居跡である。一辺4mほどを測る方形プランと考えられる。検出当初、SB072の北側部分に該当すると想定したが、SB069床面下でSB072とは異なるプランであることが把握され、SB072床面下でもこの連続を確認したことから別住居と判断した。

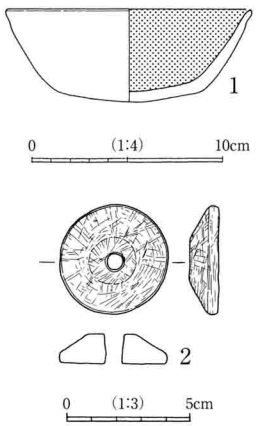

図29　SB085出土遺物実測図（Ｓ＝1：1/4　2：1/3）

床面は貼床が確認され、柱穴は１カ所検出されたにすぎない。カマドなどの付帯施設は検出されなかった。遺物は土師器と石製紡錘車が出土している。紡錘車は確認面にほど近い覆土上層で出土している。完形品で、円孔内を含めて平滑に仕上げられている。SB072との重複関係や出土遺物の様相より、古墳時代後期に該当すると考えられる。

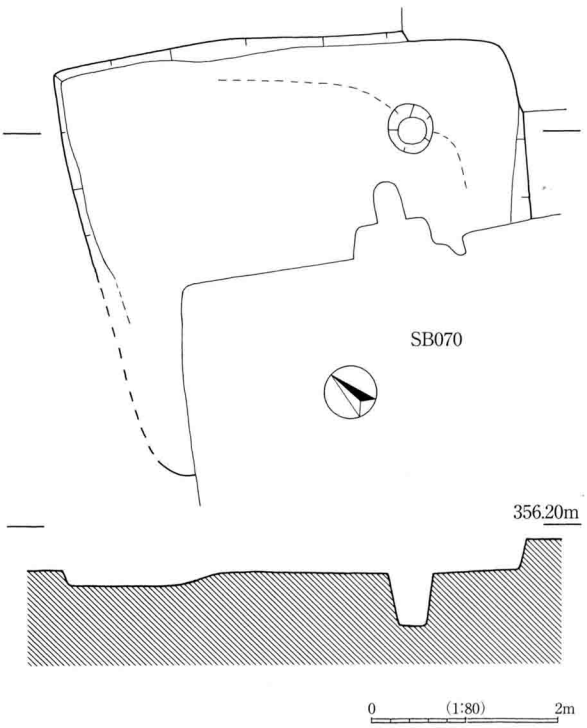

図30　SB085実測図（Ｓ＝1/80）

SB069（PL－３）

東西方向で一辺3.52mを測る竪穴住居である。北側はSK084によって破壊されており、南北方向の残存長は3.5mを測る。南側ではSB071・SB072・SB085を掘り込んでいる。

床面は全面で貼床が確認された。柱穴は検出されていない。唯一、南壁際のほぼ中央部でピットが検出され、位置的には出入口に関わる施設と考えられる。カマドなども検出されていないが、確認された３壁には認められないことから、SB084が重複する北壁に存在した可能性が考えられる。

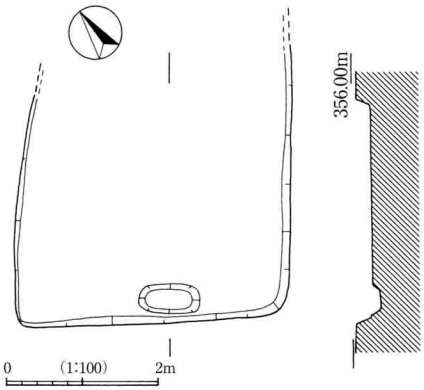

図31　SB069実測図（Ｓ＝1/100）

遺物には土師器（杯）・須恵器（杯蓋）・砥石・軽石がある。砥石は別個体となる２片が床面直上ならびに覆土中層より出土している。軽石は円孔などはみられず、製品と判断できるものではない。

以上の様相から奈良時代と考えられる。

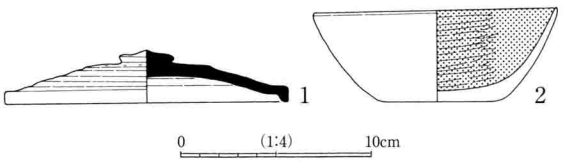

図32　SB069出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）

SB070（PL－２、PL－Ｘ－２・5）

東西辺5.24m、南北辺4.9m以上を測る、方形プランの竪穴住居である。南西側はSB086の重複や調査区際という制約のため、壁面を明確に確認できなかったが、ほぼ全景を把握できたと考えられる。

床面は壁際まで全面貼床が施されていた。柱穴は4箇所で確認された。いずれもU字形に近い底部形態を呈し、住居跡の柱穴としては幅広の大型ピットであった。カマドは北東壁中央部で検出された。火床が確認され、袖は左右ともに部分的な残存である。残存部は1.2×0.75mを測る方形を呈し、火床より奥側が壁外に突出する形態となる。火床は0.9×0.5mの楕円形を呈し、よく焼けていた。火床よりカマド内部では左右の側壁が明瞭に検出され、奥壁も赤色化が明瞭に観察された。煙道は奥壁を介してカマド内部とは段差をなして、壁外に0.4mほど水平に延びる。袖先端部に当たる部分には左右ともに円形に炭が散布していた。検出当初、カマド構築材の埋め込み跡への炭堆積

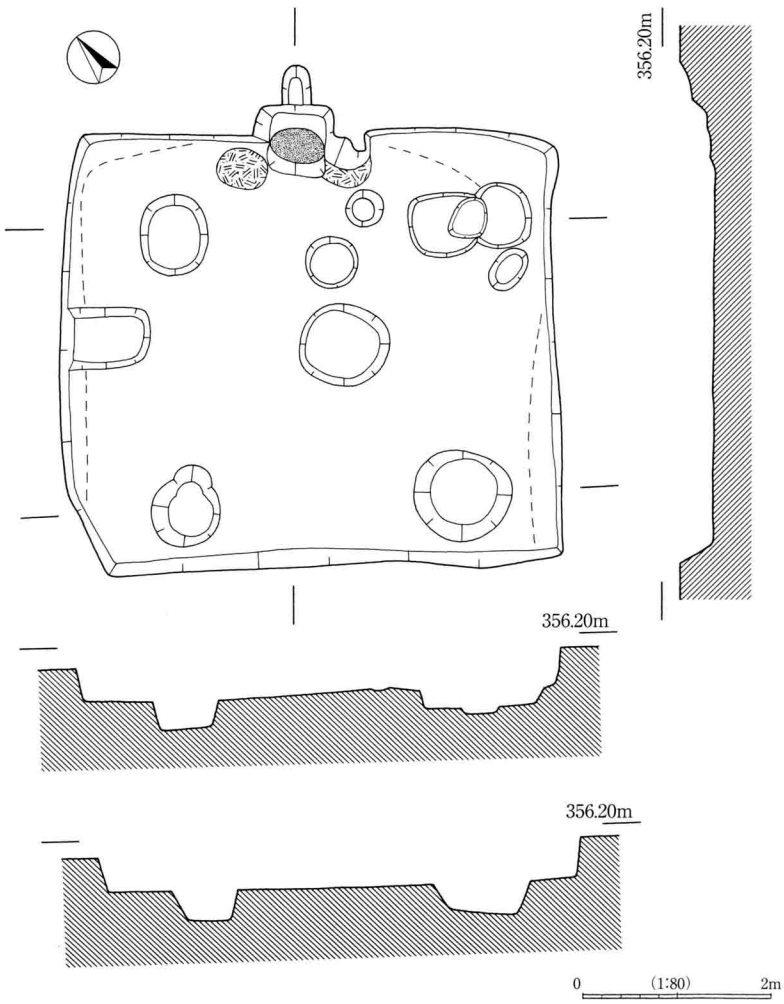

図33　SB070実測図（Ｓ＝1/80）

の可能性を考慮したが、浅い皿上の凹みに炭が堆積しているにすぎなかった。また、この炭上からは土器が出土し、住居廃絶時にはカマドの破壊が行われた可能性が考えられる。

出土遺物には土師器（甕）・須恵器（杯蓋・杯身・高台付杯）・鉄製品（鉄刀子）・砥石がある。土器は床面上のほかカマド周辺ならびに柱穴内からの出土が顕著である。また、鉄刀子は覆土上層（確認面）、砥石は破片が南東壁際の床面上より出土している。須恵器杯身は口径13.2cm、器高3.9cmを測り、底面には糸切り痕が明瞭に残る。杯蓋は口径16cm前後で宝珠様のツマミが付される。外面回転ヘラケズリは1/2前後の範囲に施され、折り返し部の外面ナデ調整は非常に強い。高台付杯は口縁が外反するもの、内傾ぎみであるもの、直立するものと実測個体のみでも多種多様な組合せである。高台は外面接地となる。土師器甕はいずれも非ロクロ整形のケズリ甕で、内面は工具使用によるナデ調整が施される。口径には21.2～3cmと15cmの２種が認められる。鉄製刀子はほぼ完存していると考えられ、全長13.8cmを測る。関部は錆化により不明瞭であるが、両関とみられる。以上より、平安時代初頭に該当すると考えられる。

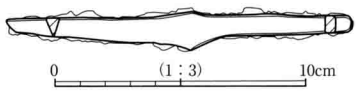

図34　SB070出土鉄製品
実測図（S＝1/3）

なお、南西側で重複するSB089は検出時に貼床が確認され、本住居上に重複していることが確実である。

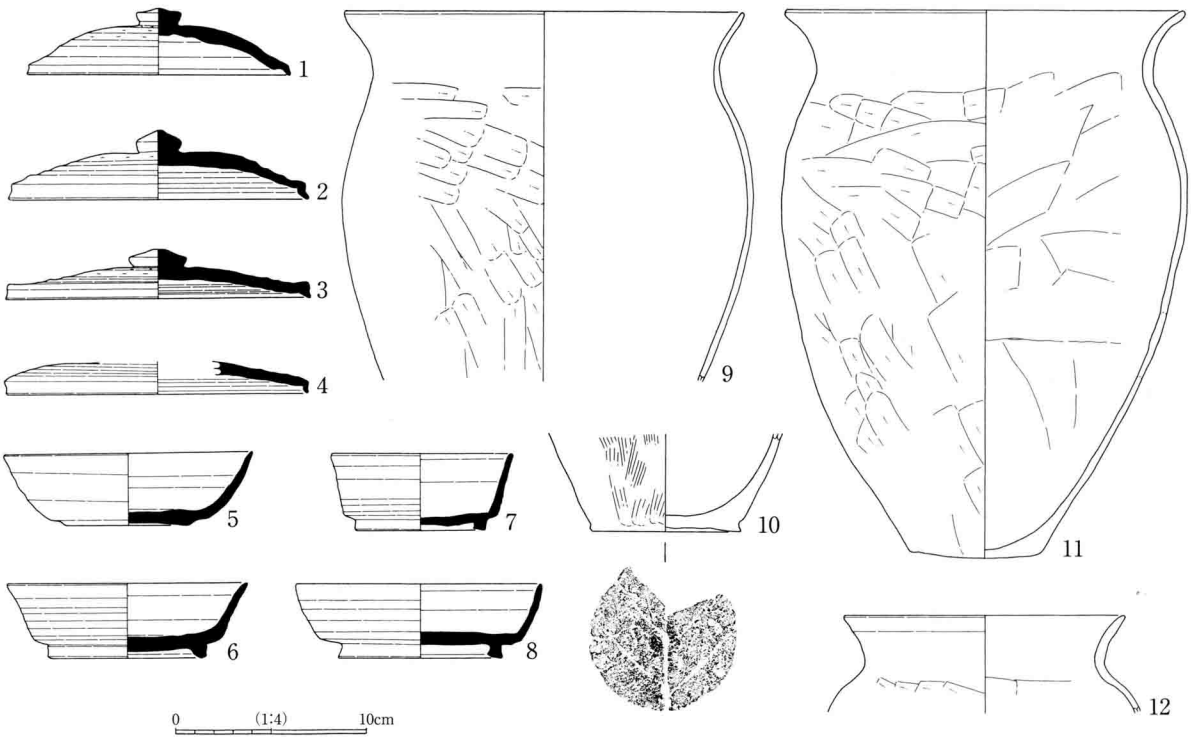

図35　SB070出土土器実測図（S＝1/4）

SB077（PL－４、PL－Ｘ－３・５）

一辺6.00mを測る竪穴住居である。南側は調査区外となり、南壁までの残存長は約3mを測る。重複関係は東側でSB083に、北側でSK085に掘り込まれている。

床面は貼床・硬化面ともに検出されず、脆弱で不明瞭であった。柱穴は南西隅部より検出されたピットが該当すると考えられるが、対称となる北東隅部では確認されなかった。カマドは西壁中央部で検出された。火床ならびに袖に該当する部分は浅い凹みとなっていて、焼土を含む炭層が堆積していたにすぎない。煙道は壁より真っすぐ0.9m延びる。延長部は天井が残る横坑で壁より約２mのところで煙出しと考えられるピットが確認された。また、煙道内に炎の環流があったのであろうか、煙道側壁には両壁ともに赤色変化層が観察された。

遺物は土器類がカマド残存部ならびにその周辺から、鉄製品が南壁際の床面上より出土している。出土遺物には、須恵器、土師器、鉄製品・銅銭が出土している。須恵器杯蓋は口径15.4cm、器高3.1cmを測り、扁平なツマミが貼付けられている。回転ヘラケズリは1/2以下の範囲で、折り返し外面は強いヨコナデが施される。須恵器杯身は器高3.8～3.9cmを、口径は13cm代を測る。いずれも底部に糸切り痕を明瞭に残す。なお、2は焼成が悪く、軟質である。土師器甕にはロクロ整形と非ロクロ整形の二者が存在する。後者は外面ナデ調整、内面ナデ調整で底部に木葉痕が残る。鉄製品には鉄針・紡錘車・不明片がある。鉄針は断面円形の先端部片で残存長2.5cmを測る。紡錘車は軸両端部が欠損するものの、ほぼ完形に近いと考えられる。軸部は断面円形で、片側が折れ曲がっていたが、全長16cm程度と考えられる。紡錘車部は錆化が著しく、現段階では形態把握も難しい。銅銭は皇朝十二銭の神功開寶で、床面直上より1点出土している。以上より、平安時代に該当すると考えられる。

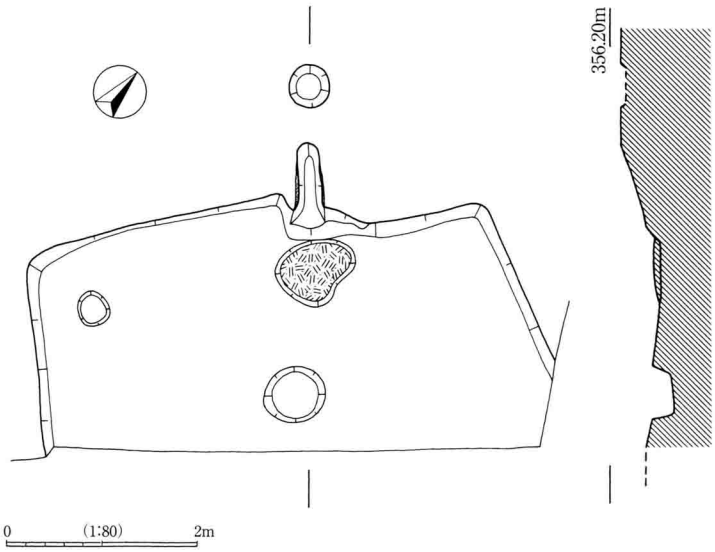

図36　SB077実測図（S＝1/80）

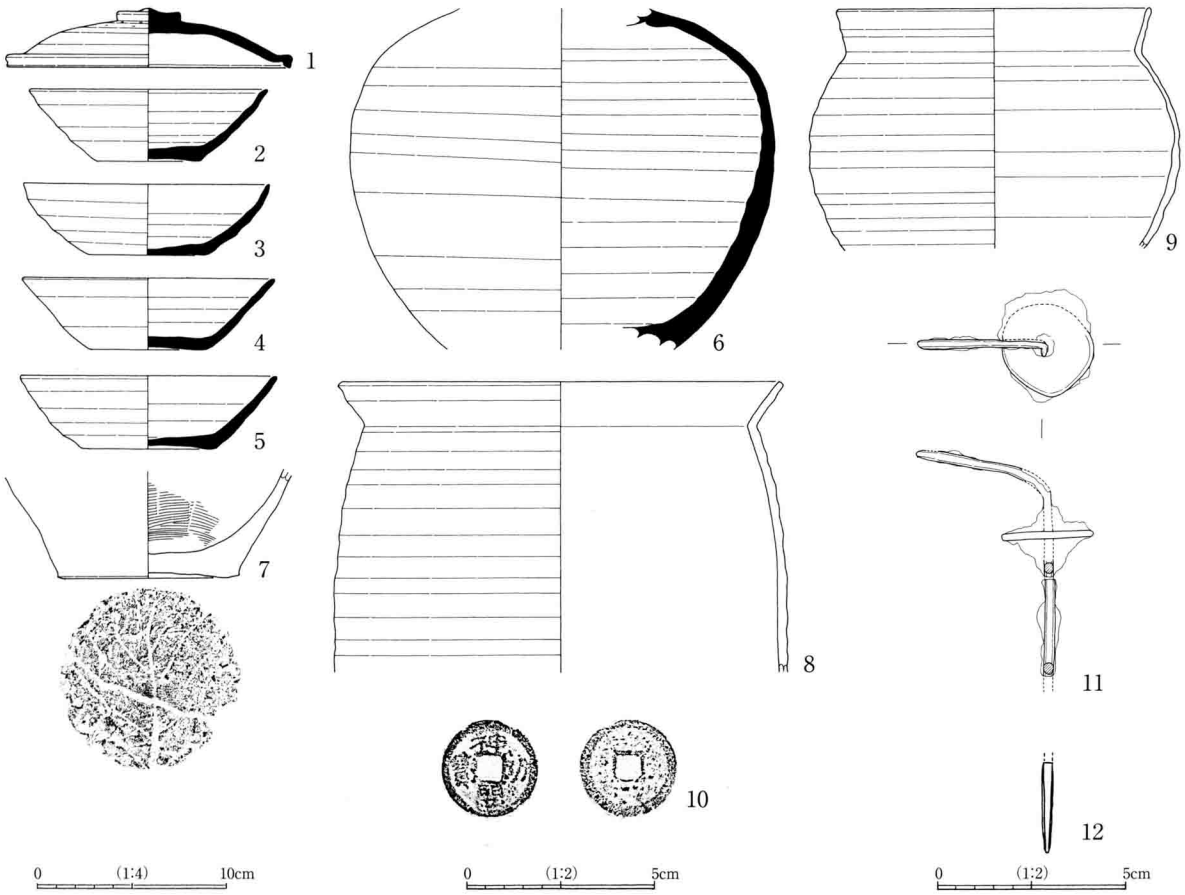

図37　SB077出土遺物実測図（S＝1/4　10～12は1/2）

SB078・SB079・SB083・SB084・SB090（PL－３、PL－Ⅹ－４・５）

調査区北東端部で検出された竪穴住居群である。当初、SB078一軒を想定して着手したが、掘り下げに従い複数の住居跡が重複していることが判明した。把握された順に遺構番号を付して調査をすすめたため、遺構番号は確認順となる。ただし、重複関係を完全に把握したうえでの番号ではないため、遺構番号が新しいほど時期的に古い住居とはならない。また、掲載した遺構図は掘り上がりの最終的な状況を図示したものである。

SB078　確認面にて把握された住居跡である。西壁で4.2m以上を測り、北側は調査区外となる。検出されたカマドが西壁中央と仮定すると、一辺6.8m程度と想定される。

床面は脆弱で、柱穴は検出されていない。カマドは西壁より検出されている。火床は焼土層で覆われた直下より径0.3m程度の円形で確認された。炭層はほとんどみられなかった。火床より内側の右袖側にはピット状の掘り込みが認められたが、この掘り込み覆土には最上層を除いて焼土・炭などはほとんど含まれていなかった。袖は左右とも壁付近に部分的に残存しているのみで、火床側では焼土の広がりのみが確認できたにすぎない。特に左袖側で焼土が顕著に認められた。煙道は火床高と同じ高さで壁外に0.3mほど延びる。

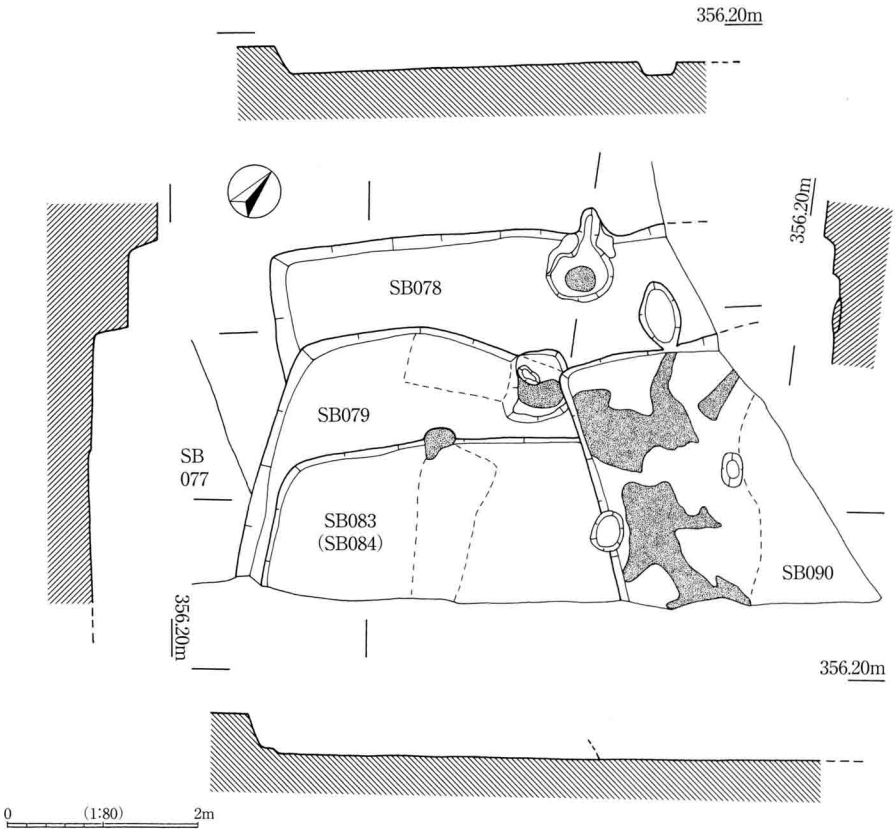

図38　SB078・079・083・090実測図（S＝1/80）

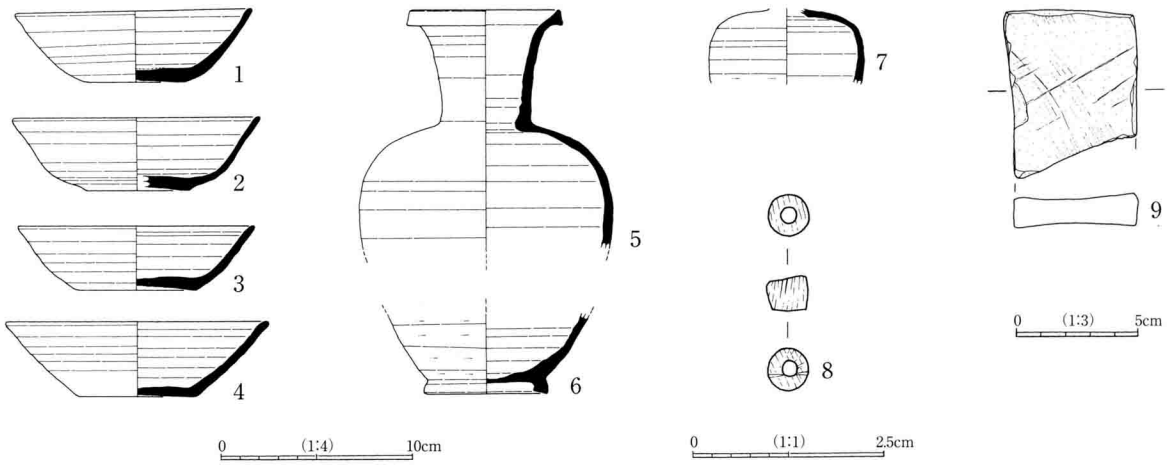

図39　SB078出土遺物実測図（1～7；S＝1/4　8；S＝1/1　9；S＝1/3）

遺物はカマドの内部ならびに周辺より土師器・須恵器が出土している。このうち、図化掲載できたのは須恵器のみである。土師器はいずれも破片で、個体数も多くないと考えられる。杯身は4点図化・掲載できた。いずれも底部には糸切り痕を残す。3は破断面が暗赤褐色を呈し、内面の一部に自然釉の付着が認められる。4は口径14.0cm、器高4.0cmと一回り大きく、底部から直線的に開く形状とともに他との違いがみられる。7は頸部径が2cm程度と細すぎる点が気にかかるが、小壷あるいは小型の瓶類と考えられる。外面には緑灰色の自然釉が付着している。長頸壷（5・6）は口頸部と底部片がみられる。口径8cm、頸部長6cmを測る。底部に糸切り痕を残し、高台は外面接地である。この上半と下半の破片間には直接の接合関係がないが、破断面が暗赤色を呈することや口縁内面や肩部外面ならびに底面には極めて類似した自然釉の付着が確認される点などから同一個体とみて間違いないと考えられる。なお、各個体の出土位置は1ならびに3がカマド周辺で本住居に帰属することが確実である。4・5は覆土中、2はSB083の範囲内、6がSB090の範囲内で、出土レベルより本住居に伴うと判断した。石製品では臼玉と砥石が出土している。臼玉は調査区南壁際で確認面直下で1点出土した。直径約5mm、厚さ4.5mmを測り、全面に擦痕が残る。側面に稜線はみられない。出土高からは混入の可能性が高いと考えられるが、SB078出土品として報告する。砥石は覆土中より1点出土した。幅5.2cm、残存長6.7cmを測り、途中で欠けている。表裏面ともに使用されており、中央部が凹む形態を呈している。鉄製品には鉄鎌・鉄刀子・鉄釘がある。いずれも重複する住居の上層に該当するが、出土高よりSB078に伴うと判断した。10は鉄刀子で、SB78検出時に出土している。切っ先ならびに茎部を欠損し、残存長は10.2cmを測る。関は両関とみられる。11はSB83貼床上層から出土した鉄刀子関部付近の破片と考えられる。12はSB78検出時に出土した鉄鎌で残存長9.5cm、刃部幅2.5cmを測る。錆化が著しいが、折り返しが存在すると捉えられ、折り返し乙技法と考えられる。13はSB78検出時に出土し、鉄釘と考えられる。全長約6.0cmを測る。断面は一辺約0.4cmの方形を呈する。頭部は土を巻き込んだ錆化が著しく、形態の正確な確認・把握はできていない。

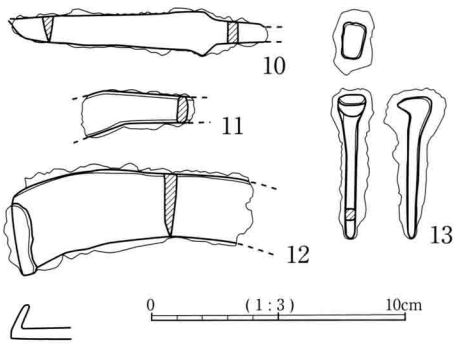

図40　SB078出土鉄製品実測図

SB079　SB078の検出時に南壁が途中で南側に屈曲し、不整形になることが確認されていたが、この屈曲した南壁と連続する西壁が確認でき、別住居の重複を明瞭に把握した。この新たに検出された西壁よりカマドが検出されたため、SB079として調査を実施した。カマドはSB078床面直下で火床のみが確認され、袖は残存していなかった。また、煙道も検出されていない。火床は0.45×0.3mの楕円形として確認できたが、いわゆるカンカンに焼けた状況ではなかった。また、壁側からは小ピットが検出され、壁側約半分は既に破壊されていた。床面はカマド前面を中心に精査を行ったが、貼床・硬化面などは確認できなかった。また、柱穴も検出されていない。

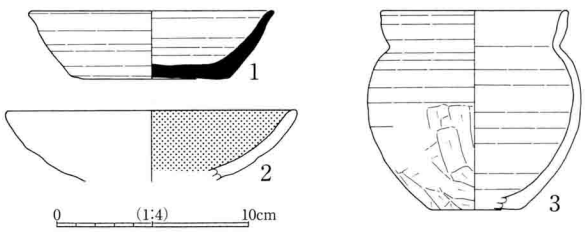

図41　SB079出土遺物実測図（S＝1/4）

調査の結果、当初設置されたと想定した西壁とカマド火床の位置関係は、距離が近すぎて、奥行きがまったくとれない状況となる。そのうえ、壁面はカマド火床下まで続き、西壁はSB079とは無関係にあることが明らかとなった。また、西壁に伴うと考えられる下層床面はカマド下へ入り込んでいることが確実で、西壁が示す別住居（SB083）の上にSB079が重複していることが把握された。また、検出されたカマド火床高はSB078床面直下に当

り、本来存在したカマドの上部構造はSB078床面上に達していたことが確実である。検出されたカマドの残存状況の悪さと合わせて考えると、SB078に破壊されたと考えられる。

以上より、SB079はSB083上に構築されたが、SB078によってほとんど破壊され、カマドの一部分のみが確認されたにすぎないと把握される。

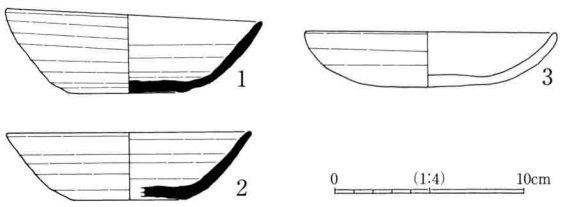

図42　SB083・SB084出土遺物実測図（S＝1/4）
1・2；SB083　3；SB084

出土遺物は須恵器（杯）、土師器（杯・甕）を図化・掲載したが、カマド火床上出土ではないことから、SB083に帰属する可能性が考えられる。

SB083　SB079下に位置する竪穴住居である。南東側は調査区外となり、北東側では後述するようにSB090に掘り込まれている。残存長は3.0×4.1mを測る。床面は貼床が確認された。ただし、貼床は確認範囲のほぼ中央部、約1mの帯状にみられる程度で、他は脆弱であった。中央部のみが高くなる可能性を考慮して床面下まで掘り下げを行ったが、貼床の広がりあるいは硬化面などは確認されなかった。柱穴も検出されていない。

貼床上では0.3mの範囲に不整形な焼土のまとまりが検出された。よく焼けた焼土が床面上に盛り上がった状態で確認され、焼土粒・炭などは周辺でほとんどみられなかった。上部構造はまったく残存していないが、検出状況からは炉あるいはカマドの残存とは考えがたい。本住居跡覆土中からは複数個体の流動滓が出土し、検出された焼土遺構が鍛冶に関わる可能性は高いと考えられる。しかし、焼土上からは四耳壷の破片が、焼土に接して8の須恵器杯が出土するなど土器の出土はみられたが、流動滓を含めて焼土の形成過程を決定づける遺物の出土は確認されなかった。

SB084　SB078の調査時に調査区東壁際付近で遺物がまとまって出土した。他箇所とは遺物の出土状況が異なるうえ、出土遺物に新しい様相が看取されたため、別遺構の重複を想定して、SB084とした。SB078・SB079・SB083と各住居跡の調査過程において、遺物の出土範囲を中心に精査を行ったが、掘り込みなどの痕跡は把握できなかった。

図化・掲載できたのは図42－3の土師器杯1点である。口径13.6cm、器高2.9cmを測り、内外面ともにロクロによるナデ調整が施される。確認状況や遺物の様相からは、重複した遺構中、最も新しい可能性が高いと考えられる。

SB090　SB083の調査過程において、西壁がSB079カマド付近を境にV字形を呈して連続しないことが確認された。この屈曲点はSB079カマドの北東側の掘り込みと連続し、SB079ならびにSB083を掘り込む別住居の存在が予測され、SB090として調査を行った。なお、SB090を認識した段階ではSB083の調査が焼土検出直上部まで進んでいたため、SB083とSB090を画する南壁は失われてしまった。掲載図中には南壁が実線表記してあるが、検出された焼土がSB079カマド北側にて確認された隅部の延長線上で直線的に途切れることから、ここに南壁が存在したと捉えたことによる。

調査区北東隅部に位置するため、北側ならびに東側は調査区外となる。確認長は1.8m×2.5mを測る。床面は中央部付近で貼床が検出された。貼床の外側は硬化面となり、

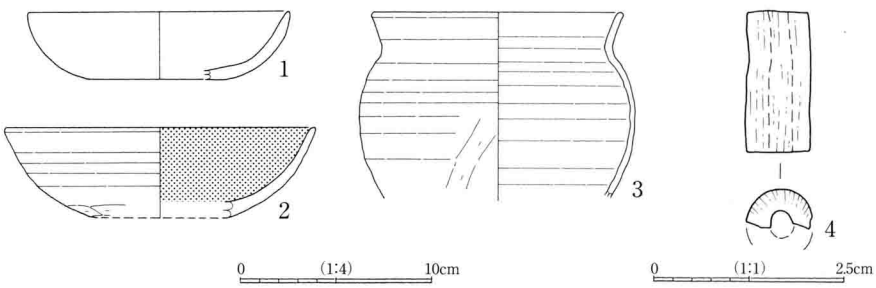

図43　SB090出土遺物実測図（S＝1/4　4のみS＝1/1）

この直上より多量の焼土が検出されている。焼土は最大５cm程度の厚さで堆積するが、炭化材・炭などはほとんどみられなく、いわゆる焼失家屋の検出状況とは異なる。残念ながら焼土形成の理由は不明であるが、貼床上に焼土の分布がみられないことは意図的な可能性が想起される。柱穴は貼床の際より１カ所検出されている。カマドなどの施設は検出されていない。

出土遺物には土師器（杯・甕）、管玉がある。図43－１の杯は覆土中出土で、口径14cm、器高3.6cmを測る。内外面ともに横方向のミガキ調整を、底部はケズリ後、ミガキ調整を施す。内面の黒色処理は施されていない。２の杯は焼土上ではあるが浮き上がった状態で出土している。口径16.6cm、器高約4.8cmを測る。外面はロクロナデで底部との境にケズリ調整が施される。内面はミガキ調整で、黒色処理が施される。３の甕は覆土中の出土で、口径13.4cmを測る。内外面ともにロクロ使用によるナデ調整が施され、外面下半にケズリ調整が観察される。管玉は貼床直上からの出土である。半分に欠けた欠損品で、全長1.8cm、幅0.9cmを測る。穿孔は両側穿孔である。石材は緑色凝灰岩製と考えられる。

各住居の把握状況から重複関係は次のようにまとめられる。①SB079はSB083床面上に構築されたことが明らかである。②SB079はSB090によって掘り込まれている。③SB090の焼土分布状況からはSB083を掘り込んでいると捉えられる。この点はSB079とSB090との重複関係と矛盾しない。④SB079はSB078によって破壊されたと考えられる。⑤検出状況ならびに出土遺物の様相からはSB084が最も新しいと想定される。以上より、重複住居の形成過程はSB083→SB079→SB090→SB078→SB084と捉えることができる。ただし、住居間の明確な時間差を把握することは難しく、いずれも平安時代に該当すると考えられる。

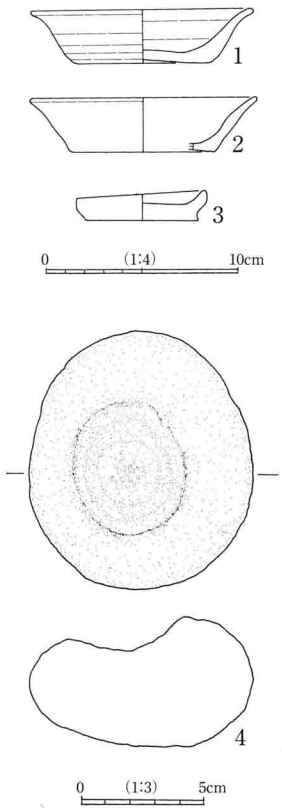

図44　SD010出土遺物実測図
（Ｓ＝1/4　4のみ1/3）

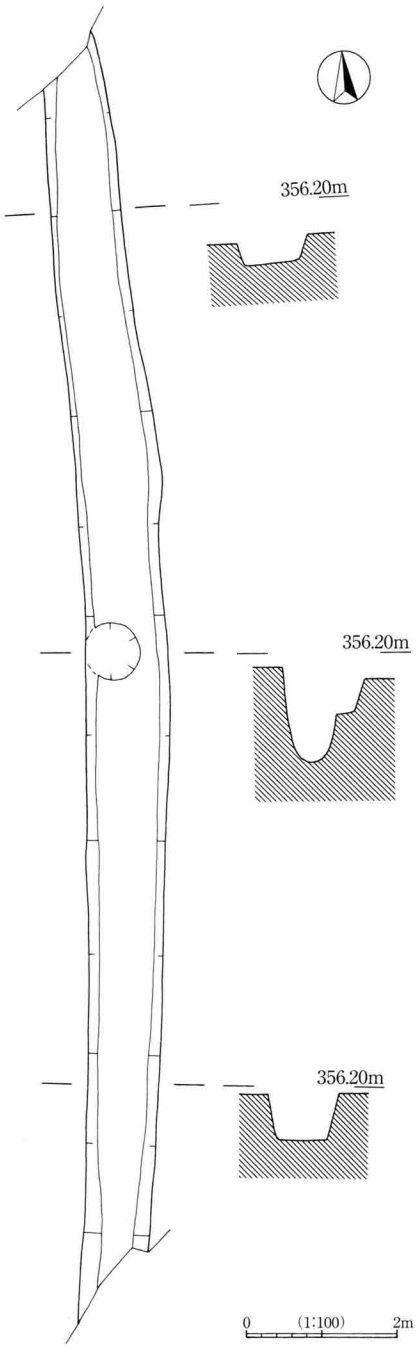

図45　SD010実測図（Ｓ＝1/100）

SD010

調査区のほぼ中央で検出された溝である。主軸をほぼ南北方向にとり、直線状に調査区を横断する。溝幅は約１mを測り、確認範囲内でほぼ一定である。深度は北側で0.３m、南側で0.6mを測り、北から南へ向けて傾斜を有している。覆土は暗褐色砂質土の単一層で、堅く締まっていた。水性堆積と考えられる土層はみられず、滞水の可能性は低いと考えられる。

遺物は覆土上層を中心に出土してい

る。かわらけ、灰釉陶器片、青磁片、凹み石、砥石などが出土している。かわらけは3点図化・掲載した。いずれも底部に糸切り痕を残す。1・2は口径11.8cm、12.0cm、器高2.9cmを測り、同一規格とみられる。3は口径6.8cm、器高1.6cmを測る小型品である。いずれも内外面ともにロクロによるナデ調整が施される。青磁は数点小破片として出土している。青磁片はSB067との重複部付近の覆土中より出土しており、一連の遺物と考えられる。凹み石は完形品と破片の2点が出土し、完形品を図化・掲載した。組合わさる擦石などは出土していない。

以上より、北の自然堤防あるいは後背湿地から千曲川に排水を目的として開削された中世の溝跡と考えられる。

SK084・SK081（PL－X－4）

SK084はSB069・SB071を掘り込む井戸である。直径は確認面で3.2m、0.5mほど掘り下げると2.4mを測り、ここより垂直な壁へと移行する。断面形態はちょうど漏斗状を呈する。垂直壁への移行面下1.0mほどで湧水が認められた。このため、底部には達していない。壁面は明瞭に把握されたが、井戸枠の痕跡等は確認されなかった。また、石材も認められない。

写真10　SK084

遺物は青磁をはじめ各時代の土器片が出土したがいずれも小破片である。また、青銅製品が2点出土している。青銅製品は垂直壁へと移行する上層の緩傾斜面底部より、2点それぞれが単独で出土していて、共伴遺物とは捉えられない。なお、後記するSK081の掘り込みによる撹拌は受けていない。

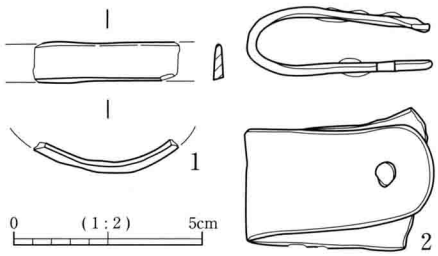

図46　SK084出土遺物実測図
（S＝1/2）

1は銅釧片である。楕円形に湾曲し、残存長3.9cm、幅1.0cm、最大厚3.0cmを測る。上端は丸く収められるが、下端は平坦面を有し、断面は三角形に近い。破断面のヤスリがけや叩き延ばした痕跡は確認されない。なお、銅釧片は本井戸に伴ったとは考えがたく、埋没過程での混入と判断される。2は不明品である。幅2.8cm程度の板状品が中央で二つに折り曲げられている。端部は丸く円孔が開き、もう一方はバチ状に開いて幅広となる。端面は欠損部を除き確認できるが、刃部は認められない。非対称形態であることから意図的に折り曲げられたとすると、全長10.2cmに復元される。

SK084はほかの井戸同様に平安時代末期以降中世に使用されていたと考えられる。なお、銅釧片は弥生時代後期に該当し、SK084に伴うものではない。本地点においては弥生時代後期の遺構はほとんどなく、本来帰属する遺構はみいだされないが、周辺に該期遺構が展開する可能性を示唆すると捉えられる。

SK081はSK084のほぼ中央部で確認された楕円形の土坑である。明らかに覆土が異なり、SK084を掘り込んでいる。覆土は黄褐色粘質土を主体とし、多量の炭を含む。ただし、焼土はまったくみられなかった。土坑底からは獣骨とみられる骨片が石材片とともに検出された。骨片は焼成を受けたとみられるが、細粉化しており、取り上げることはできなかった。確認面から炭の散布が把握でき、さらに上層から掘り込まれたと判断される。出土遺物がないため時期の特定はできないが、中世以降の所産と判断して誤りないと考えられる。

写真11　SK081半裁状況

個別報告外遺構ならびに検出面出土遺物（PL－Ⅹ－４・５）

土器　１はSB068出土の土師器杯である。内外面ミガキ調整で、内面は黒色処理が施される。2～５は検出面出土の土師器・須恵器である。平安時代を主体とした土器片が目立つが、５は２段透かしの施された須恵器高杯で、図化・掲載した出土土器中にもみられない、量的に少ない器種である。

石製品　6はSB070とSB085の重複部分に該当する遺構確認面より出土したいわゆる滑石製臼玉（検出No,15）である。直径1.7cm、厚さ7.5cmを測る。図上方は円をなさないが、整形痕がみられ、完形品と捉えられる。上下面・側面ともに平滑な面はなく、粗い仕上がりである。確定はできないものの、SB085に帰属する可能性が考えられる。７はSB066に該当する遺構確認面より出土した滑石製臼玉である。直径1.2cmを測るが、上下面はともに欠損している。SB066は住居跡としての可能性が低く、近接するSB064に帰属する可能性が考慮される。8はSB064周辺の検出中に出土した滑石製臼玉である。直径約1.2cm、厚さ0.6cmを測る。石材の質や大きさならびに整形は7に酷似し、接合はないものの、同一石材より製作されたと考えられる。SB064に帰属する可能性が考えられる。９は丸玉（検出No,14）でSD010以西検出時に出土した。直径1.0cm、厚さ0.9cm、孔径0.4cmを測る。全体的に平滑に仕上げられ、穿孔面には平坦面を有し、棗玉に近い形態である。

土製品　10は土玉で、SB072確認面より出土している。直径1.3cm、厚さ1.2cmを測る。孔は非常に小さく、0.1cmほどである。穿孔は片側に粘土の押し出し痕がみられることから、細い棒状工具による片側穿孔と考えられる。11はSB086の確認面より出土した土錘である。残存長4.0cmで片側の端部が欠損している。

鉄製品　12は鉄製の曲刃鎌である。２片に割れて出土し、直接の接合はないが、同一個体と考えられる。残存長約11cm、刃部幅1.2cmを測る。折り返しは甲技法である。13は鉄製刀子である。茎部を欠損し、残存長13.7cmを測る。関は欠損しており、形状は把握できない。関付近の外面には木質の付着が観察され、木製の鞘に収められていた可能性が想定される。14は鉄製刀子刃部先端の破片と考えられる。

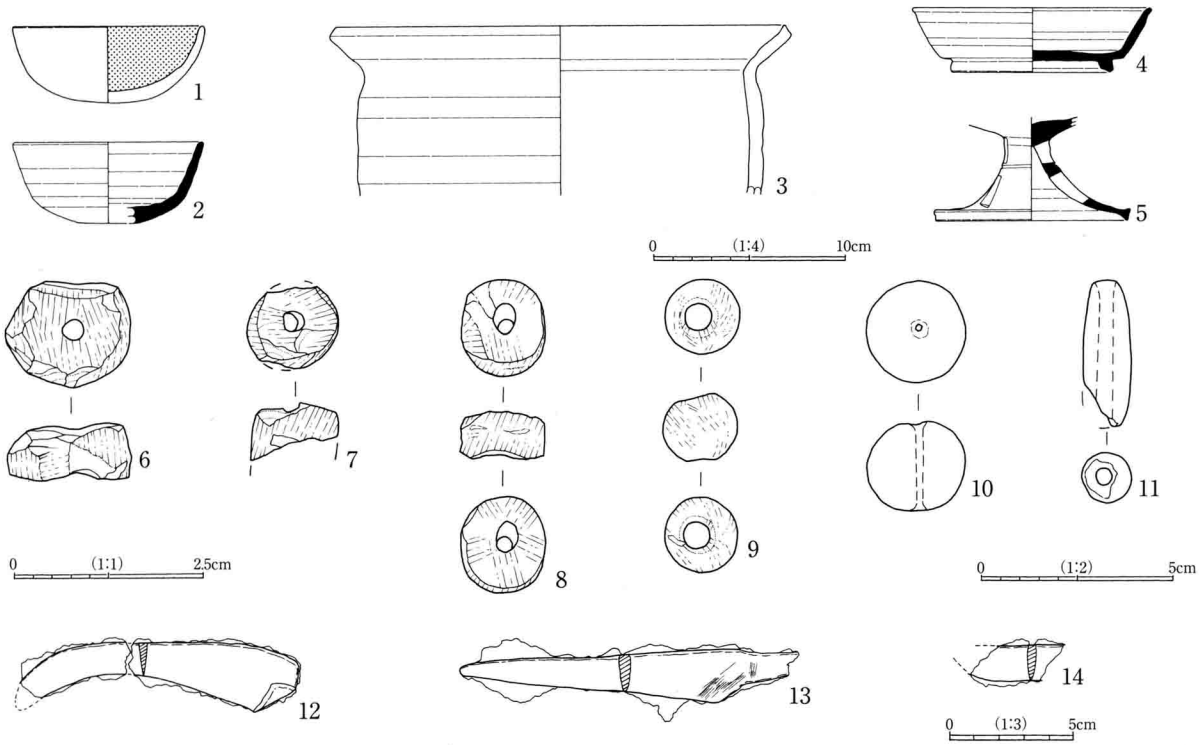

図47　SB068ならびに検出面出土遺物実測図

（S＝1～5；1/4　6～10；1/1　11；1/2　12～14；1/3）

3　③地点の概要

③地点は②地点同様に古墳時代後期から平安時代の集落を主として、古墳時代前期の墓域の一角ならびに中世遺構が検出されている。遺構の分布状況は調査区北東側で竪穴住居群が相互に重複関係を有しながら密に分布し、南側で土坑を中心とした希薄な分布状況へと変化する。竪穴住居群と同時期の遺構はさらに南東側に位置する①地点でも希薄であり、土地利用状況を含めた集落構造の一端を示しているものと評価できる。

中世　土坑は調査区全面より検出されているが、中世まで下るとみられる土坑群が方形ピット群や畝状遺構とともに調査区南西側を中心に検出されている。大型の方形土坑を含み、主軸はほぼ同一方向となる。ただし、掘立柱建物あるいは平地式建物の柱穴にはならず、それぞれ独立した単独遺構と考えられる。また、該期遺構として井戸跡があり、調査区南西側を中心に複数検出されている。いずれも円形で、井戸枠の残存ならびに痕跡は確認されない素掘の井戸である。出土遺物は各時代の遺物を含み、平安時代まで掘削時期が遡る可能性があるが、中世にも継続的に使用されていたと考えられる。

古墳時代後期～平安時代　古墳時代後期～平安時代にかけての竪穴住居群は調査区北側で顕著に重複する状況で検出された。古墳時代後期が少数で奈良・平安時代にかけて住居数が増加し、それぞれが重複している状況は②地点と同様で、一連の集落域を形成すると捉えられる。なお、前記したように調査区南西側では住居の分布はほとんどみられなくなり、隣接する①地点の様相と合わせて、本調査区で住居の集中的分布域が途切れるものとみられる。各住居ではカマドや貼床などの施設が明確に検出されたが、柱穴を伴うものが少ない。床面を意図的に精査したが検出されず、柱穴を持たない構造が主体であったと捉えられる。カマドは北東～北西方向が認められ、時代による変遷は認められない。

出土遺物ではSB115覆土中より臼玉１点が出土したほか、SB108覆土上層より出土した水晶製三輪玉は、須坂市本郷大塚古墳出土刀剣類の装飾品として使用されているように一般装飾品としての性格は希薄で市内初出土の稀少品である。SB130出土の耳環と合わせて、後期群集墳築造階層との関連性が注目される。鉄製品は刀子を中心に多くの住居より出土している。中にはSB105やSB110のように数種の鉄製品が集中する住居もみられ、注目される。また、鉄滓は奈良～平安時代の竪穴住居覆土中より広範に出土している。鍛冶炉などの検出はみられなかったが、SB105・108・109・110などではまとまった重量の鉄滓が出土しており、小鍛冶を中心に鍛冶が行われていたことは確実視される。

古墳時代前期・弥生時代・縄文時代　古墳時代前期墓域は調査区南壁際で小型方墳周溝（SZ014）が検出された。これは①地点で検出されたSZ008と同一遺構とみられ、Ｘ区①・④・XI区に展開する古墳時代前期小型方墳群（方形周溝墓群）の北端を示していると把握できる。

弥生時代は遺構の検出はないが、各遺構覆土より破片の出土が認められる。SB112覆土中からは弥生時代中期庄ノ畑式段階とみられる破片が１点認められる。中期栗林式はSB107・SB112で確認され、調査区北東側に弥生時代中期の遺物が認められる。後期吉田式はSB120・SB112・117・118で確認され、調査区北壁付近の遺構内に偏る。箱清水式の破片は調査区全面で認められるが、他地区に比して少なく、特に調査区の南半部ではほとんどみられない。このように遺構は明確でないが遺物の出土地点は調査区北東側を中心としており、②地点南西側での出土傾向と合わせて重複によって滅失した遺構の存在を想定することが可能となろう。

縄文時代はSB116覆土より後晩期に該当する土器破片が１点出土している。出土遺物が帰属する遺構の検出はないが、近隣に縄文時代遺跡が存在する可能性を示すものとして注目される。

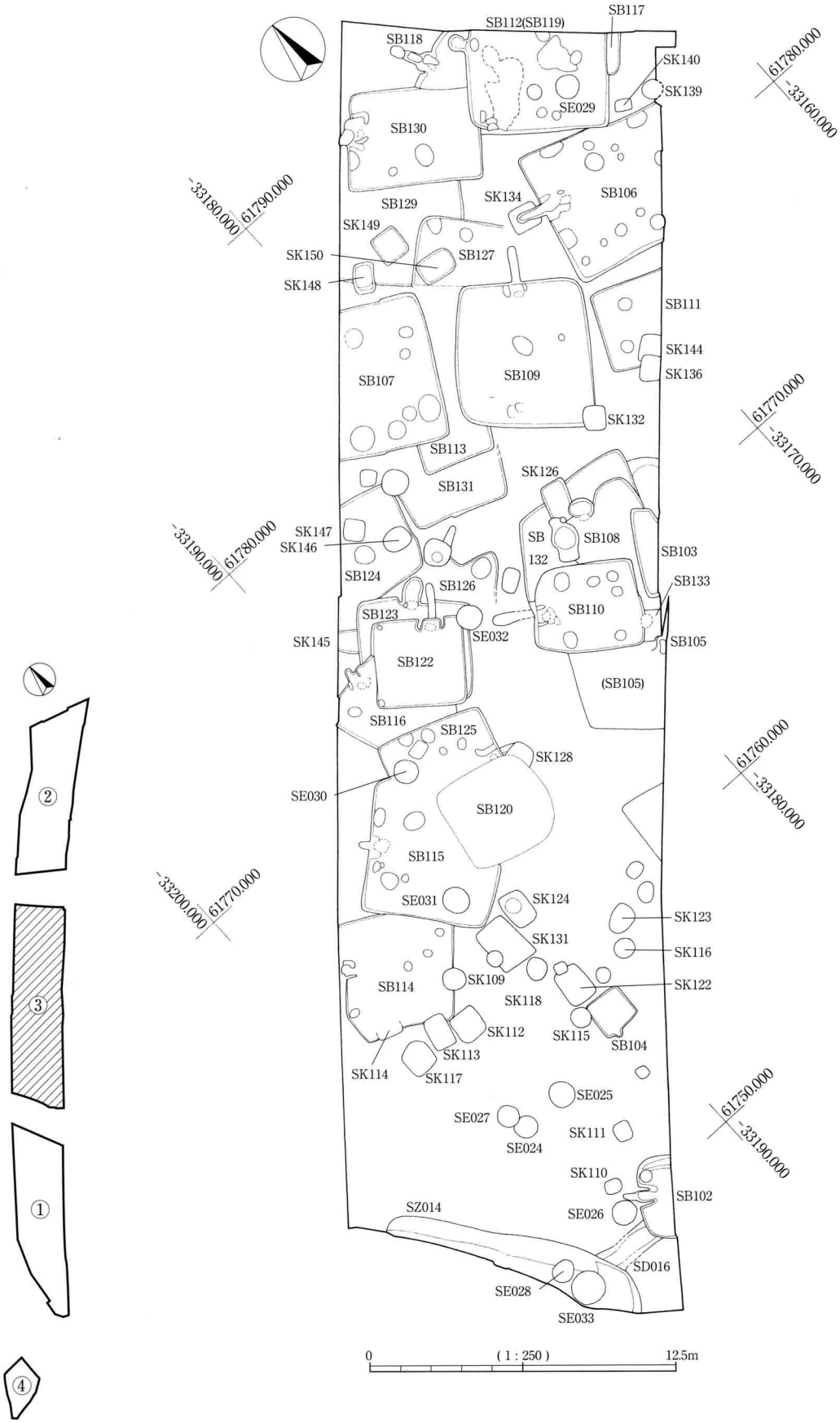

図48　③地点遺構分布図（S＝1/250）

遺構名	形態 規模m	付属施設			重複関係		備考	土器類		石製品 土製品 玉類	鉄製品 青銅製品	報告頁	時期	
		床面	炉 カマド	柱穴	先	後		実測数	破片重量kg				時代	細別
SB102	方形 3.35×(2.0)	貼床	カマド石材による支脚	なし									平安以降	
SB103	方形 3.62×(0.8)	貼床	カマド	なし		SB108 SB110 SB133		7	1.6			62	奈良	
SB104	方形 1.62×1.78	脆弱	カマド	検出なし		SK115			0.25				中世か	
SB105	不明	不明	カマド	検出なし		SB110 SB133	壁際で検出されたため、全体像不明。		6.0		鉄製毛抜き 鉄製鎌 不明鉄製品 不明鉄製品 流動滓	65	奈良	
SB106	長方形 5.68×6.25	貼床	カマド	検出なし		SK134	覆土上層には炭と焼土が多量に含まれる。	5	7.05			48	(古墳後) ～ 奈良	
SB107	長方形 6.06×4.20	貼床	検出なし	検出なし	SB113			4	9.140		不明鉄製品 流動滓	57	平安	
SB108	方形 4.15×4.52	貼床	カマド	検出なし	SB132	SB103		7	10.55	水晶製三輪玉1	鉄製刀子？片 (鉄鏃？)不明 鉄製品流動滓	62	古墳末 ～ 奈良	
SB109	方形 6.00×5.35	貼床	カマド	検出なし		SB113 SB127		14	11.930		鉄製紡錘車 亀の子状鉄滓	50	奈良	
SB110	方形 3.65×4.33	貼床	カマド	4	SB105 SB133			9	12.25		苧引金 鉄製刀子片 小刀？ 不明鉄製品 不明鉄製品 不明鉄製品 流動滓	65	平安	
SB111	方形 3.2×(2.6)	脆弱	検出なし	検出なし		SK136 SK144			1.42				奈良	
SB112	方形 (4.0)×5.70	貼床	カマド	検出なし		SB130		4	17.7		耳環1 鉄製刀子片2	55	奈良	
SB113	方形 2.80×(1.3)	脆弱	検出なし	検出なし	SB131	SB107 SB109			1.060		鉄製刀子片か		奈良か	
SB114	方形 5.02×4.60	貼床	カマド	検出なし		SB115 SK113 SK109			0.755				平安	
SB115	方形 5.50×5.40	貼床	カマド	検出なし		SB125 SE031	SB114との重複関係は明確に把握できず。	15	11.7	臼玉1	鉄製刀子？片 (鉄鏃？) 小刀？	54	奈良	
SB116	方形 (2.2×3.0)	貼床	カマド	検出なし	SB123	SB122 SB125	9世紀代の土器はSB122に帰属する可能性が考えられる。	10	6.7		鉄製紡錘車？	53	奈良	
SB117	方形 (1.7)×3.35	貼床	検出なし	検出なし	SB112		SB112と調査が同時併行となったため、プランを充分に把握できず。	3	1.830			59	平安	
SB118	方形 (2.6×3.4)	貼床	カマド	検出なし		SB119 SB130		5	5.190			52	平安	
SB119	不明						床面のレベル差によりSB112と分離したが、同一住居の可能性が高い	2	1.940			55	奈良か	
SB120	方形 3.65×3.80	脆弱	なし	なし	SB115 SB125 SK128		地下室状の遺構と考えられる。	18	5.65		不明鉄製品 不明鉄製品 鉄製刀子？片	68	中世	
SB121	不明	硬化面	なし	なし				2	2.360			55	古墳	後期
SB122	方形 4.07×3.40	貼床	カマド	検出なし	SB116 SB123 SB126	SE032		5	2.25	土製丸玉1		59	平安	
SB123	方形 (4.6×2.5)	脆弱	カマド	なし	SB126 SK145	SB116 SB122		6	0.8			59	古墳	後期
SB124	方形 3.8×(3.7)	脆弱	検出なし	検出なし		SK146			0.898				奈良	

遺構名	形態 規模 m	付属施設			重複関係		備考	土器類		石製品 土製品 玉類	鉄製品 青銅製品	報告頁	時期	
		床面	炉 カマド	柱穴	先	後		実測数	破片重量 kg				時代	細別
SB125	方形 4.50×(2.3)	貼床	カマド	検出なし		SB115 SE30 SB120		5	1.654			49	古墳 ～ 奈良	
SB126	不整形 (2.4×1.5)	一部貼床？	検出なし	検出なし		SB123 SE32			0.25				奈良～平安	
SB127	方形 (2.9×3.5)	脆弱	検出なし	検出なし	SB129	SB109 SK150 SB107			0.990		鉄製毛抜き		奈良	
SB128							土器少量で、時期確定要素なし		1.02				平安か	
SB129	方形 (4.7×4.0)	脆弱	検出なし	検出なし		SB127 SB130 SK148 SK149			4.650		不明鉄製品鉄鏃？		奈良	
SB130	長方形 3.90×5.40	貼床	カマド	検出なし	SB129 SB118	SB119		3	1.010		鉄製刀子？片2	61	平安	
SB131	方形 4.10×(2.5)	脆弱	検出なし	検出なし		SB113 SB107			0.950				奈良～平安	
SB132	方形 5.20×(3.6)	硬化面	検出なし	検出なし		SB108 SK126		2	0.873	太型蛤刃石斧1		68	奈良 (～平安)	
SB133	不明	貼床	カマド 立石	検出なし	SB105 SB110		SB110を掘り込んで構築されたと判断される。	1	0.54		鉄製刀子	65	(奈良～) 平安	

遺構名 調査時	形態 規模	付属施設			重複関係		備考	土器類		石製品 土製品 玉類	鉄製品 青銅製品	報告頁	時期	
		底面	その他	備考	先	後		実測数	破片重量 kg				時代	細別
SZ014	方形 周溝幅 1.75	底部調査区外				SE28 SE33	X-1区SZ008と同一遺構					80	古墳	前
SD016	幅 1.00	平坦			SZ008	SB102	奈良時代以降						不明	
SE024	円形素堀 径 0.85	未完掘				SE027			0.040				平安～中世	
SE025	円形素堀 径 1.00	未完掘							0.240				平安～中世	
SE026	円形素堀 径 0.98	未完掘							0.090				平安～中世	
SE027	円形素堀 径 1.00	未完掘			SE024				0.130				平安～中世	
SE028	円形素堀 径 1.00	未完掘			SZ014				0.220		不明鉄製品		平安～中世	
SE029	円形素掘 径 0.98	未完掘									不明鉄製品		平安～中世	
SE030	円形素堀 径 1.00	未完掘			SB125				0.410				平安～中世	
SE031	円形素堀 径 1.10	未完掘			SB115				0.410	軽石製品1	鉄製品(釘状)		平安～中世	
SE032	円形素堀 径 1.00	未完掘			SB122 SB123				0.200		不明鉄製品		平安～中世	
SE033	円形素堀 径 1.45	未完掘			SZ014				0.480				平安～中世	
SK109	円形				SB114								奈良～平安	
SK110	方形 0.68×0.50						SK111と関連するか						不明	
SK111	方形 0.80×0.65						SK110と関連するか						不明	
SK112	方形 1.25×1.20												奈良～平安	
SK113	長方形 1.34×0.98				SB114								平安か	
SK114	方形 1.25×1.05								0.030				奈良～平安	
SK115	円形径 0.88				SB104				0.010				奈良～平安	
SK116	円形径 0.70								0.010				古墳？	
SK117	方形 1.25×1.20								0.030				奈良～平安	

遺構名	形態	付属施設			重複関係		備考	土器類		石製品	鉄製品	報告	時期	
調査時	規模	底面	その他	備考	先	後		実測数	破片重量kg	土製品 玉類	青銅製品	頁	時代	細別
SK118	円形径 0.95								0.010				奈良～平安	
SK119	方形 1.70×1.35					SK114					鉄製刀子？片		奈良～平安	
SK120	方形 0.87×(0.75)					SK114			0.025				奈良～平安	
SK121									0.002				奈良～平安	
SK122	長方形 1.55×1.25								0.040				平安か	
SK123	楕円形 1.25×0.95								0.030				奈良～平安	
SK124	長方形 1.55×1.15								0.060				奈良～平安	
SK125	方形					SB108	SB108 上層		0.380				平安か	
SK126	方形 0.62×1.00					SB108 SB132			0.140				平安か	
SK127	方形 1.15×0.85						土錘は覆土上層出土。		0.050	土錘 1			奈良～平安	
SK128	方形 1.55×1.10								0.250				奈良か	
SK129	円形径 2.3				SB108 SB103				0.420				平安	
SK130	長方形 1.81×1.37								0.430				平安以降	
SK131	長方形 1.60×2.05								0.030				平安以降	
SK132									0.080				平安	
SK133	方形 1.20×0.95								0.060				奈良～平安	
SK134	長方形 1.20×1.05												不明	
SK135	長方形 1.85×1.22								0.150		鉄製品(釘状)		奈良～平安	
SK136	方形 1.1×(0.9)				SK144 SB111				0.100				奈良～平安	
SK137	方形 0.77×0.70					SB107			0.010				奈良か	
SK138	方形 1.00×(0.9)								0.200				奈良か	
SK139									0.160				平安か	
SK140									0.080				不明	
SK141									1.120				奈良～平安	
SK142	方形													不明
SK143														不明
SK144	方形 1.35×(1.2)				SB111	SK136			0.010				不明	
SK145	方形 0.9×(0.6)								0.010				奈良～平安	
SK146	長方形 1.12×0.86								0.020				不明	
SK147	方形 0.87×0.87								0.030				奈良～平安	
SK148	長方形 1.28×0.88				SB129				0.740				奈良か	
SK149	方形 1.15×1.25				SB129		籠状の炭化物出土。		0.130		不明鉄製品	71	奈良～平安	
SK150	長方形 1.55×1.13				SB127				0.160				平安	
畝 1～7													平安以降	
検出面										臼玉 1	鉄製刀子？片 小刀片			

表 7　X 区③地点検出遺構一覧表

方形ピット群・畝状遺構

竪穴住居群が希薄な調査区南西側では、方形ピット群が明瞭に列をなして検出された。本書にて報告する各地区のうちで最も良好な検出状況である。調査区北東側にも分布は確認され、調査区全面に展開することは確実であるが、南西側のような列をなした状況では確認されなかった。遺物は相当数のピット内より微細破片が出土しているが、ほぼ下層に遺構がある場合に限られ、本遺構に伴うと判断できるものはない。また、②地点同様に杭などの痕跡や残存物は検出されず、本遺構の形成された時期特定や性格究明に迫る有効な情報は得られなかった。

方形ピット群に混じって11条の溝状遺構が検出された。溝状遺構はほぼ南北に主軸を取り、重複することなく、平行して分布する。それぞれの溝状遺構はほぼ掘削深度が同一で浅い。また、流水等の痕跡も確認されず、畑地耕作に伴う畝状遺構と判断される。遺物の出土はなく、時期確定は困難であるが、方形ピット群や中世土坑に掘り込まれている点から中世以前と考えられ、他地区の調査所見と合わせて平安時代と推定される。なお、平安期住居群との重複関係がない点は居住地とそれに隣接する畑地という構造が垣間見え、後背湿地に展開する条里水田とともに村落構造に迫る糸口を示していると評価できる。

写真12　方形ピット群検出状況

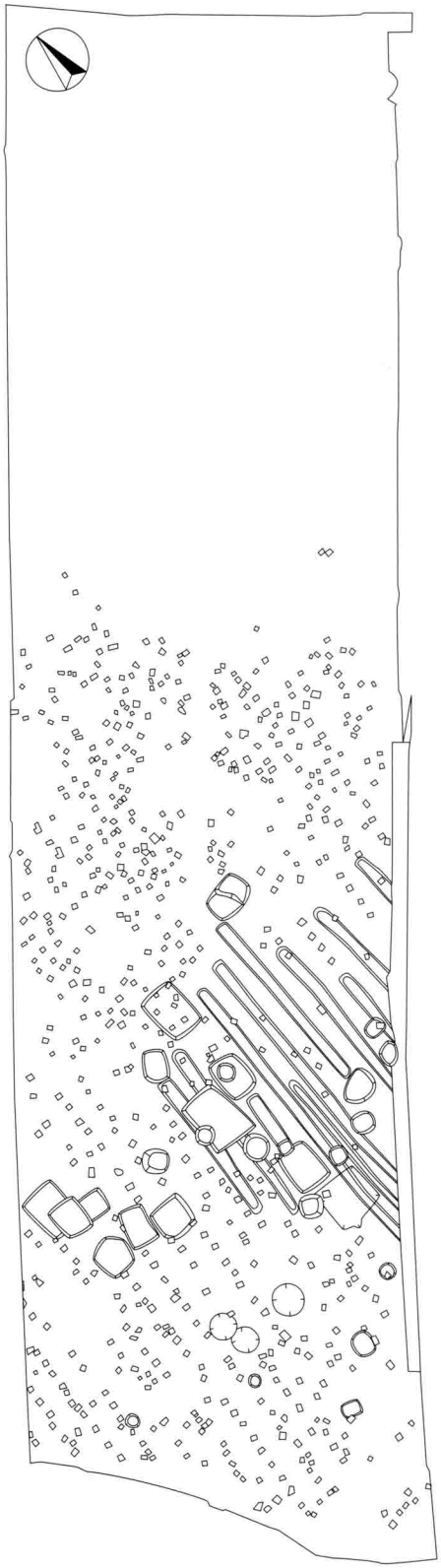

図49　③地点方形ピット群平面実測図

（S＝1/250）

4　③地点で検出された遺構と出土遺物

SB106（PL－4）

調査区北西側で検出された竪穴住居である。確認された一辺は南北辺5.68m、東側が調査区外となる東西辺の確認長は6.25mを測り、長方形プランを呈すると考えられる。北壁はSB112に掘り込まれ、一部確認できなかった。

床面は西壁の壁際を除き、全面で貼床が確認された。柱穴は２カ所確認されている。壁際までにこれに対応する柱穴がみられないことから、調査区外に大きく広がることが予測される。

カマドは西壁中央部で検出された。右袖の残存は良くなかったが、左袖・火床・煙道が確認されている。壁面から火床までは0.7mを測り、比較的大型のカマドである。左袖は黄褐色粘質土により構築されており、焼けた内壁が明確に検出された。火床脇では焼土が濃密に検出され、袖上にまで分布が認められた。右袖は壁面付近と火床脇に部分的に確認されたにすぎず、内壁も不明瞭であった。袖上の焼土分布は左袖同様に確認された。両袖部で確認された焼土の分布状況からは、意図的にカマドが破壊された状況が想定される。煙道が連接する壁部分には煙道底部直上付近の高さで帯状の焼土が観察された。左右両壁でも煙道連接部に焼土壁が認められ、帯状の焼土層は天井壁が崩落により形成されたと考えられる。煙道部の傾斜はほとんどなく、住居内より水平に約１m延び、先端部は垂直に立ち上がる。なお、煙道の大半はSK134が重複していたが、SK134底面下で検出され

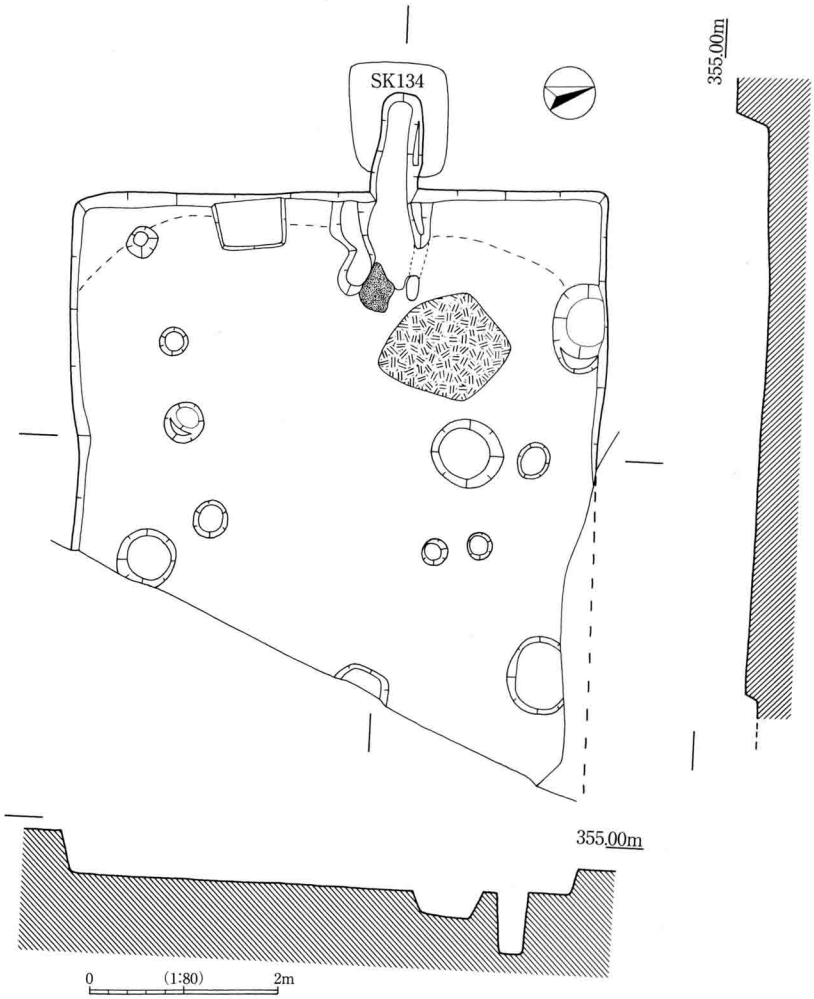

図50　SB106実測図（S＝1/80）

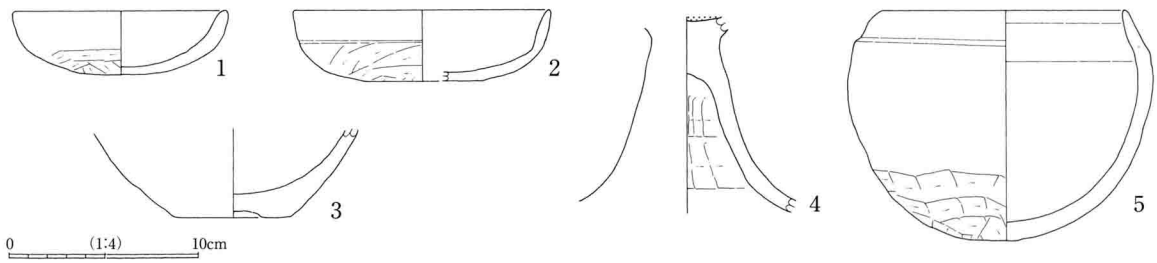

図51　SB106出土遺物実測図（S＝1/4）　1・2・4は上層出土

ている。

遺物はカマド周辺ならびに覆土中より土師器ならびに軽石（浮きか）が出土している。また、住居のほぼ中央部、床面直上からこもで石がまとまって出土している。５の土師器椀はカマド右袖脇の床面直上より出土し、口径13.1cm、器高12.3cmを測る。口縁部は内径して蓋受状を呈し、底部は丸底である。底部外面はケズリ調整が施される。

以上より、古墳時代後期に該当すると考えられる。

遺構確認面では、調査区壁際部分を中心に覆土とは異なる石材や炭・焼土が混じる土層が検出された。この土層の分布範囲は不整方形を呈し、プランの輪郭は極めて不明瞭であった。このためトレンチによる先行掘削も行ったが、堀方を把握することはできなかった。平面検出の結果を併せると、堀方は持たず住居埋没に伴う窪地を利用したと考えられる。

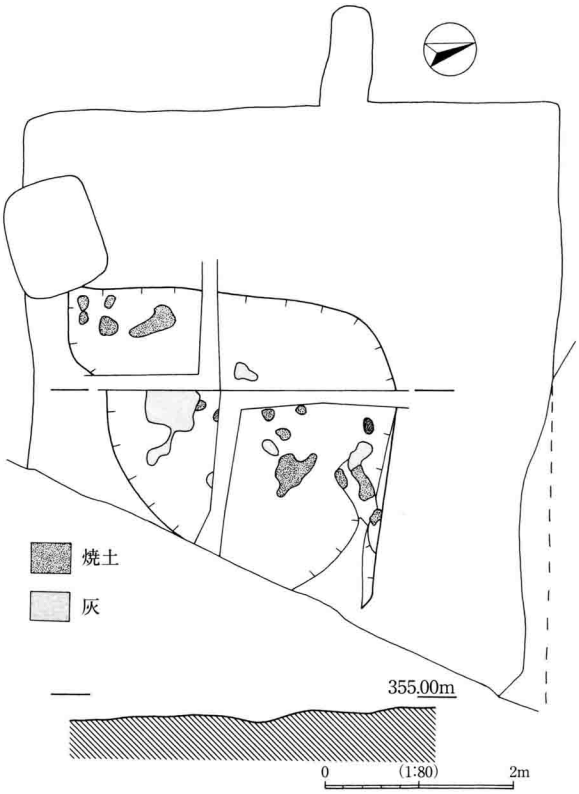

図52　SB106上層焼土検出状況実測図（Ｓ＝1/80）

炭を主体とする土層は周辺に浅く、中心部が確認面下約0.2mと最も厚く堆積する。このほぼ最下層からは焼土ならびに灰の集中が確認された。遺物は土師器杯・高杯が出土している。杯は２点あり、ともに外面下半にケズリ調整を施し、内面は黒色処理されない。高杯は脚部片で脚端部ならびに杯部を欠損する。外面はミガキ調整、脚内面はケズリ調整が施される。

さて、この炭層内出土土師器と床面直上出土土師器を比較すると、型式差はほとんどなく、同一時期と見なされる。このことからは、住居廃絶後、埋め戻しが行われ、埋め戻しの最終段階で中央部の窪地を利用して、焼却が行われたと考えられる。何が焼却されたかは不明であるが、意図的埋め戻しに伴うのであれば、住居廃絶時に発生した廃材や不用品等が考えられる。いずれにせよ、住居が極めて早い段階で埋没したことを示す事例として注意されよう。

SB125（PL－５、PL－Ｘ－３）

住居密集域で検出された竪穴住居である。南半部はSB115・SB120に掘り込まれ、失われている。北側ではSE030ならびにSB116が重複するが、SB116床面下でかろうじて検出され、およそ半分が確認された。

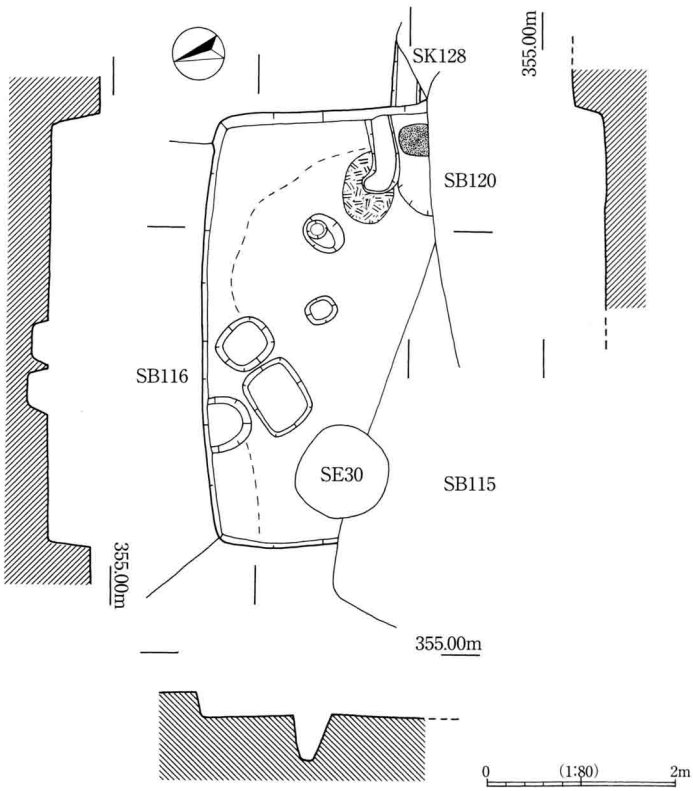

図53　SB125実測図（Ｓ＝1/80）

規模は北壁で4.5m、重複により失われた東壁

で残存長2.3mを測る。床面は貼床であった。柱穴は１カ所検出され、他は重複遺構により失われたと考えられる。カマドは東壁より検出された。火床・左袖・煙道が検出されたが、火床の南側ならびに右袖はSB120により失われていた。火床は約半分が検出され、幅約0.3mの楕円形範囲が非常によく焼けていた。煙道はカマド奥壁で段をなして連結し、ほぼ水平に延びる。煙道先端部はSK128の重複により確認されず、残存長は0.5mを測る。この残存部分の内壁はほとんど焼けていることが確認された。カマド奥壁は住居壁面をそのまま使用し、焼土壁として確認された。左袖部はよく焼けた内壁が明瞭に把握された。袖外側は破壊されたらしく、粘質土の存在が確認できなかったばかりか、土器片や石材の出土がみられた。なお、貼床はカマド下へ確実に続いていることが確認された。袖先端付近からは土師器が組み合わされた状態で出土している。２の土師器甕が逆位の状態で出土し、１の台付甕が台部を欠損した状態で蓋状に逆位にはめ込まれていた。３の甕口縁部ならびに５の底部がこの内部より出土している。最も外側になる２の体部下半全面（逆位では上方）にのみ粘土の付着が観察され、カマド芯材として埋め込まれたと考えられる。以上より、カマドは貼床構築後、まず粘質土によって袖基礎部分を構築、その先端に土師器甕を逆位に設置して芯材として粘質土を用い、最終的に粘土によって構築したと推定できる。

遺物はカマド左袖北側床面上より土師器が出土しているが、全体的に量は少ない。また、カマド周辺からは拳大の河原石の分布が認められた。図化・掲載した遺物は４の甕底部を除き、カマド左袖芯材として利用された土師器甕類である。２はカマド芯材として使用された土師器甕である。口径19.5cmを測る。内外面ともにハケ調整が施され、外面には白色粘土の付着が観察される。５は２の内部より出土した土師器甕底部片である。底部残存は約1/2で、破片として出土した。内外面ともにハケ調整が施される。１は蓋状に被せられた状態で出土した台付甕である。口径15.3cm、器高19.4cmを測る。外面は体部上半から口縁にかけて器壁の荒れが著しく、調整は不明であるが、下半はハケ調整が施される。内面はナデ調整である。３は２の内部より出土した甕である。残存率1/4程度で、口径は15.4cmに復元される。内外面ともに板状工具によるナデ調整が施される。

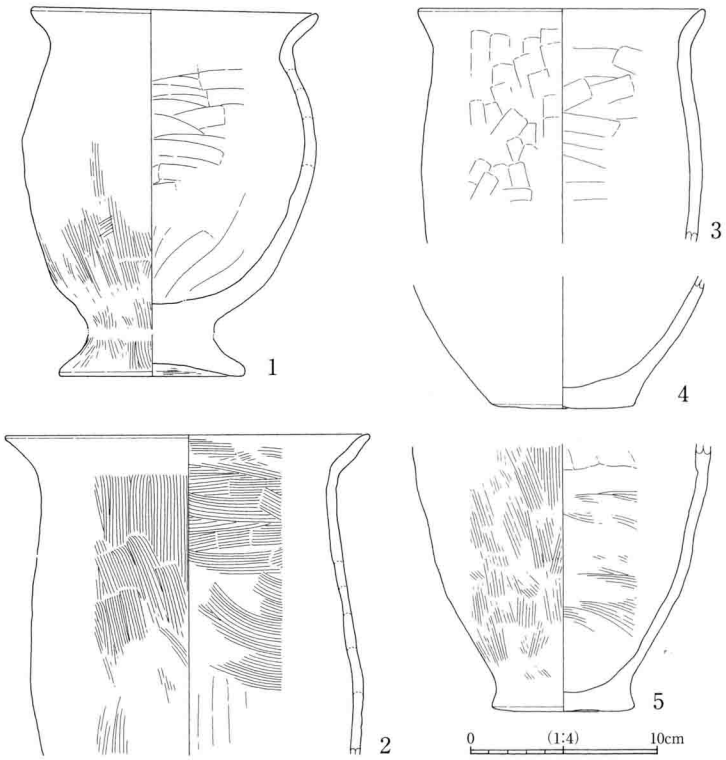

図54　SB125出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）

カマド芯材として使用された土師器群を主体とするが、古墳時代後期に該当すると考えられる。

SB109（PL－５、PL－Ｘ－５）

調査区北東側の住居密集部分で検出された竪穴住居である。6.00×5.35mの方形プランを呈する。重複関係はSB113・SB127が後出住居として上部に重複するとみられる。また、南東隅部をSK132が掘り込んでいる。

床面は住居中央部を中心に貼床が検出された。柱穴は確認されていない。カマドは北壁中央部より検出されている。火床は浅い凹み状の内部より、0.4×0.25mの楕円形として検出された。中央部は黄白色に近く熱変してお

り、よく焼けた状態であった。袖内壁は両袖ともに焼けが弱く、不明瞭な焼土壁が確認されたにすぎない。奥壁部もほとんど焼けていなく、火床を除き全体的に熱変した壁面は良好に残存していなかった。左袖外側は緩い円弧を描く粘質土が検出されたが、右袖では粘質土の検出はなく、残存状況に差が認められる。右袖部外側には焼土粒や炭の散布が顕著で、カマド破壊が左右両袖部で異なる状況であったと考えられる。煙道は右袖側に偏って設置され、壁外に真っすぐ緩傾斜を有して1.5m延びる。ほぼ直線状で、煙出しでの形態変化は認められない。

遺物はカマド内・カマド右袖周辺部の床面・床直上より須恵器を主体とした土器・鉄製品（紡錘車）・鉄滓・軽石が出土している。土器は須恵器を主体とし、図化・掲載したものもすべて須恵器である。須恵器杯は6点出土し、6は貼床直上、3は北東隅部覆土上層、残る4点は覆土中出土である。口径は1・2・4が14.0cm、3・5が13.6cm、器高は5のみが3.7cmで、残りは4.2～4.3cmを測り、非常に規格的な群である。底面はいずれもヘラケズリ調整が認められる。8の高台付杯はカマド火床脇より出土し、口径14.0cm、器高4.1cmを測る。7の盤は東壁際の床直上より出土し、口径15.4cm、器高2.7cmを測る。高台は内面接地である。9の高杯は覆土中出土で、脚端部を欠損する。口縁部はつまみ出し状に強く屈曲し、上面は水平面をなす。10の短頸壷はカマド右袖周辺の床直上から出土している。底部を欠損し、およそ50%の残存である。強く張る肩部外面には自然釉が認められる。11の甕はカマド内・左袖部・覆土中出土片が接合している。復元口径21.6cmを測り、外面は擬格子タタキ、内面は無文当て具痕が残る。13の甕はカマド内出土片で、覆土中出土の14と同一個体になる可能性が考えられる。体部上半は縄蓆文状のタタキ後ナデ、下半は平行タタキが施される。12の甕は煙道煙出し部より出土した小片である。鉄製品には紡錘車がある。軸は折れて残存せず、径約5.7cmの紡錘車部のみが床直上より出土している。鉄滓は覆土中より亀の子状鉄滓を含む258gが出土している。鍛冶遺構や関連遺物の存在は指摘できないが、周辺の遺構に鍛冶関連遺構が存在しないことから、鍛冶関連住居として注意しておきたい。

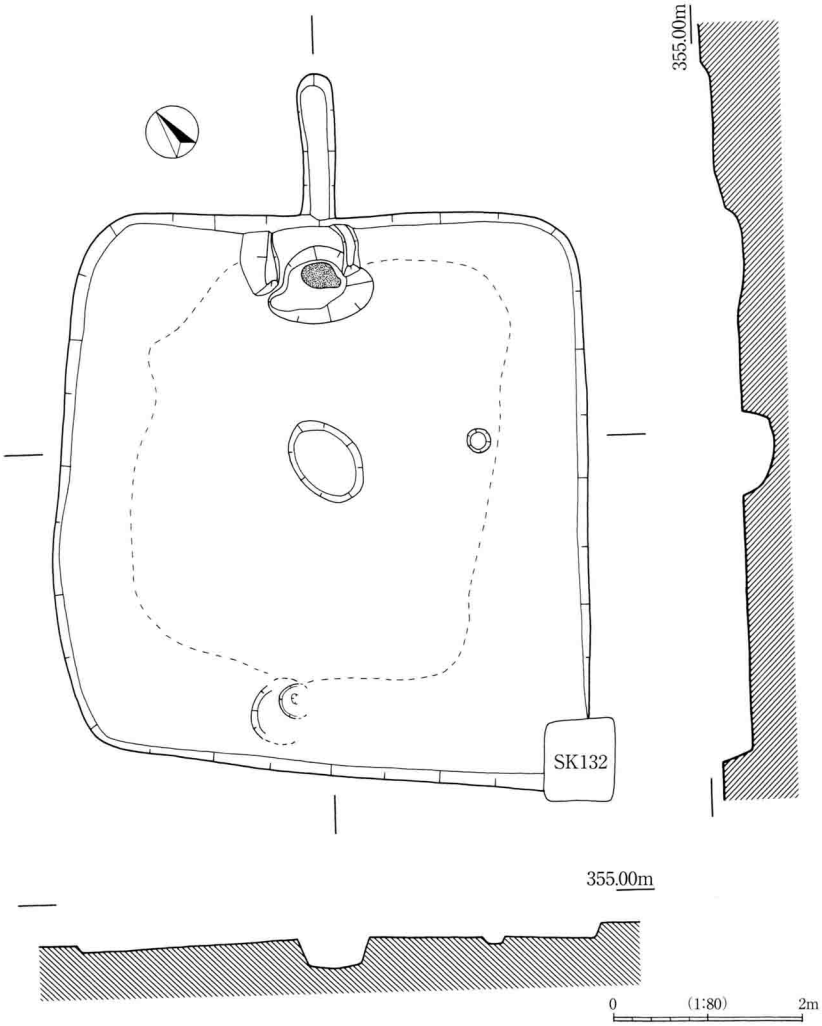

図55　SB109実測図（S＝1/80）

以上の様相より、奈良時代前半期に該当すると考えられる。

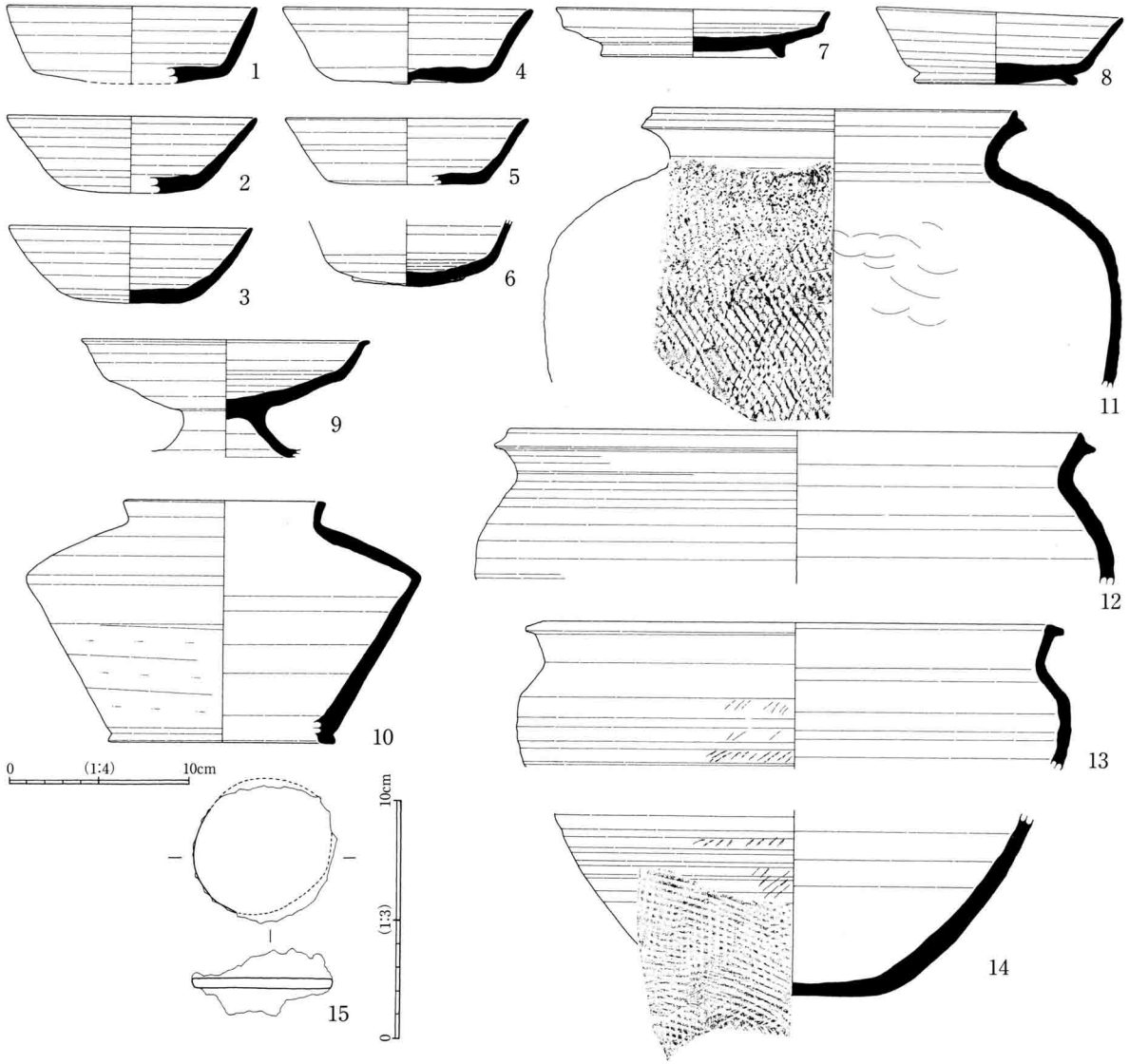

図56　SB109出土遺物実測図（S＝1/4　15のみS＝1/3）

SB118（PL－5）

調査区北西端で検出された竪穴住居である。西側をSB130に、南側をSB112に掘り込まれ、東側は調査区外となる。

床面は貼床が確認範囲で検出された。柱穴は検出されていない。カマドは北壁より検出されている。火床は3.6×2.4mの不整楕円形として検出されたが、東側はピット状の掘り込みがみられることから約半分は失われていると考えられる。黄白色への熱変はみられなかったが、壁面に比してよく焼けていた。袖は壁際で焼土壁が明瞭に検出された。ただし、住居内設置部分については既に破壊されており、右袖部を中心に焼土粒と炭の散布が認められている。煙道接続部では前壁が袖から連続する焼土壁として確認された。煙道は壁外に真っすぐ緩傾斜を有して1.3m延びる。直立する煙出し直前部分では天井部の残存が確認された。煙道底面はU字形を呈するが、天井は平天井となる。

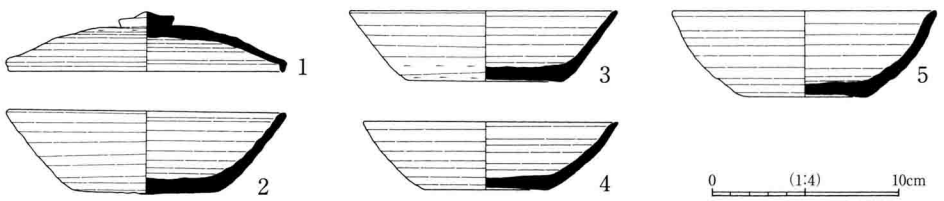

図57　SB118出土遺物実測図（S＝1/4）

煙出しからは須恵器甕片が落ち込んだ状態で出土しており、あるいは上部構造に関連する可能性も考慮される。

遺物はカマド内・煙道煙出部ならびにカマド右袖周辺より、土師器・須恵器が出土している。2の須恵器杯はカマド内左袖壁前に正置された状態で出土している。口径14.8cm、器高4.5cmを測り、底部はヘラケズリ調整が施される。3は北壁東側で出土した須恵器杯で、口径14.2cm、器高3.8cmを測る。平底であるが、底部ならびに外面下端にヘラケズリ調整を施す。4と5は底部糸切り未調整の須恵器杯で、覆土中出土である。1は擬宝珠様のツマミが施される須恵器蓋であるが、SB112覆土中出土片と接合関係が認められる。

以上より、奈良時代後半期と考えられる。

SB116（PL－5、PL－X－5）

調査区のほぼ中央部、住居密集部分で検出された竪穴住居である。規模はおよそ4.5m四方の方形プランを呈すると考えられる。重複関係はSB123・SB125を掘り込んで構築されているが、東側をSB122に掘り込まれている。南壁はちょうどSB115とSB125さらにSE030との重複部分に該当し、これらとともに検討したが、明瞭には把握できなかった。

床面は全面で貼床が検出された。ただし、SE030付近で不明瞭となることから南壁付近までは達していなかったとみられる。柱穴は北西部で1カ所検出されている。カマドは北壁のほぼ中央部で確認された。火床は0.6×0.4mの不整円形として検出され、北側は凹み状に掘り込まれていることから、一部失われていると考えられる。袖は左右ともに残りが悪く、奥壁を中心に焼土壁が確認されたが、袖内壁では右袖で部分的に確認されたにすぎない。煙道は調査区外へと延びる。

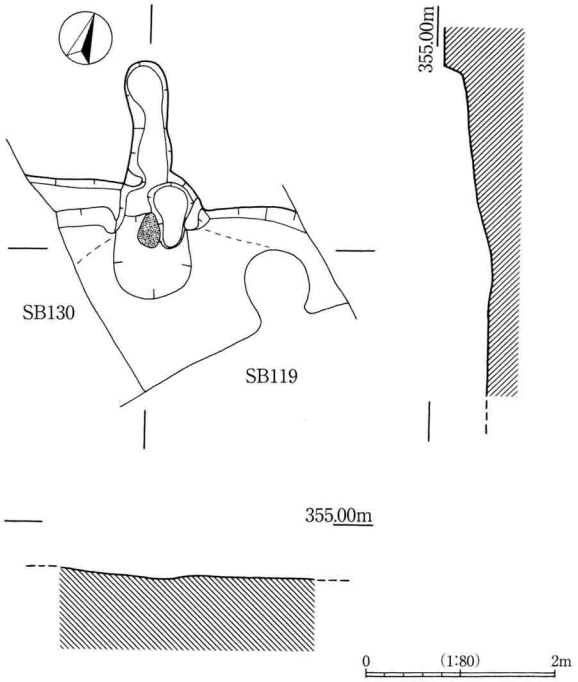

図58　SB118実測図（S＝1/80）

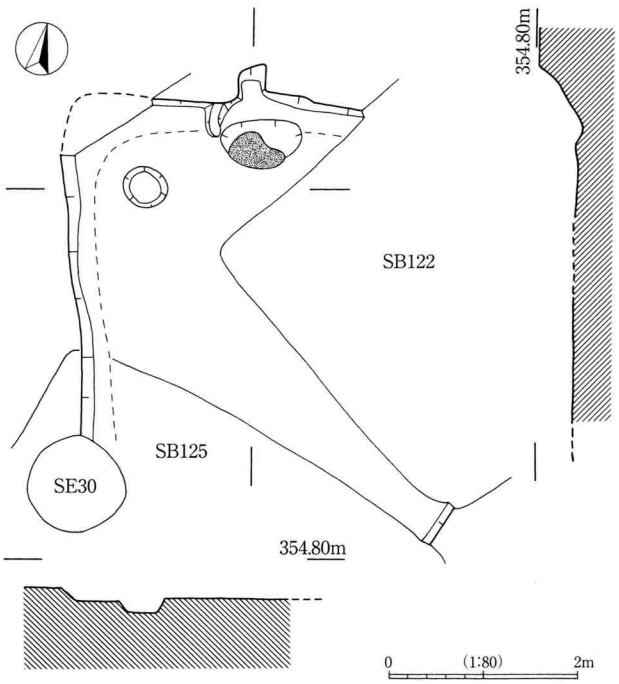

図59　SB116実測図（S＝1/80）

遺物はカマドならびに覆土中より土師器、須恵器、鉄製品、軽石が出土している。1の土師器高台付杯はカマド内より出土している。口径10.2cm、器高4.6cmを測り、内面はミガキ調整後、黒色処理が施されている。須恵器は蓋・杯・高台付杯・甕がある。4の杯がカマド内、8の高台付杯がカマド脇の床面上で、他は覆土出土である。杯は底面ケズリ調整のもの（4・5）と糸切り痕を残すもの（6・7）が共伴する。高台付杯は糸切り後、

ヘラ状工具によって調整が加えられている。鉄製品は断面円形の棒状品１点が覆土上層より出土し、鉄製紡錘車の軸の可能性が考えられる。

以上の様相より、奈良時代後半期に該当すると考えられる。

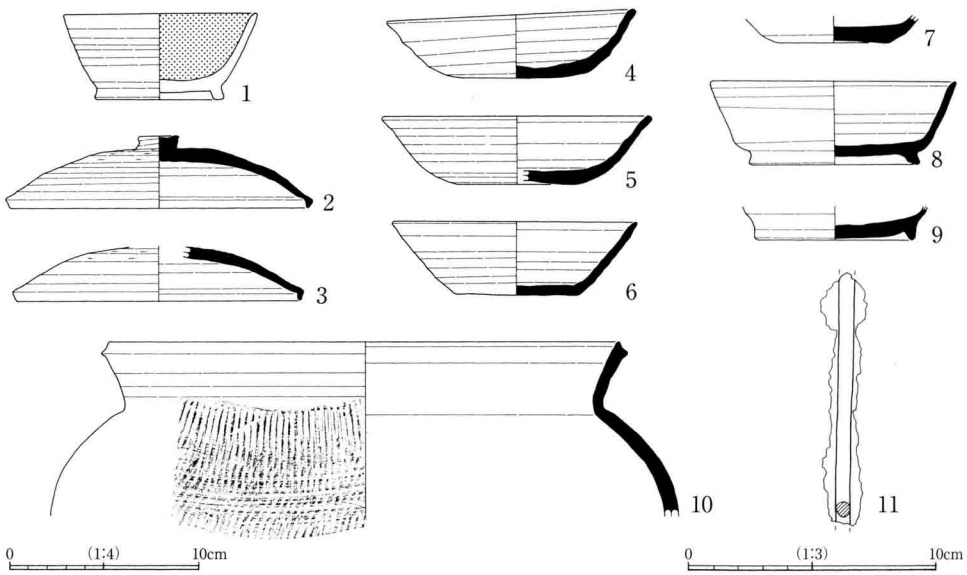

図60　SB116出土遺物実測図（Ｓ＝1/4　11のみＳ＝1/3）

SB115（PL－６、PL－Ｘ－４・５）

竪穴住居密集地域の南西端付近で検出された竪穴住居である。重複関係は南東側をSB120に掘り込まれ、北東側でSB125と重複する。また、西側では上部にSB114が重複し、さらにSE030・SE031に掘り込まれる。重複関係が非常に激しいが、ほぼ全体が確認され、5.5×5.4mを測る正方形プランを呈する。

床面は全面貼床であった。柱穴は２カ所確認されている。位置的には４主柱構造と考えられるが、他遺構との重複がない南側では検出されなかった。カマドは北西壁のほぼ中央部より検出されている。火床は黄白色に熱変

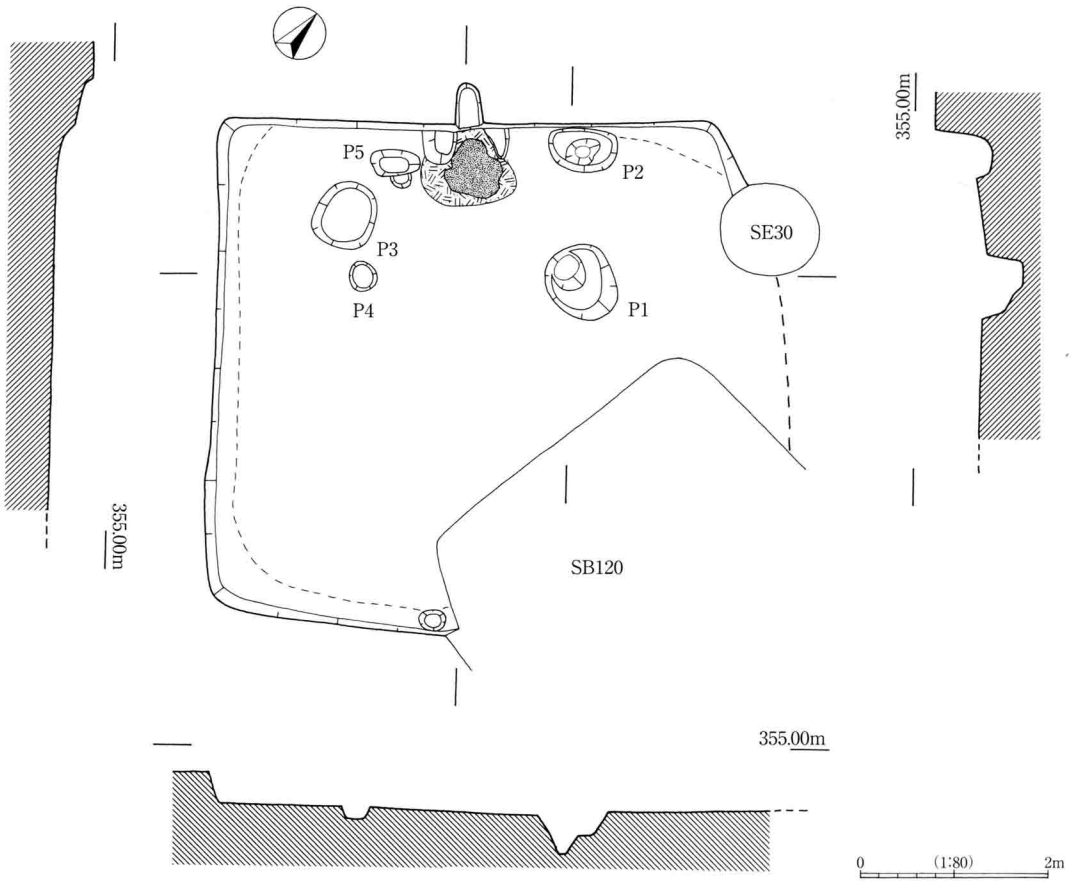

図61　SB115実測図（Ｓ＝1/80）

し、非常に堅く焼けていた。また、火床を取り巻くように炭の分布が確認された。カマド内部は火床より一段高い構造となり、ここを囲むように袖が検出されている。右袖は基底部のみと残存状況が悪かったが、左袖では壁面が明瞭に確認された。カマド外側の粘質土の残存も左袖の方がよく、破壊は右袖を中心に行われたと想定される。煙道はカマド内部と段をなして接続し、緩傾斜を有して、壁外に0.4mほど延びる。

遺物はカマド内・周辺を中心に土師器・須恵器が出土している。15の土師器甕はカマド内より出土した。基本的にナデ調整であるが、外面下端にヘラケズリ調整を施す。須恵器には蓋・杯・高台付杯・甕がある。蓋は２点あり、口径14.0～14.1cmを測る。１は高い宝珠様のつまみが貼付けられる。１は床面上、２は覆土中出土である。杯は６点掲載した。口径は12.6～13.2cmを測り、３のみが14.3cmと大きい。底面は３～６が静止ヘラケズリ調整で、７と８は糸切り痕を残す。３はＰ１内、６・８はカマド右袖周辺ので床面直上、他は覆土中出土である。高台付杯は４点掲載した。口径は12.4～13.6cm、器高は3.3～3.8cmを測る。底部は回転ケズリ調整が施され、下方へ湾曲気味であるが、高台の中に収まる。高台は基本的に外面接地であるが10のみが内面接地となる。9はＰ３覆土上層、10はカマド内、11・12は覆土中出土である。甕は口縁部片が２点ある。14は広口短頸で覆土中出土、13は口径27.6cmを測る中型甕でSB120との重複部にほど近い南東側床面上より出土している。鉄製品は片刃鏃とみられる製品が覆土中より１点出土している。残存長10.2cmを測り、先端部には刃が確実に認められる。玉類は床面上より滑石製臼玉が１点出土している。直径は0.5cmを測り、擦痕をよく残す。

以上の様相より、奈良時代後半期に該当すると考えられる。

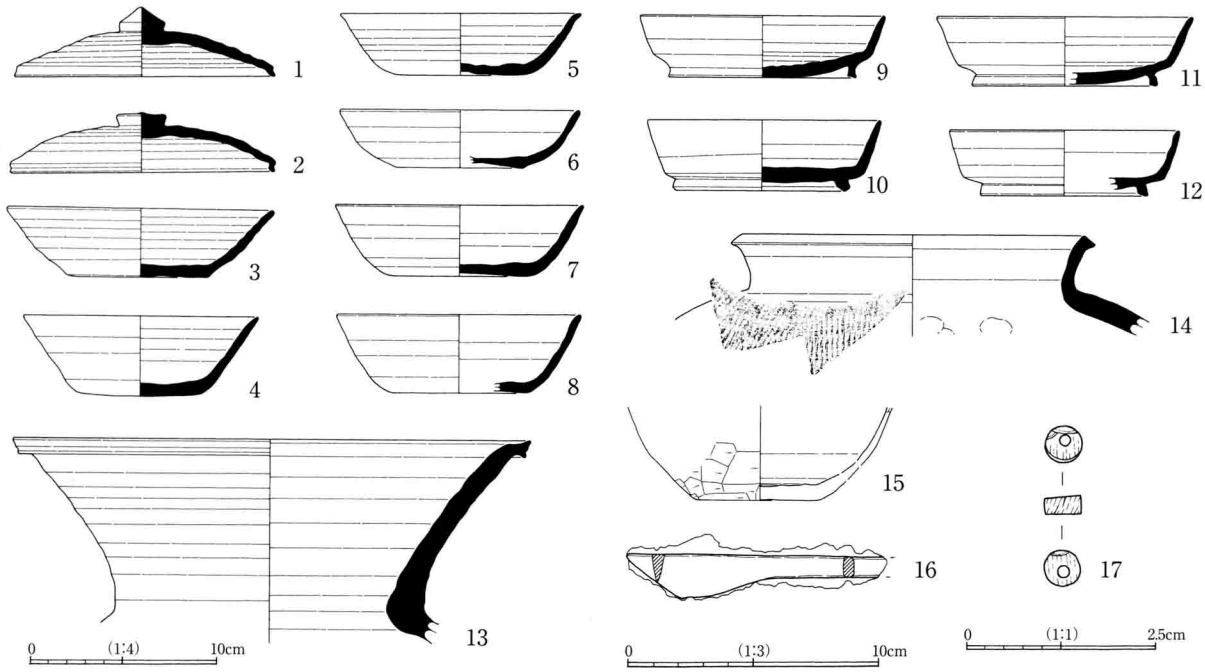

図62　SB115出土遺物実測図（Ｓ＝1～5；1/4　16；1/3　17；1/1）

SB112（SB119）・SB121（PL－４、PL－Ｘ－５）

SB112は調査区北西端部で検出された竪穴住居で、北東側は調査区外となる。SB117・SB130ならびにSE029が上部に重複し、先行するSB118を掘り込んで構築されている。確認できる規模は南北辺で5.7m、東西辺の残存長は4.0mを測る。

床面は明瞭な貼床でこそないが硬化面として検出された。柱穴は主軸上に位置するＰ７と南北軸線上に位置するＰ１が形態や掘削深度から該当する可能性が考慮されるが、一般的な４主柱構造としては不自然な位置に当たる。不規則な柱配置構造とも考えられるが、明確な柱穴が存在しない可能性も考慮しておきたい。北壁の壁外に

飛び出す土坑内からは焼土が検出された。また、この焼土土坑前面に位置するＰ６からは移動された焼土が検出されている。火床・袖ともに痕跡すら検出されなかったために確定的でないが、完全破壊されたカマド跡と想定することはできよう。カマド前面から西壁に当たる部分とほぼ中央部では床面が明瞭でなかったために掘り下げを行った。底面は黄褐色基盤層で、住居堀方と考えられる。

遺物は覆土中より土師器・須恵器・鉄製品が出土している。３の須恵器杯は口径13.3cm、器高4.7cmを測る。底部は丸みを帯び、ケズリ調整が施されている。２の須恵器大甕はＰ４覆土中出土である。沈線二条による区画帯内に粗い波状文が施文されている。１の須恵器壷は体部片である。外面は摩耗・剥離が著しいが、タタキ調整が確認でき、内面青海波文がよく残る。４は土師器甕で内外面ともにナデ調整を主体とする。鉄製品は鉄刀子片と考えられる９のほか、小片が１点出土している。

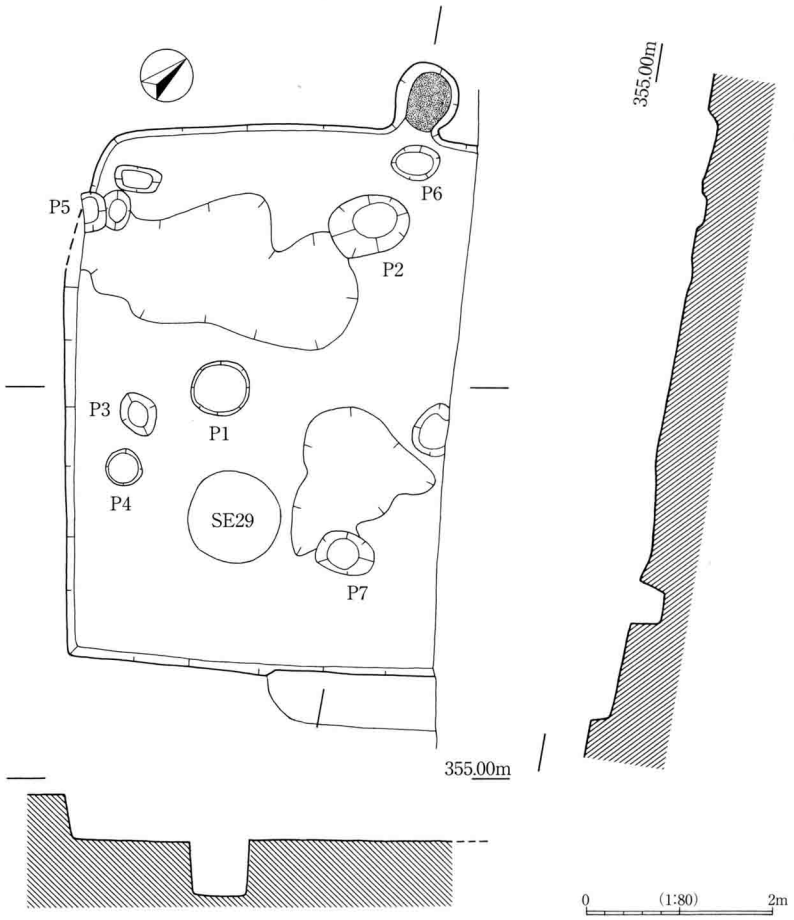

図63　SB112実測図（Ｓ＝1/80）

SB119は前述したカマド前面の土坑Ｐ２をもって、別住居の重複を想定し、住居番号を付したものである。しかし、検出された焼土は壁面等が焼けたものではなく、土が混じる二次堆積層であることが確認された。５と６の須恵器杯はこのＰ２を中心に出土したものである。５は口径13.6cm、器高3.5cmを測り、底面ならびに外面下端部にケズリ調整が施される。焼成は軟質で赤褐色を呈する。６には火襷が観察される。

Ｐ２がSB112カマド破壊に伴う焼土を移動したと考えられることや６の須恵器杯がSB112覆土出土破片と接合したこと、出土土器に時期差が見いだしがたいことなどよりすれば、独立した別住居とする理由はどこにもなく、同一住居と判断する。

以上より、SB112とSB119は同一住居跡で、奈良時代後半期に該当すると考えられる。

SB121　SB112の調査開始直後に、検出プランのほぼ中央部で炭や灰をほとんど伴わない焼土層が検出され、焼土上面に土器片が散乱する状況が確認された。別住居の重複を想定して遺構プランの把握に努めたが、堀方は確認できなかった。また、焼土堆積直下の状況を検討したが、緩傾斜面に焼土が堆積している状況で、床面等の存在は認められなかった。このため、焼土層と土器群をSB121として取り上げ、さらに下層の調査を継続したが、その後これに関わる遺構は検出されていない。

出土遺物には土師器がある。８は土師器甕で焼土脇より横倒しの状態で出土した。外面ハケ調整、内面ナデ調整が施される。７は土師器高杯で、焼土上より出土している。内外面ともにミガキ調整、杯内面は黒色処理が施

される。脚内面は強いヨコナデにより平滑に整えられている。図化・掲載した土師器２点は古墳時代後期後半代に属するとみられるが、このほかに古墳時代前期から古代にかけての土師器片が確認される。また、これらの土師器は焼土上より出土しているが、被熱の痕跡は観察されない。

以上の状況からは、SB121はSB112埋没過程における凹地を利用して、焼土層の形成ならびに土器の投棄が行われたものと考えられる。焼土層の形成も炭・灰を伴わず、火元とみられる地点が明瞭でないことから、ここでの焼成によるものではなく、別箇所からの移動・投棄の可能性が高いと考えられる。また、図化・掲載したSB121出土土師器が古墳時代後期後半代、下層遺構であるSB112は奈良時代であるため時間的前後関係の矛盾が生じているが、これはSB121が幅広い時代の遺物が混ざる点を含めて埋没過程での投棄結果とした先の想定を補強するものとなる。ただし、これら投棄された焼土層や土器群がどこからもたらされたのかという問題に対する回答は容易ではない。継続的居住地として利用される中で、土地の凹凸を解消する造成は規模の大小を問わず繰り返し実施されたと予測され、そうした中で形成された可能性を考慮しておきたい。

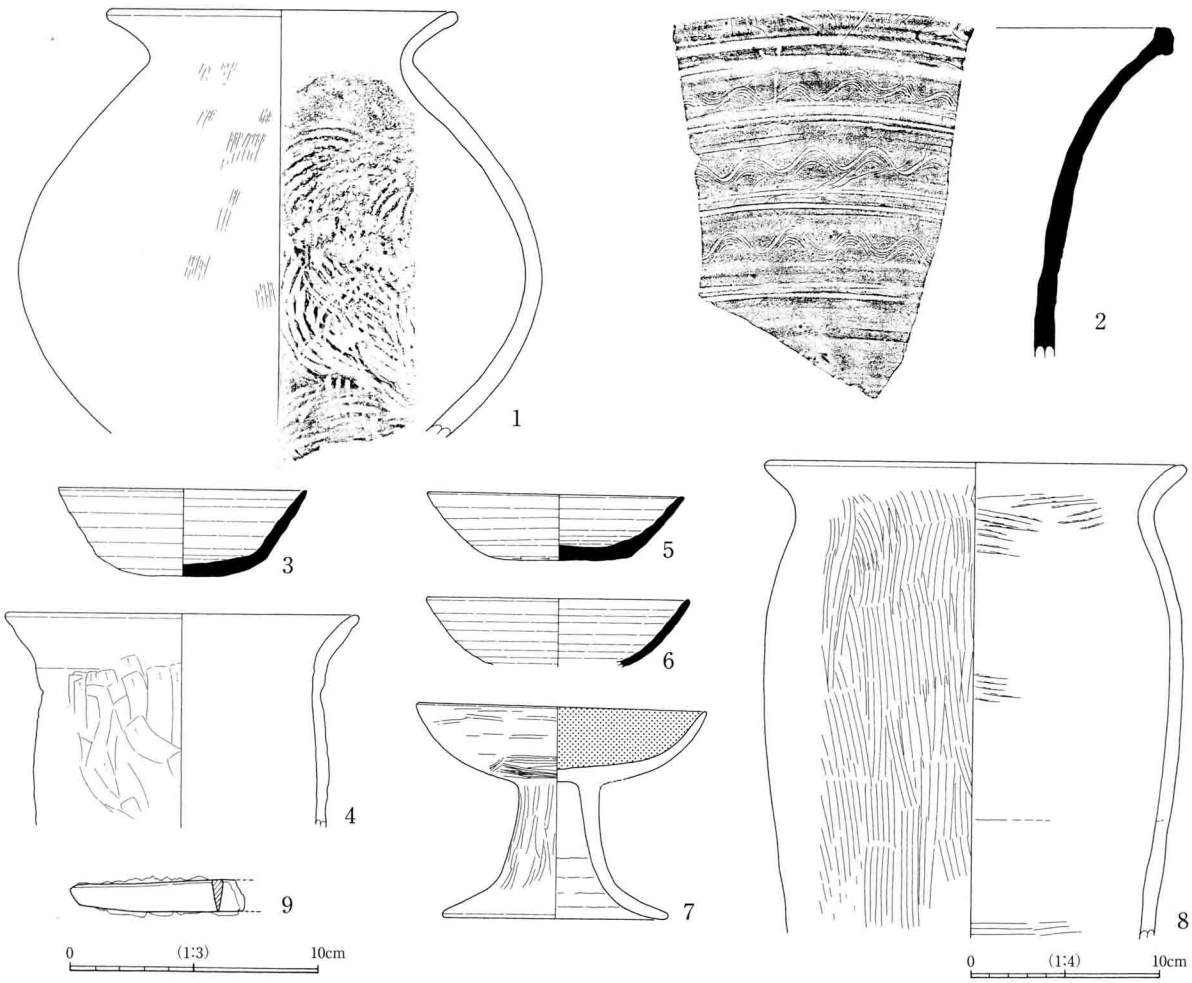

図64　SB112・SB119・SB121出土遺物実測図（S＝1/4　9のみ1/3）

1～4・9；SB112　5・6；SB119　7・8；SB121

SB107（PL－６）

調査区北東側の住居密集域で検出された竪穴住居である。西側は調査区外となり、確認された南北辺は6.06mを測る。重複は周辺に分布するSB113・SB127・SB131を掘り込んでいて、上部に重複する住居遺構は確認されなかった。

床面は貼床が検出されている。東壁では壁際まで貼床が広がり、ほぼ全面が貼床であったと考えられる。柱穴は５箇所検出されている。Ｐ５は位置が不自然であるが形態は柱穴と捉えられる。位置的に該当するとみられるＰ６とＰ２は非常に浅い。これに対し、Ｐ７とＰ３はＰ５同等の深さ・径を有するが、住居堀方に対して不規則な配置となる。重複による他住居の柱穴とは考えがたいことから、特異な構造、あるいは建て替えの可能性も考慮しておきたい。なお、柱穴の前後関係については把握できなかった。カマドは検出範囲内では確認されていない。ただし、北壁の調査区壁際で焼土塊が検出されている。土が混ざる焼土が床面に貼り付いた状態で検出されており、カマド破壊に伴い移動された焼土である可能性が高いと考えられる。また、南側Ｐ４周辺には床面直上に薄い炭層の存在が確認された。

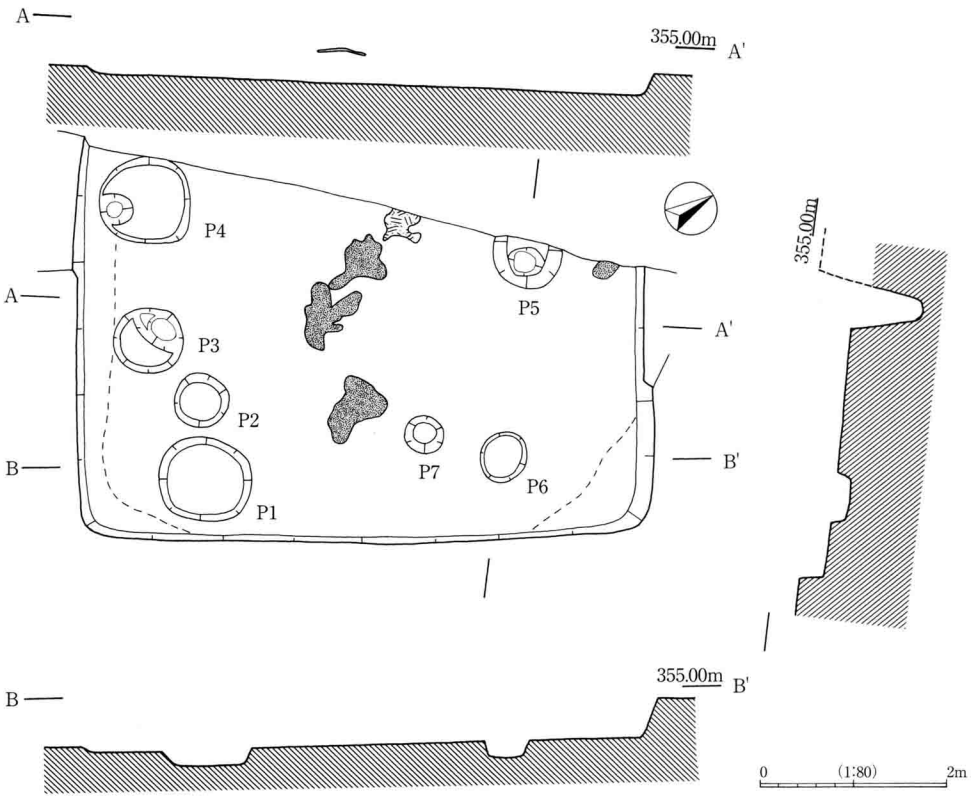

図65　SB107実測図（Ｓ＝1/80）

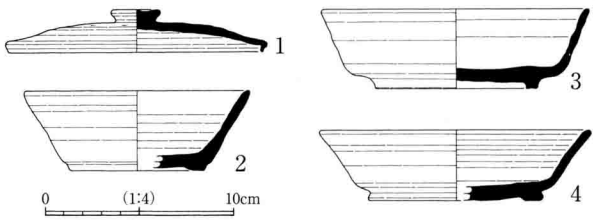

図66　SB107出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）

写真13　SB107出土鉄滓

遺物はカマドと考えた焼土塊周辺ならびに覆土中より、土師器・須恵器・鉄滓が出土している。図化・掲載した土器は蓋ならびに高台付杯で、すべて須恵器である。３の高台付杯は口径14.4cm、器高4.2cmを測り、高台は水平接地である。底面は回転ヘラケズリ調整が施される。２・４も高台付杯であるが、１も含めて破片の復元実測である。いずれも覆土中層より出土している。なお、図化・掲載した遺物も含めて、床面からの遺物は少なく、また、残存状況が良好なものも少ない。流動滓を含む鉄滓は覆土中より1350g出土している。他住居に比して出土鉄滓の重量は群を抜いており、混入とは考えがたい。ただし、集中的な出土傾向はなく、覆土全体より出土している。確認範囲では鍛冶に関わるとみられる遺構の確認はないが、カマド前面に柱穴状のピット（Ｐ５）が存在する特異な構造や南側での炭層の検出は西側調査区外に鍛冶関連遺

構の存在を示唆するに充分と捉えられる。

また、住居中央部の確認面直下では焼土・炭ならびに獣骨とみられる骨片が検出された。図65の断面図A－A'に示したとおり焼土は確認面直下で完結し床面まで達していない。当初、別遺構の重複を想定して精査したが、堀方は確認されなかった。少量であるが、この焼土にまじって鉄滓の出土もみられた。ただし、出土量は多くなく、熱変の少ない焼土の状況からも鍛冶施設であった可能性は低いと考えられる。住居埋没過程の凹地を利用した焼却施設と考えられる。

以上の様相から、平安時代と考えられる。

SB117（PL－6）

調査区北東端部、SB112上に重複して検出された竪穴住居である。確認された一辺は南壁で3.35mを測る。北東側は調査区外となるが、検出されたカマドを中央と仮定すると東西辺は3.4mとなり、正方形プランを呈すると想定される。

床面は貼床が検出された。柱穴は1箇所の検出に止まる。対応する南東側の精査を行ったが、検出はされなかった。カマドは東壁で検出されたが、袖・煙道などは残存していなく、火床が検出されたにすぎない。

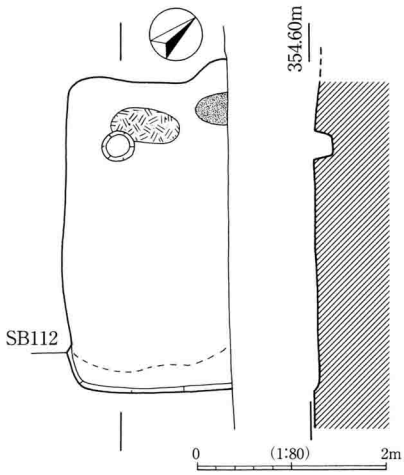

図67　SB117実測図（S＝1/80）

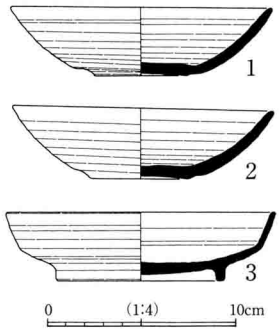

図68

SB117出土遺物実測図

（S＝1/4）

遺物は弥生土器・土師器・須恵器・灰釉陶器の破片が覆土中より出土している。図化・掲載した3点はいずれも須恵器である。1・2は須恵器杯で口径13.9cm、器高3.7～3.8cmを測る。底面には糸切り痕を明瞭に残し、ともに火ダスキが認められる。3は高台付杯で高台は水平接地である。

以上の様相より、平安時代に該当すると考えられる。

SB122・SB123（PL－6、PL－X－3・4）

調査区のほぼ中央、住居密集域で検出された竪穴住居である。SB122がSB123の内部に完全に重複するため、併せて報告する。

SB122は4.07×3.40mを測る方形プランを呈する。SB116・SB123を掘り込んで構築され、東隅部はSE032の重複によって失われている。

床面は貼床として検出された。主柱穴は検出されなかったが、北西と南西隅部で浅いピットが検出されており、支柱穴となる可能性が考えられる。カマドは北東壁のやや東寄りで検出されている。火床は中央やや左袖側が黄白色に熱変し、非常によく焼けていた。袖は両袖ともに焼けた内壁が検出されたが、外側の粘質土はほどんど残っていない。特に左袖部の残りが悪く、ここを中心に破壊行為が行われたと考えられる。カマド奥壁は住居壁をそのまま使用し、袖部内壁同様に焼土壁として検出された。煙道はカマドのほぼ中央で段をなして連結し、わずかな傾斜をもって壁外に約1.5m延びる。なお、この煙道連結部では天井が確認され、煙道の断面形態は円形を呈する。また、カマド内壁にみる形態は非常に明確な方形を呈する。

遺物はカマド内を中心に土師器・須恵器が出土している。また、覆土中より土玉・軽石の出土がみられた。1の須恵器蓋は完形品で、口径12.8cm、器高3.1cmを測る。北側隅部覆土最上層より出土している。2と3の須恵器杯はともに口径13.0cm、器高3.8cmを測り、底部に糸切り痕を残す。口縁部で肥大化する形態的特徴も共通し、

生産の同時性を含めた規格性の高さが指摘される。両者ともにカマド右袖前面より出土している。3の底部には「囲」の墨書が認められる。4は覆土中出土の須恵器杯で、口径13.0cm、器高3.9cmを測り、底部にはヘラケズリ調整が認められる。5は土師器甕で、口径24cmを測る。内外面ともに胴部中位以上はロクロによるナデ、以下は縦方向のナデ調整が施される。カマド火床上ほか、SB116重複部分からも出土し、破片が広範囲に広がっていた点が注意される。土玉は直径0.7cm、孔径は0.1cm程度を測り、約半分を欠損する。表面は丁寧に磨かれ、光沢を有している。

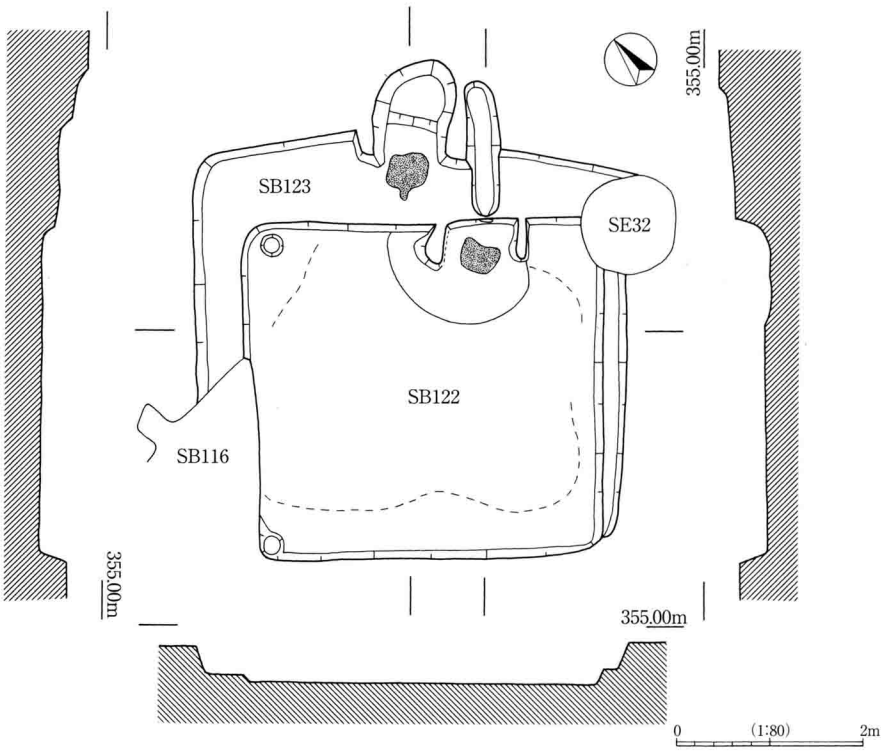

図69　SB122・SB123実測図（S＝1/80）

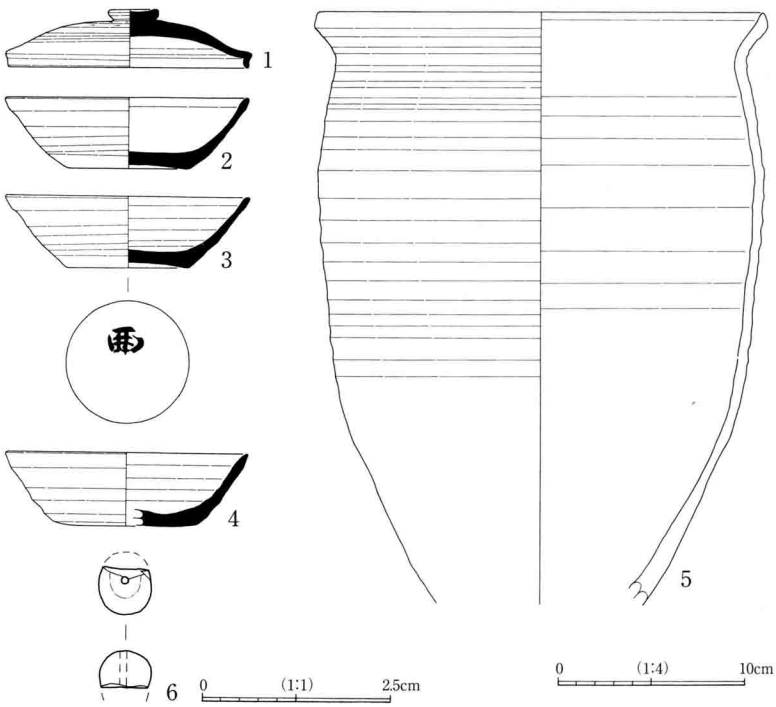

図70　SB122出土遺物実測図（S＝1/4　6のみS＝1/1）

以上の様相より、平安時代に該当すると考えられる。

SB123は4.6×4.0mを測る方形プランを呈すると考えられる。SB116・SB122の重複により、南側の大半が失われている。

床面は脆弱で貼床・硬化面などは確認されなかった。覆土である暗褐色粘質土を掘り下げた段階で、水平面が確認されたため、床面と判断した。柱穴は検出されていない。カマドは北東壁のほぼ中央部で検出された。火床は0.4m四方の検出範囲全体が黄白色に熱変し、非常によく焼けていた。袖は残存状況がよくないが、左右ともに袖先端部に立石の設置が確認された。左袖は板状石を立てているが、石材内側では焼土壁が検出され、石材を粘質土で覆っていたと考えられる。この焼土壁はカマド奥壁まで連続して検出され、石材の使用は先端の一石のみであった。右袖先端は柱状石を立てている。この柱状石は石材の割れによって生じた平坦面をカマド内面に向けて設置されていた。また、奥壁手前側に板状石がもう一石認められる。右袖

の残存状況はよくなく、焼土壁はまったく検出されていないが、二石を結んだラインが左袖と平行することから、ここにカマド内壁を求めることができる。石材が粘質土に覆われていたか否かは、石材に直接の熱変がみられないことから左袖同様であったと考えられる。煙道は土坑状の形態を呈する。カマド奥壁で段をなして接続し、緩やかな傾斜を有して壁外に0.6mほど延びる。

遺物はカマド火床直上ならびに右袖前面より土師器・須恵器が出土している。須恵器は蓋・杯・高台付杯が各1点ずつ出土している。蓋は口径16.7cm、器高4.7cmを測る大型品である。回転ヘラケズリは1/3以下の範囲に施される。杯は口径12.9cm、器高3.8cmを測り、底部に糸切り痕を明瞭に残す。高台付杯は口径16.6cm、器高7.8cmを測る大型品で、高台は外面接地である。土師器は甕が3点出土している。4は小型甕で口径13.7cm、器高13.0cmを測る。外面はハケ調整で内面はナデ調整が施される。底部には木葉痕が明瞭に残る。5は口径16.6cmを測るナデ調整甕で、外面体部下端にケズリ調整が施される。6は口径25.0cmを測るハケ調整甕で、口縁部は鍔状に大きく外反する。須恵器蓋・杯・土師器甕5はカマド右袖前面（SB122煙道下）、須恵器高台付杯と土師器甕4・6はカマド火床上部より出土している。なお、土師器甕5は右袖前面と火床上部から出土した破片が接合している。

以上の様相より、奈良時代後半期に該当し、重複関係よりSB116に先行すると考えられる。

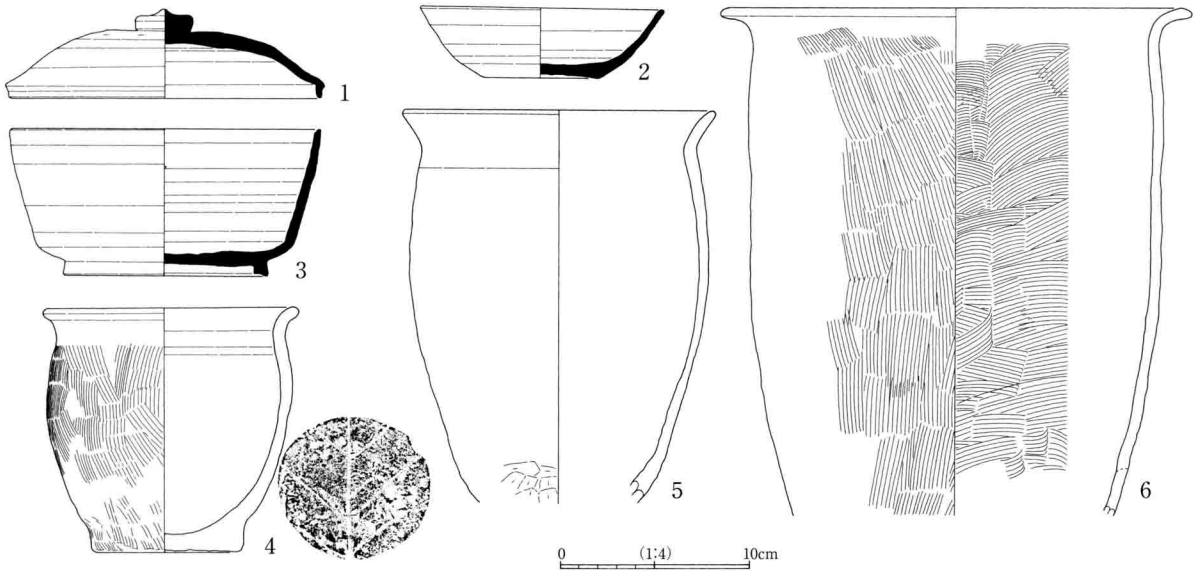

図71　SB123出土遺物遺物実測図（S＝1/4）

SB130（PL－7、PL－X－4）

調査区北端付近で検出された竪穴住居である。煙道部が調査区外となるが、ほぼ全容が把握できた。3.90×5.40mを測る長方形プランを呈する。重複関係はSB118・SB129を掘り込み、東側でSB112に掘り込まれる。

床面は中央から東側にかけて貼床が検出された。柱穴は3箇所ピットが検出されている。このうち、住居中央部で検出されたＰ２はカマド脇で検出されたＰ３と覆土等が類似し、一連の遺構を形成する可能性が考えられる。対になる同規模の柱穴が検出されなかったことからも別遺構と判断される。また、Ｐ１は規模が小さいうえ、他に同等の遺構がみられないことから積極的に柱穴と評価することは躊躇され、柱穴は存在しなかった可能性を考えておきたい。カマドは西壁のほぼ中央で検出された。火床は0.6×0.4mの不整楕円形として確認され、中央左袖寄りなど部分的に黄白色の熱変が認められた。袖はカマド内壁がまったく残存せず、両袖ともに若干の焼土塊と石材片が認められたにすぎない。石材は凝灰岩とみられる割れた石材片で、左袖で1片、右袖で2片検出された。石材片の存在から石芯構造であった可能性が想定されるが、周辺に他の石材の散布は認められなかった。袖

部の検出状況を併せて、破壊が著しかったことを示していると考えられる。煙道は調査区壁外へ繋がることを確認した。

遺物は覆土下層から床面上にかけて、土師器・須恵器が出土している。また、覆土中より鉄製品片・耳環が出土している。1は須恵器杯で口径12.8cm、器高3.8cmを測り、底部には糸切り痕を残す。3は土師器甕で非ロクロ整形である。体部外面はケズリ調整が施され、内面はナデ調整である。鉄製品は長さ3.5cm前後の棒状破片が2点出土している。1点は刃部を有し、小型刀子の関部付近の破片とみられる。もう1点は錆化が著しいが、刀子柄あるいは鉄鏃茎部破片の可能性が考えられる。耳環はSB118との重複部分の覆土最上層より1点出土している。銅地金張で、外環径1.9cm、内環径1.2cmを測る小型品である。切目は0.2cmと狭い。なお、住居重複部の覆土最上層より出土しており、本住居に伴う可能性は低いと判断される。

以上より、平安時代と考えられる。

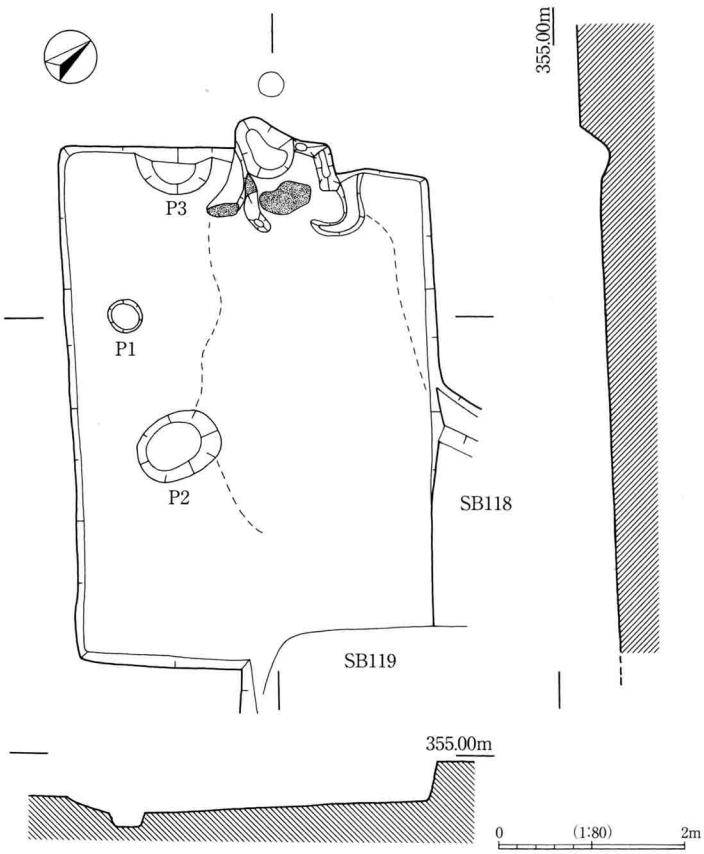

図72　SB130実測図（S＝1/80）

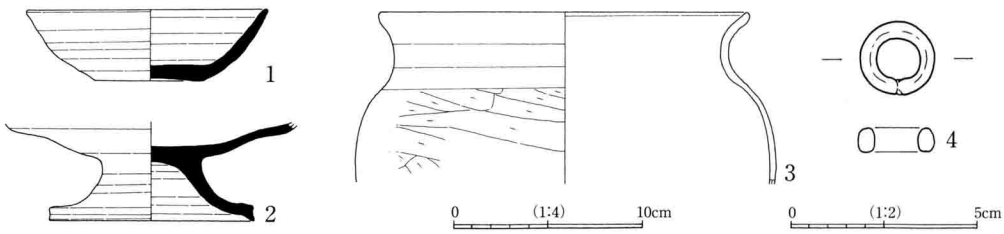

図73　SB130出土遺物実測図（S＝1/4　8のみ1/2）

SB108・SB103（PL－7、PL－X－5）

SB108　調査区のほぼ中央、南壁側で検出された重複する竪穴住居群の1軒である。SK126・SK129に掘り込まれ、SB110・SB132・SB103の上部に重複する。

検出時には住居・土坑等と複合重複していたため、形態把握が非常に困難な状況であった。北壁は東側でSK129、西側でSK126とSK151と重複関係を有し、カマド痕跡によってようやく把握できた。カマド以東は壁面を確認したが、北東隅部はSK129による掘り込みにより明瞭に把握できていない。西壁も平面検出では判然とせず、徐々に西側へ拡張しながら検出を行った。南西側ではほぼ把握できたと考えられるが、北西隅部はSK151との重複により明確に把握することはできなかった。東壁は調査区壁で存在が明らかであったSB103の調査を先行したため、確認できなかった。南壁は壁面を確認している。以上の調査過程における四壁の把握状況から、北壁北東側と南壁が平行しないことは確実で、一辺4.5m程度の不整方形を呈すると考えられる。

床面は貼床が確認された。柱穴は検出されていない。カマドは北壁中央で痕跡が認められた。火床・右袖の痕跡が検出されたが、SK126の重複により左袖はまったく残存していなかった。火床は黄白色に熱変した部分がご

く小範囲で認められたが、全体的に床面より浮いている。焼土層は住居中央部や南側床面上でも認められ、カマド破壊に伴う二次堆積と捉えられる。右袖は若干の焼土層が確認されたにすぎず、内壁は残存していなかった。

出土遺物には、土師器・須恵器・水晶製三輪玉・鉄製品・鉄滓がある。土師器・須恵器はカマド前面付近を中心に覆土中位より出土している。須恵器は覆土中より出土した3点を図化・掲載した。1は口径12.7cmを測る小型の蓋である。2は口径13.4cm、器高3.9cmを測る杯で、底部は糸切り痕を残す。土師器は甕が出土している。4～6は外面にケズリ調整が施される非ロクロ甕である。5はカマド右袖前面の床面直上、4と6は覆土中出土で、6はSK125出土片と接合している。7はハケ調整甕で、口径11.1cm、器高28.1cmを測る。底径10.7cmを測り、木葉痕を残す平底より緩やかに外傾し、頸部直下で胴最大径となる。口縁は短いが鋭く外反する。住居中央覆土中より出土している。水晶製三輪玉は図74に●として示した覆土上層から1点出土している。長さ3.3cm、高さ2.0cm、幅2.0cmを測る完形品である。なお、周囲に本品が付着していたと考えられる遺物や有機物の痕跡ならびに他の玉類は確認されず、単独での出土である。鉄製品は覆土中より3点出土している。9は長さ4.8cmを測る棒状品で、断面は方形を呈する。頭部が折り返されたかのように肥大化しており、釘の可能性が考えられる。他に種別不明片が2点ある。鉄滓は覆土中より530g出土している。住居範囲全体から散発的に出土し、集中的に出土する傾向はみられなかった。

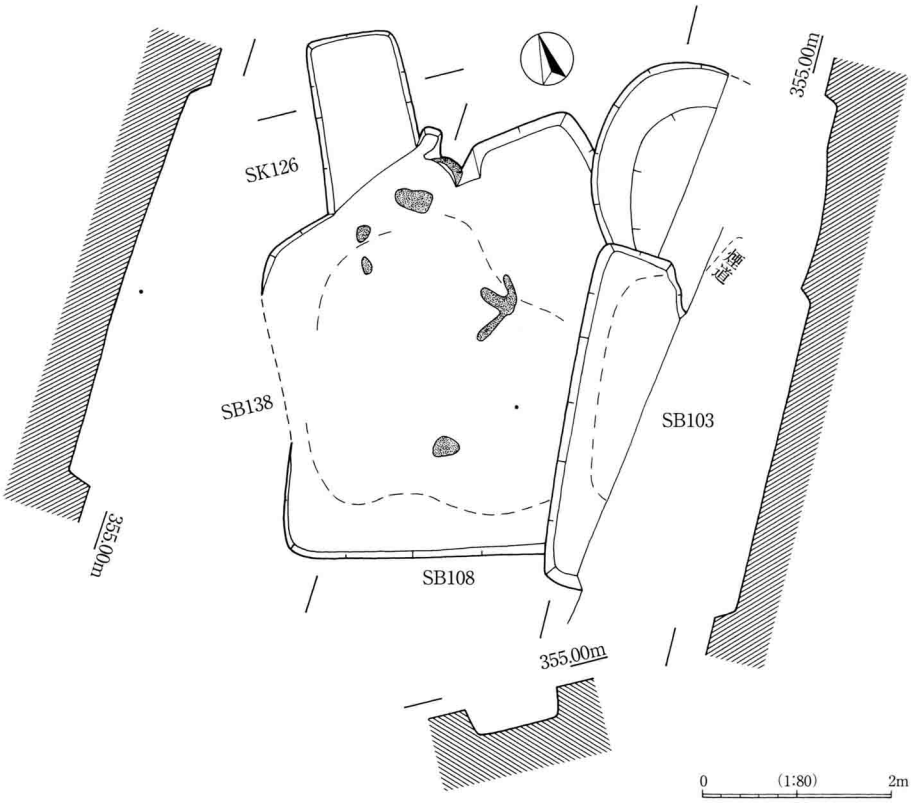

図74　SB108・SB103実測図（S＝1/80）

以上の様相より、平安時代に該当すると考えられる。ただし、遺物はカマド周辺を中心とするが、いずれも覆土中位より上層出土で本住居との直接の関係性については問題点が残る。特に土師器甕7と水晶製三輪玉は出土の層位や状況から積極的に本住居帰属と考える根拠はみられず、遺物の年代観に基づく時間的齟齬とも矛盾しない。また、鉄滓が少なからず出土しているが、集中的な出土状況や鍛冶関連遺構の存在が確認されず、他の遺物の帰属性を含めて直接の関連性を評価する状況ではなかった。周辺遺構を含め、本地点からは鉄滓の覆土中への混入が多くの遺構で確認できることから、同様な背景を考えておきたい。

SB103　SB108下に位置する竪穴住居である。南北辺は3.62mを測り、東側は調査区外となる。

床面は住居中央部を中心に貼床が検出された。柱穴は検出されていない。カマドは調査区東壁で焼土・炭・煙道の痕跡が確認され、北壁に設置されたと考えられるが、調査区内で面的に遺構としては捉えていない。

遺物は覆土下層から床直上にかけて、須恵器杯・土師器甕が出土している。杯は口径12cm代（1～3）と